

川柳端

昭和四十二年八月二十五日印刷
平成三年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷七七二号



日川協加盟

No. 772

九月号

平成三年度 同人総会と

二賞表彰 本社十月句会

日時 10月6日(日) 午後1時開場
会場 大阪府中小企業文化会館

(☎771-4096)

。地下鉄「谷町9」⑤番出口から谷町筋南へ
徒歩7分東入る

。近鉄「上本町」下車、南西へ徒歩10分

同人総会 午後2時から

〔議事〕①会計報告②会計監査報告

③事業経過報告④その他

本社句会 午後5時半から

同人総会会場略図



川柳塔社

第5回 NHK学園川柳全国大会

日時 10月27日(日) 午後1～5時
会場 銀座ガスホール6F
宿題 (事前投句)と選者(各題2句)

①「真ん中」 仲川たけし選

②「音」 斎藤 大雄選

③「恋」 田頭 良子選

④「そわそわ」 神田仙之助選

⑤「物語」 金子 兜太選

席題 当日出句 2題

選者 野谷 竹路 山田 良行

記念講演 「川柳という兄弟」

金子 兜太

事前投句 9月30日締切

投句料 2000円(書留または小為替)

投句先 〒186-01 国立市富士見台2-36

NHK学園全国川柳大会事務局

極樂の余り風

西尾 栞

炎暑、猛暑、酷暑、激暑

仇のように、暑さを現す言葉を重ねてみたが、三十六度を越す今年の暑さにはホトホトまいってしまう。だから何処へ行ってもまた乗りものに乗っても、クーラーのないところはない。電力がもつのだろうか、要らん心配をする。心配はするが、私等の小さい時分はクーラーなんて言葉もなければ、設備もなかった。今は至る所、冷暖房完備というのが当り前になってしまつて、慣れるということの恐ろしさをしみじみと感じている。私は河内の国で青少年期を送った。

夏に入ると、簾を窓に吊るし、建具は襖をはずして葭簾戸に替え、些かの涼しげな夏座敷にしたものである。

風には筋というものがある、夏には西北の風が時を得て、一陣の涼風が部屋の中を坪庭から前栽へと通った。その筋を選んで家内中が昼寝の一時時をしたものである。

風の筋母に昼寝の場所がある

この一陣の涼風を、年寄りには極樂の余り風というて欣んだ。その涼風のなんと有難かつたことか。またなんと涼しかったことか。

今もそんな風が吹いているのだろうか、一寸も感じない。感じないはずである。クーラーを入れて扇風機を回している状態では、なんといいやはや氷室に入つたようなものである。全く個性のない、無表情な風には欣びも悲しみもない。今改めて冷房が本当に人間生活を豊かにしたかを考えてみると、クーラーのない時代に生れ育つた私達は幸福だったかも知れない。

栞

クーラーに鼻つまらせた老夫婦
老夫婦クーラーを切ることにする

クーラーの部屋座布団を膝へ乗せ

〃

座右の句

夫婦相和して百まで踊らんか

(静水)

私の句

かかる時なんと息子の頼もしい

山内房子

川柳塔 九月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 極楽の余り風

「知らぬが花」

川柳塔 (同人吟)

自選集

川柳の群像 若柳潮花

■古川柳 柳籠裏三篇研究 (九丁)

水煙抄

秀句鑑賞 [同人吟]

水煙抄

平成三年度 路郎賞・川柳塔賞中間発表

銀河系

茴香の花

西尾 葉 (1)

西出 楓 楽 (2)

西尾 葉 選 (4)

東野 大八 (37)

黒川 紫香 選 (42)

林 荒介 (44)

松原 寿子 (46)

河内 天笑 選 (69)

小出 智子 選 (70)

河内 天笑 選 (74)

小出 智子 選 (76)

「知らぬが花」

西出 楓 楽



その新聞記事を見た時「知ってしまえばそれまで。知らないうちが花なのよ」というウルトラ級ナツメロが頭の中を鳴り響いた。

まだ寒さ厳しい頃、わが家にちよつとふくらんだ封書が届いた。差出人は「盲導犬普及ボランティアグループ」とあり、中には「盲導犬普及にご協力を」という趣旨の印刷物と握力を鍛えるためのちやちなハンドグリッパそして二千円の振込用紙が入っていた。自分のことにかまけ、ボランティア活動にまで手の回らない私は、このグループに尊敬と感謝の念をもち、夕食のとき夫に話をした。盲導犬一頭を育てるために、二百万近くもの費用がかかる、いつかテレビで見たこともつて加えた。ところが夫はそれらをちらつと見て「払う必要はない。わざわざこんなおまけのようなものを入れているところが怪しい」と言う。すっかりこのグループを信じ込んでしまった私は、その言葉をひどく薄情なものに感

■ ひみこざらん「気にかかること」	後藤正子・川端柳子	(76)
大空のころろ (9)	橘高薫風	(77)
「白」	本田恵二郎選	(78)
一路集「吹く」	内田結実選	(78)
「動物」	野村京子選	(79)
初歩教室「宅配」	辻白溪子	(80)
■ 川柳こぼれ話 川柳と文章	田中正坊	(82)
柳・俳境界論メモ	竹内紫鏑	(83)
八月本社句会		(84)
各地柳壇 (佳句地十選／松本文子)		(88)
■ 各地句会だより 竹原川柳会	小島蘭幸	(99)
柳界展望		(102)
九月各地句会案内		(103)
■ 編集後記	正坊・しげお・みつ子	(104)

座右の句

思い出の道は避けたし通りたし

(好 郎)

私の句

炎ゆるもの命の限り持ち続く

稲 本 凡 子

じ、二、三日遼巡の末、夫に内緒で二千元を振り込んだ。多少うしろめたくはあったが、晴れ晴れしいいい気持であった。それから四、五か月後、それが悪徳商法だという記事を偶然目にし、くだんの歌が心の中を鳴り響いたわけである。

つまりそのグループは、実際に盲導犬の普及に努めている「日本盲導犬協会」とはまったく無関係で、「寄付金で盲導犬についての本を小・中学校に贈っている」だけなのだそう。同封の印刷物を熟読しなかったのが落度なのだが、「寄付金」のつもりで二千元はハンドグリップの代金として払った仕組になるらしい。この場合、「人の善意を食い物にする商法」以外のなにものでもないのだが、うまく法の網をくぐっているので禁止されていない。年間十万人に送りつけ、一昨年はこの手で一億円以上集めたという。

このように一方的に商品を送りつけて代金の請求をするのを「ネガティブ・アクション」と言い、①商品が届いても代金支払の義務はない②即座に返品義務もない③商品到着後十四日(業者へ引取を請求の場合は七日)たてば商品の処分可—ということである。

「善意を踏みにじられた口惜しさ」と「夫への申訳なさ」のダブルパンチに私は、いまでも思い出すたびに自己嫌悪に陥っている。ちなみに夫は「知らぬが花」のままだいる。

川柳塔

西尾 栞 選

広島県 田村新造

望郷に泣いた寒夜の北斗星（シベリア回想）

髪つんで遺体の肌着剥ぐ無残

春までは処理が出来ない屍積む

チブス蔓延地獄と化した収容所

脳症の頭で還る夢ばかり

粟一合取って銃殺された友

竹原市 小島蘭幸

ピアノの先生お嫁にゆかないでと祈る

おじいさんが合羽を着ると雨が止む

プチトマト 姉妹の笑い声がする

知らない街で朝の電車を待っている

ダムになる話を聞いている螢

キャブテンとしての明るさだけはある

松原市 谷垣史好

枇杷を剥く不意に肉感的な朝

夏の女の鎖骨に魔力めいたもの

思ひ出を辿る詮なきことながら

骨と皮にまだ貼りついている我執

掃海艇のことをけろりと忘れてた

タイガース 選手もファンもきつとマゾ

米子市 林

荒介

切り株も父も昨日からの無口

湖も霽れてひと日の絵が動く

網膜に石見神楽が焼き付いた

曼荼羅の中で見付けた姉の下駄

落日の象の背中の童話集

肩の凝り今日を大事にながらえる

松原市 玉置重人

ノド自慢入れ歯の調子確かめる

たこ焼きの味にうるさい河内弁

スイッチオンまだ情熱を失わず

適齢期 写真はちゃんと撮ってある

以下同文いつも妥協を強いられる

搦手に脆い絆がひとつある

西宮市 門谷 たず子

夫の背を盾に追い風向い風
散るまでは弱味は見せぬ父の舞
鈍感な顔であなたをやりすごす
盛装を回転ドアに押し出され
眼鏡かけ替えてわたしを覗かねば
俵せ街道夫婦で編んできた月日

和歌山市 西山 幸

こころ傾けてひと日の眉を描く
精進をして消しゴムも丸くなる
漫才の相方がまだみつからぬ
歳月を守り続けている種火
誰も見ていないところで面を脱ぐ
裏切った人のあしたは思うまい

伊丹市 榎谷 寿馬

悪筆のまま短冊が流れゆく
ブランドに飽きて浴衣の糊を恠い
老ベア 朝のリハビリタベの散歩
億シヨンに父とゴロ寝の部屋がない
ポストまで歩く喜び噛みしめる

下関市 石川 侃流洞

計略はすでに読まれて胃酸過多
謙譲の美德先着から末座
大岡裁きそんな政治を待っている
後輩の計が秋霖に冷えて来る

すれすれで峠を越した四捨五入

岡山県 嘉数 兆代賀

この扉叩けば温い風に会う
ある時は手加減はなし向い風
無雑作なひと言心の慈雨となる
過去語る人みな逝きて風や雲
さよならの日まで一ばん道をいく

豊中市 安藤 寿美子

たつぷりと料理が残り老夫婦
蝸にゆっくり回る展望台
戻り橋 女はすつと鬼になる
七回忌父の好んだ軸をかけ
舷の鵜にも序列があるそうなる

堺市 高橋 千万子

気がねして中座の席に忘れもの
対話からはずされている父の酒
子を許す父は時勢に負けている
金ですむ事じゃないかと反り返り
人間の本音が旅のバカ話

大阪市 西出 楓楽

シテとワキときどき交代して夫婦
笑い皺ないお方とはつき合えぬ
三世代住み物指しをたんと持つ
駈け落ちを息子に勧めてみようかな
座敷犬と幸せごっこしています

倉敷市 小野 克枝

針箱の前に座ると海が風ぐ
熟年へ少うし浅い落し穴
悪女ぶつてみても石鹼匂う髪
草笛を鳴らすと亡母が目を醒ます
夕月よむかし恋したのは影絵

奈良県 上田 翠光

余生とはかくも退屈なものなるか
いつどこで何をどうするあてもなし
一人旅何遍寝返つても一人
助手席の人妻みじろぎもせず
貴若の人氣 作業はうつちやられ

藤井寺市 吉岡 美房

真つ白な記憶八月十五日
戦中派かぼちやの恩は忘れない
銀行が狙うわずかな夏期手当
父の無口が宅急便に詰めてある
大事故が三日で古くなるニュース

倉敷市 稲田 豊作

ねえあたし綺麗でしようとか容咲く
同窓会中流意識の顔集う
開閉が自由にならぬわが心
千組の新婚同じ誓詞読む
いつまでも生きてる爺と孫信じ

島根県 西村 早苗

長生きの秘訣時どき呆けておく
輪の中に子も仲間するまめ紋り
カンナ咲く農家の裏も秋がそこ
ふんざりがつかずコーヒーかきまわす
もう秋かプラットホームのおろしそば

今治市 越智 一水

悲しみへせめて死に顔ほめておき
ミズバシヨウ雪の重みに耐えた美よ(尾瀬散歩の旅)
ミズバシヨウ春の賛歌を合唱し
尾瀬沼のやすらぎ母の膝に似て
道徳をここで学んだ尾瀬が原

東大阪市 森下 愛論

無愛想な無口が好きで通う店
夏終わる金魚もついに後一匹
ソーメンとハモを並べて祭唄
終電車脂粉の中の立ち往生
腹立てる事ばかりと腹を立て

西宮市 林 はつ絵

伴奏の音が高くて踊れない
小ジョッキ一人前の口を利く
どれほどの昔か氷河ここにあり
夕立へ学者も同じ慌てよう
たまに出す直球だから効き目あり

富山市 舟渡杏花

鳥取県 土橋 螢

極楽のキャンセル待ちでまだ死ぬ
生命線の長いのもよし悪し

どんぐりに目鼻がついている仲間

寝返った指に光っているダイヤ

相談に来て朝昼晩とたべてゆき

笠岡市 松本忠三

よくある手使い馴れして処世術

年寄の冷水自由にさせとくれ

野次馬が静かになったお相伴

腹案を参考までに聞いておき

敵味方わたしはどっちに位する

今治市 矢野佳雲

旧友の死に奥様と遠ざかる

どんぐりコロコロ浮いた話はまだ聞かぬ

死ぬるまで本音の言える世ではなし

よく出来る末っ子へ行く参観日

ツバメの巣つくづくと見る雨宿り

倉吉市 奥谷弘朗

方便のおだてに染まった向きもある

里帰り話つきないなごやかさ

感謝する気持一家を円くする

頑固だがものの道理を心得る

香典を送りそこねて気がめいり

夕立のように泣いたり笑ったり
打ち止めになりたい女尊男卑の乱
先生と言われるほどに顔がきく
顔のない男が海に浮いている
死に場所の合鍵ひとつ持っている

鳥取県 新家完司

妹の家に泊って寝つかれず

空っぽの胸にカラスが鳴いている

鍵付きの日記を妻が書いている

メロンよりトマトのほうが口に合う

馬鹿なことしているうちに五十歳

鳥根県 小砂白汀

わが影を踏んで激しき孤独感

酷使され果ては産業廃棄物

伝説をちりばめ豊かな秋の天

道草もせねば人の世わからない

誰にでも心あずける無精卵

柳井市 弘津柳慶

疑いの目で一線を引いている

真直ぐな列が乱れた滝の音

儲け話半分本気で聞いている

補聴器を外してそろそろ寝るとする

風向きが変らぬ内に靴を履き

和歌山市 福本英子

切り口の見事な西瓜買ってしまつ

色鉛筆の軽さで嘘を塗り替えに

C Tもハムも輪切りにされてから

珈琲も酒もわたしを眠らせぬ

目の位置にしゃがめば一人対一人

和歌山市 内田結実

鈴虫の宴 招待状がくる

ワープロの手紙に愛を盛られても

どの顔もあなたに見えるヘルメット

とびこむはたやすいことよ波しぶき

小さな猫を抱いたら爪をたて

岡山市 川端柳子

長い旅 女大学書き直し

コマージュで頭の体操する夫婦

隣より少し早起きした勝負

床の剣 手柄話はもう止めて

よく降るねえ賞められた気ではしゃぐ梅雨

奈良市 天正千梢

継続は力 家計簿つけつけ

口で負けない女断崖絶壁に立っている

男にたよりたくて髪の毛をのばし

それなりの蓄積があり小石をけっている

必要経費芸術家の浪費

豊中市 田中正坊

ちちははもはらかなもなし風の盆

兄ねむるみんなみのしま風わたる

自分史のページをくると風さわぐ

紺碧の海が九月の画布にある

秋桜ひとを愛したことがある

堺市 楊井二南

吉相を信じて黒子自慢する

口実にする雨もつと降ればよい

中元の減る年波は争えぬ

優先の座席坐ったことが無い

格段の相違を知ってから無沙汰

鳥取県 林露杖

炎天や過疎の古里草いきれ

人と医の倫理に神の声遠し

安楽死望んで成せるものでなし

死の美学もしもに下着替えて出る

降れば読み晴るれば釣に歩を運ぶ

寝屋川市 江口度

損失補填 必要悪と思ひ込み

牛の涎に悟らされている野心

舞妓さんも泳いでいますハイレグで

老いてなお牛若丸のような妻

なお前 隣と比較やめようぜ

和歌山市 堀端三男

米子市 小西雄々

途中下車恩師の墓地は蟬しぐれ
自分から自分に嘘を言う落ち目
アイデアだけ買つときますといなされる
思いのたけ言つたら急に腹が減り
引き潮に老醜さらし浮いている

尼崎市 春城 武庫坊

大阪市 江城 修史

九州に神はおらぬか火砕流
ゲートルを知らない足がよく伸びる
傾いた家に脇息置いてある
社訓守ると過労死になるおそれ
地上げ屋の基礎は銀行株商社

尼崎市 春城 年代

和歌山市 牛尾 緑良

会いたしという思いにも誤差があり
ある打算おもわず口をついて出る
離婚劇の波もあらかた鎮まりぬ
比翼塚互いの胸に刻むだけ
涼風と書斎に届く遠花火

仙台市 川村 映輝

美禰市 安平次 弘道

「悪魔の詩」翻訳しても死刑囚
脳死論本人抜きで論じてる
さわやかな人間求めている人間
過疎の村日本一の水車
駄目なものは駄目になった社会党

人を許すと疼きがとまる点字打つ
家風まで見せないための磨り硝子
どしゃ降りのたびに固まる夫婦仲
ひび割れたガラスに似てる脳死論
毒を消す毒になりたい日の自虐

桶となる妻が限界口にする
軒下の小さな店の灯り消え(閉店)
友情が支えた灯り消す羽目に
腎不全今日一日として生きる
自分史に特高の影チラホラと

戦いに疲れて妻の手に眠る
寝息だけ聞けば苦勞のない夫婦
深夜放送あなたも聞いていましたか
悩みとは妻二の腕の力瘤
保険証この日を待ってた訳じゃない

てのひらを返すと流れ矢に当たる
脳味噌の軽さを笑う広辞苑
射程距離の中でライバル遊ばせる
毎日が引き算消えてゆくバブル
しきたりにこだわる姑の落し蓋

京都市 都倉求芽

海の風 本音のほかは吹きとばし

輪の中で恋をじっくり育てよう

マシジョンを鍵かけて出る眼のくばり

真白い刻みキャベツがテキを待つ

鰻焼く匂いが好きな夾竹桃

名古屋市 越村枯梢

妻よりも涙もろくてあかんだれ

猿芝居 猿のつけてる金バッジ

第三の定年とうに過ぎました

連れ立って雀は俺の弔いに

諸悪覚えてさて善人の顔をする

大阪市 河井庸佑

ふとある日ドライに割切る腹決める

見通しの甘さ悔んでいる若さ

曖昧な返事自分の首締める

イエス ノー言えない裏が読み切れず

発想を転換させて謎を解く

甘日市市 林野甦光

素直さをほめられている石灯籠

うなぎ屋の煙屈託なく飛ばし

素材から手塩にかける誤字脱字

自己採点してリハビリから帰り

神さまの足引つ張っている貞女

鳥取県 松下たつみ

ひとほめて此の頃人が好きになり

素人の意見味つけせぬ怖さ

自己批判もう戻れない甘い水

靴紐がゆるんだまんま策がない

呼び止めて病氣の話して別れ

高槻市 川島諷云児

ひとりだけいい子振るのは止し給え

茶柱の気まぐれ立ったり寝てみたり

無器用に生まれて何時も蚊帳の外

孫にまで意見をされた酒たばこ

父さんの地図に曲った道がない

鳥取市 両川洋々

こまったら親父の墓へ逢いに行く

洗濯機おいらの愚痴もみな洗う

アメリカと言うパトロンの頼りない

大統領の足で水虫冬を越す

パトロンの顔より銭に惚れました

宇部市 平田実男

自惚れがとっても好きな姫鏡

遊ぶことには長けている七光

総理また真昼の月に話しかけ

中元の数も定年物語る

どっちでもええと言うてて先に取り

大阪市 津 守 柳 伸

奈良県 田 中 紀美代

不安顔寄せて横丁の救急車

安定剤頼る女の大軒

ボジョレーヌーボも待っている快癒

曖昧な笑み中傷は砂糖菓子

もしもの癖聞き分けている特技

熊本市 永 田 俊 子

カード無しで暮すせめてもの守備

ロボットが異議ありそうに聞く神話

孫だけが左遷の膝に寄ってくる

生きたがが下手で小犬に慕われる

書きかけの手紙のままの余生かな

西宮市 奥 田 みつ子

昆虫館 黄睡蓮には虫もなし

昔から夢を夢見る夢子さん

梅雨ごもり胸にくすぶる不発弾

亡き父母を迎えひとりの誕生日

聖人でない母親に救われる

松原市 佐 藤 奏 月

かくれんぼ蒔ちくちくせめてくる

どの顔でお逢いしましょう鬼薊

紫陽花のだらだら坂は皆無口

フランスパンかかえたまんま逢いにゆく

ひらきぶみ晶子に母という強さ

どの写真見ても短足かばう位置

胃が痛むだけで医学書ガンの項

蟬の声ひと月ぶりの日記かく

け散らした小石優しい花の下

したいこと有りすぎ今日は病院へ

米子市 林 瑞 枝

母はまぼろし軽いタツチの絵にしよう

電話してくる声は挽ぎたてのトマト

枇杷の実を剥いで天衣の母と会う

カード氾濫私は街に出て行けぬ

足裏に響く美しき誤算

米子市 石 垣 花 子

どの道を行っても海へ辿りつき

メートル差しで叩かれた子をまだ知らぬ

吐く糸の値打ちも知らぬ蜜棚

すがり付く藁や縄さえ情け持つ

歴史ブーム伝説の島潤わせ

米子市 野 坂 な み

不器用でコツコツ強くなる稽古

鶴の一声 羽が倍にはね返る

満ち足りて紫陽花浮いてみたくなる

日の丸を徐々に徐々にと前へ押す

第一印象容れて話は決められる

幻か虹の真上に母がいる

米子市 田中 亜弥

今は峠で柔和な顔をとりのどす

踊り好きの神か杜がにぎやかだ

僕は浮く命ほしさのことであり

畳目にそって歩く作法をしています

米子市 青戸 田鶴

遊び好きな影でいつでもゆれている

潮満ちて汚いものを包み込む

真実を熟れぬ言葉で話し合う

金山の哀話 人形から聞こえ

海鳴りがついて離れぬ佐渡おけさ

米子市 菅井 とも子

富士山がちいさく見えた雲の上

銀ブラはしても土産もよう買わず

診断書持ったまま旅無事終る

百日紅 寺の怪談聞き飽きた

内定へ本気にしない孫の顔

米子市 政岡 日枝子

あやまちに気づいて人差指は病む

塩少しあげる勇気のいる言葉

七夕の禱り流して梅雨あける

傷は浅いぞ寝ている間に世が変わる

寝に帰るだけの土橋があたたかい

湖の藍へつけ足す彩がない

米櫃を満たす役目を買って出る

遣されて屋根のきしみに強くなる

畳目に添って白足袋あらたまる

晩学の杖へ辞書が手離せぬ

米子市 澤田 千春

友の愚痴聞いて青空見たくなり

川底の石は幻追いつづけ

精いっぱい話しかけてる象の鼻

あやまちにひよっこり出逢う橋の上

北の海に今陽が落ちる息とめる

米子市 光井 玲子

サングラスはすせば見える愛がある

ともかくも女の味方洗濯機

家中が豆腐が好きで悪ない

新芽とはみの虫そりが合わぬらし

太陽と堂々競う百日紅

米子市 金山 夕子

ハイカラな言葉に出合う城下町

時間までこころ豊かに沙羅の花

若貴のフィーバー凝視十五日

作業衣が生きる証の時間給

この釘を打つならどうぞまっすぐに

米子市 新 正子

夏バテの脳に古事記を読んでやる
婆さんと呼ぶ初恋と暮らしてる
墓前ではいつも子供になるわたし
初物の風邪もあなたへさし上げる
出陣に女の眉を引き直す

島根県 堀 江 正 朗

膝坊主抱いて師の癖真似てみる
負けたくはないから点字打ち続け
漫画だね力瘤から何が出る
空想は生きる喜びふくらます
陽の沈む頃かいつもの鳥の声

島根県 堀 江 芳 子

青空よ おまえと走れそうな気も
屋上のリハビリ交通禍ない眺め
ふだん着のままの話が通じあう
回らない首を泣けないから笑う
涙出るうちは幸せだと気付き

松原市 小 池 しげお

神様の見やすい場所へ絵馬を上げ
四つ辻で女のあしを待ってやる
久し振りで名前を聞きそびれ
ポーナスが出たらコンベア速くなり
兄嫁がいいので兄が判をつく

八尾市 宮 西 弥 生

包丁のないくらしと聞いてする寒気
男は女に 女は子供に溺れています
若者にまだゆずれない母の壺
仲直り出来ない人と夢で会う
月冴えて頭も冴えて人許す

八尾市 宮 崎 シマ子

御先祖へ詫びる苗木を植えている
山葵の抜けた深夜の土産ずし
言い訳の長さはきつと罪を持つ
口車に乗って一つの和の中に
恋ポート池の程から漕がず

八尾市 鷺 見 章

文楽の余韻を妻と法善寺
病むベッドずらして母へ空の蒼
パチンコへ行くネクタイを外さない
母さんがとても奇麗な参観日
秋叙勲リハビリで会う顔見知り

八尾市 古 川 覚然坊

醜男に生れて罪を知らず生き
のんびりとしている男に有る野心
電化とは女房連中を怠けさせ
迷惑はコネの紹介判の事
天気晴朗なれど島原手が出せず

八尾市 高杉千歩

サンローランの彩に憧れもつ六十路

世の中に阿呆が多いと馬鹿が言う

お悔みにいくバラソルがちよつと派手

方言も北から南 遍路笠

床柱避けても母の座は確か

八尾市 山下美津留

貰い手がなくて古着古着とたまり

病み上り犬と歩いて足が負け

お人好し自分の主義は持たぬまま

円満な鬼になったか茶をすする

スタツフにカミナリ親父一人居る

八尾市 片上英一

さかな屋のケムに燻され玉造

雑兵もみな大将になる呑み屋

乙旗あがるいま東郷がよみがえる

ゆっくりとできない質で砂時計

星の流れに梅田界限たそがれる

唐津市 田口虹汀

おにぎり一こで命落した蟹もいる

窮鳥も一寸這入れぬ燕尾服

掬われた金魚で池にや馴染めない

よく見よと正倉院の庫が開く

裏表見たかと西へ陽が沈む

唐津市 仁部四郎

いろは坂くの字大きくかがんでる(日光にて)

秀忠は欠席のまま東照宮

特攻の顔に恨みのない怖さ(知覧にて)

二階級特進母へきた知らせ

十七で片道だけを知覧から

唐津市 久保正敏

自叙伝の余白を埋める否の音譜

幾つもの狼火を抱いて火の女

ブリズムの女でいつも乱反射

情死考近松以来死の美学

それなりに責任がある落し蓋

唐津市 山口高明

大空へ向って叫ぶ馬鹿野郎

一週間暮してみたい無人島

論評を書いて男は喋らない

出るところへ出たなら銭に成らぬ職

大根の花とは見えぬ楚々と咲き

唐津市 浜本義美

百薬を服んでも病癒えもせず

病弱に神と薬屋付きまとい

老人に一石二鳥の乳母車

生きている歓びがある朝の天

石女の夫婦が描く明日の地図

唐津市 浜本 ちよ

体験の重みに若さ虚を衝かれ
腰低う生活し近隣こともなし
苦の果ての喜び何とあつけなき
夫散步山の幸やら海の幸
沈むだけ沈んだ男立ち上がり

神戸市 中村 ゆきをを

ジーンズで打水してる先斗町
寺を出てまた寺に入る夏の雲
夜店出て闇にそれたい浴衣がけ
晩酌も無し合宿で見るただの海
浜の昼ヒキニが通る目の上を

京都市 山本 規不風

若い音の祇園囃子の風と恋
赤トンボ故郷の家買う子のハンコ
キット癒るよと妻の手相観る
禁煙の約束で逢う百日紅
夏の花恋の奇跡の遠花火

加古川市 吐田 公一

裏表ない人生に陽が当り
妻の掌の中で泳いでいる僕だ
何不足なくて不足な愚痴並べ
醤油の香りを生かす母の味
飼ひ主似で番犬までがなつつこい

大和高田市 岸本 豊平次

梅雨曇り紫陽花の咲く寺に
太り過ぎおおかだけかただ取り得
嫁き遅れ仕事に燃えてるように見せ
子が巣立ち狭い家にも空いた部屋
財布が気になつては行けぬ京料理

姫路市 人見 翠記

沙羅双樹寺を守りて咲きつづけ
沙羅真珠月夜に涙こぼしそ
雨しとど蜜蜂群れる沙羅の花
気の長い愛の絆に導かれ
熱帯夜読書三昧何のその

箕面市 坪田 紅葉

野の花を一輪さして茶の点前
水打つてつくばいの位置京の庭
バランスを考えながら市場かこ
老いたとて気位高い女いる
若い氣と老いとがゆれて古希の坂

大阪市 大塚 節子

バランスがとれぬ私のやしろべえ
この年齢で今更痛む親知らず
梅田から篠つく雨は十三まで
平均台いまだに真直ぐ渡られず
バランスがとれない家計簿昼寝する

高石市 浅野 房子

逝きたくない逝かせたくない柩が軋む(姉逝く)

喪が明けると夏が来ていた衣替え

ダービーで走った馬も居る牧場

沙羅双樹万葉の頃語り出す

バランスを崩してから薬包紙

寝屋川市 岸 野 あやめ

子の母で嫁で議員で勲五等

次の世にこんどは男に生まれるぞ

主婦として夜の厨に梅さわす

夫の留守偷む形の三尺寝

紫陽花の露もこの世の仮の宿

宝塚市 丸 山 よし津

転び癖ついても企業高いビル

雨に逝き七日なぬかは雨が降る

毒を秘め楚々とむらさきトリカブト

乗り換える空港小型機に不安

飢える子の悲しいまでの歯の白さ

出雲市 園 山 多賀子

寝て一畳塞ぐ男の青写真

温かい言葉で論すしつけ糸

蟻曰く人間行列好きらしい

湖に来て許し合えそう茜雲

米寿までただ歩かねば歩かねば

出雲市 吉岡 きみえ

今日も雨笑い袋のひもが切れ

うどん屋で夫婦ゆっくりさし向い

写経してこころの鬼をねむらせる

自己診断だして今日は休肝日

長いものの味方になってうとまれる

島根県 松本文子

舌の上に西瓜の種のような悔い

エレベーター大勢乗ってほっとする

したいことたくさんあってまず昼寝

黄昏はしみじみ独りだと思ふ

表札を替える気持にまだなれず

姫路市 大原 葉香

老兵は消えゆく時を模索する

父の荷がこれほど重い吃水線

頼まれる事許りです神の愚痴

札束に踊り疲れた毘と罪

慰霊塔そびえ叫んでいる孤独(手柄山慰霊塔)

姫路市 丁坪 サワ子

ひとりよがりの席に画鋏が落ちていた

掃除する暇も無いわと立話

逆縁が気になりだした古希の坂

洗脳をされて嫁に馬合わす

としよりの診察ウンウンウンで済み

姫路市 中塚遊峰

大阪市 神夏磯典子

お見舞いに嘘まで言うて喜ばせ

流れ星 寡婦は潮時考える

独り居の障子にとまる黒揚羽

敗戦で電氣をつけた明るい晩

藍染の作務衣に残る亡父の汗

寝屋川市 稲葉冬葉

贅沢をさせて貰った盆供養

千まで数え眠れぬ夜が続く

養子にやった覚えはないが仲が良い

嫁さんの母が来ているらしい声

年金の軽さに似たり蛙とび

高知県 赤川菊野

ライバルのように娘が母をみる

も一人の自分が私のライバルで

逝く時は亡夫好みの鯨小紋

ハチキンも秋ともなればもの想う

今日は今日 明日はあしたポンポコリン

大阪市 本間満津子

持てるだけ持っただいじなもの落し

新刊の辞書から楽しい文字が消え

ひとすじに思い続けて陰の舞

また会えた幼なじみは泣き虫で

もう一度会える嬉しい忘れ傘

雨しとど祖母は無心に梅漬ける

薪能煩悩すべて火の中に

うぬぼれを亡母の鏡が戒める

自慢さすように他人が賞めてくる

うるさいが安心がある古時計

岸和田市 植山武助

おしゃれする寡婦淋しさの裏返し

自画像にちよっぴり若さ残しとく

年の差なんて二十年後を考えず

ボケ防止とやらで麻雀続けてる

食べる物が合って来ました老夫婦

岸和田市 福浦勝晴

満員車非情ノツポの挟み撃ち

穴のあくほど赤ちゃんと視詰められ

窓越しにカンナが炎える無人駅

鈴虫を優雅に飼って二号邸

老い哀し夫唱婦随の便秘薬

岸和田市 高須賀金太

糸口を家庭裁判所でさがす

幸いにも私は株を買ってない

すつぱりとグラフに収まってたまぐれ

両方の手では持てない母の愛

彼岸花咲くあぜ道がまだ残り

岸和田市 岩佐 ゲン吉

骨っぽい男が隅で手酌です

鶴橋駅匂いで下車を迫られる

上司の目澄んで定年ちかくなり

要領の悪さ見ぬいている教師

現実という名で右にばかり寄り

松江市 恒松 町紅

大正の母に消し炭壺の夢

長男が立派に後を継ぐドラマ

面白い小説一日外は雨

湖のヘドロを嘆くゆりカモメ

感情に弱いわたしの富士額

松江市 舟木 与根一

空席はきつと反対意見だろ

この頃のカラス童謡にもならぬ

度忘れもみごとさすがは年の功

芋づるの類いと知った政財界

知恵熱へ強烈すぎる金魚の死

和歌山市 若宮 武雄

バブル崩壊ニホンの恥部を丸出しに

横顔はさほどでもない鬼瓦

歓喜より無事平穏をほしい齡

用心を臆病などと風の声

喜ぶと顔も崩れる齡となり

和歌山市 垂井 千寿子

花を画く花の命をいとおしみ

両親の背中に教科書が有った

飽食の世に耐えているパンの耳

景気良い話でもする癌の部屋

貞淑と見せてまさかの大ジョッキ

和歌山市 内芝 登志代

生きてゆく厳しさ自然から学ぶ

鍵渡す心をわたすあの人に

本心は見られたくない花の芯

なつかしい校舎も唱歌も風の中

御先祖のおかげおかげとよく動く

和歌山市 松原 寿子

ひとりじめする映像に君がいる

刻々と呼吸をおとす砂時計

生も死も聖書に預け身を躲す

心の湖で一途な思慕が澄みわたり

熱帯夜ピアノを弾いているゆとり

和歌山市 細川 稚代

負けておこ少し大人の振りをして

性分とあきらめている影法師

梅雨晴れへぬれて燃えてる海紅豆

タブタブのスーツが似合う青春譜

石軽く蹴って許せる程のこと

和歌山県 天満 三千代

和やかに話上手と聞き上手

浮気した付けがまわってきた老後

助けあう夫婦に重荷なんかない

良し悪しは言うまい感謝してうける

小さな嘸動きとれない釘になり

和歌山市 桜井 千秀

振り向かぬ若さに負けたなと思う

ぐらついている椅子へゆきぶりがけないで

刺さつてゐる小骨が邪魔な話あい

臆病も卑怯もやはり人間味

数撃てば当たる鉄砲弾がない

和歌山市 木本 朱夏

くちなしの匂い気疎く梅雨ごもり

蓮咲いてまだ脱けだせぬ愛の闇

旅楽し男の料理談義聞く

草いきれ不意に逢いたくなつたひと

人ひとり嵌める電話の無表情

和歌山市 福井 桂香

冷奴 きょうもお相手つかまつる

九十まで生きる保険をかけてます

水色の封筒がくる請求書

ハングリーな顔に汗ふく彫刻刀

哀しいなあ レモン色した雨が降る

和歌山市 山川 克子

紀州粥旅の疲れの口直し

そうですわね昔の人は偉かった

動いてゐる動いてゐるコッペパンに蟻

快調な朝も一汁一菜で

趣味一つ満足させるにも資金

和歌山市 青枝 鉄治

壁に耳計算ずくの独り言

神様はピンチになると拝まれる

ゆとりない暮らしと知った市場籠

片言が夫婦の隙間埋めにくる

君だけが頼りだと言う左遷の地

竹原市 森井 菁居

五十路とや円みがついた影法師

したたかに生きて年輪悔いが無し

太陽を見てからモグラの自己嫌悪

どんぶりもサラダもみんな妻ごのみ

しとやかに吹く竹林の風が好き

島根県 梶 みどり

くちなしが匂う白い風が吹く

病床の朝も変らず掌を合わせ(病院にて)

早朝の冷氣吸つてはく病魔

一日が長い気心くみながら

今更に余生大事とひとり言

岡山県 小林 妻子

西条市 片上 明水

川柳のプロもポロポロ居るようだ
産め殖やせ年金受給者のために
我を張って烏の勝手困り果て
返し針母は忘れた事がない
プロ野球の心配もする地下足袋だ

岡山県 矢内 寿恵子

旅ひとり一会の風と道連れに
輪廻とや掟の中で舞いつづけ
置きざりに合うても確かな私の座
友ひとり座ると光ってくる席だ
来年も達者でいよう花の種

高知市 北川 竹萌

いつからか先歩きする妻となる
ほととぎす歟一ぶくの空よぎる
半夏生人参の種蒔いてます
渋滞を避け畑に行く時間帯
せせらぎに卯の花思慕のわく小道

守口市 羽原 静歩

建前と本音 神代の昔より
河川敷只今恋愛特訓中
平和日本 交通戦争 ゴミ戦争
聞き役にまわって話が丸うなり
ニアミスのことには触れぬ雪月花

銀行が側へ建ったが用がなし
皮靴のままが踊りの輪にひとつ
彫り物の熊どれもみな口を開け
税務署に無職のことを二度聴かれ
堀の穴塞ぐと猫が屋根を来る

羽曳野市 田中 透太

ひと夏の思いが溜る釣忍
夏の恋紆余曲折もなく燃える
打ち直したい釘がある五十坂
人妻とアバンチュールの舟に乗り
自意識の強い女の肩パット

海南市 三宅 保州

何となく離婚届を持っている
太陽も月もひとりで耐えている
もう赦す気になりました七回忌
遠回りすればたやすく越えられる
花道の本心知っている奈落

七尾市 松高 秀峰

ゆうべ寝ず覚えた原稿もう忘れ
欲望を断ち切る写経筆の跡
失敗を叱らぬ父の苦勞人
焼き茄子のうまさ亡母の味とい
名も成らず敵もつくらず四十年

大阪市 北 勝美

迎え火は線香で足りる裏長屋
見る阿呆へロボット踊る阿波おどり
七人の囲んだ火鉢が植木鉢
逆上り出来ない孫も親ゆずり
若者に恐いニュースの自己破産

呉市 榎田英詩

花時計秋には秋の時刻む
疲れたと夏の帽子が大の字に
小児科医笑顔外して寝るとする
なんとなくこの掃除機も倦怠期
火吹き竹使った私の齢が知れ

神戸市 山口美穂

蟬しぐれひもじいつらさふと思う
また世話をやくこととなるクラス会
コーヒーで饒舌土曜の昼下り
また老眼鏡合わなくなつて軽い鬱
汗で流れるお化粧一応して出かけ

大阪市 藤田頂留子

投句して嬉し花博俳句集
氏神も氏子とかせぐ祭り月
だんじり囃子亡兄のこわねに似て楽し
猿之助展大満足にハイビジョン
赤とんぼ秋の気配をつれて飛ぶ

静岡市 渥美弧秀

停電でロボットやつと一休み
お早うと素直に言わぬ変声期
乱舞する螢は人を恐れない
湯上がりの妻に酌する金婚日
音楽に詩がある古希の坂忙し

守口市 野呂右近

妻子から善意の禁足令が出る
老人の抵抗にも似て遠い耳
悲しくて鳴くはずはない秋の虫
妻の労ねぎらい肩に貼り薬
八十年百喜百憂あった道

守口市 結城君子

盲導犬に逢うとお辞儀をしたくなる
らっきょうを漬けてから来る友を待つ
いっぺん飲みましょと女どうしのお約束
梅雨さなかぐつとスパイス減っている
ドナーにもなれず献体にも迷い

寝屋川市 柴田英壬子

螢光灯だつて中味は燃えに燃え
すじ書きは要らないペンギンの笑顔
フリージアよお願いそっぽ向かないで
長い髪の孫と絆の握手する
グレードな暮し夢みるまだ六十路

有田市 松井 かなめ

佐渡おけさ永住したい気にもなり
夕立にでも打たれもやもや流したい
人呼ぶに近くに名所のない歎き
四十九歳の夫亡くした友に言葉ない
頭下げたら世間の風が上を越す

奈良県 長谷川 春蘭

理由なき憎しみ湧きぬ夜の蜘蛛
夏服の二の腕白き注射あと
茫然と寄る机あり水中花
雨降れば止めばの情け梅雨しとど
油虫夫への不満向けて打つ

松山市 谷 信夫

幻聴を仁王になって踏みつける
蓋付きの湯呑み買った茶碗むし
もう時効と思つていたが弱つたなあ
誰にも知られず空気になつたらなと思つ
姑に言われたとおり嫁が言う

鳥取県 清水 一保

頂上をきわめて次の山聳え
根性という遺産たんぼの中で生き
カロリーはよしよし愛情盛つてある
子育ての原点つばめが軒で説く
もっぴー出る頃落着き茶をよばれ

岡山县 荻野 鮫虎狼

経験を活かす杜氏は酒嫌い
石段の途中で女気が変わり
海流に乗れず養殖魚は泳ぐ
応援に回つて淋しやせ蛙
振向けば妻も出してる赤い舌

岡山市 井上 柳五郎

一期一会ちさいちさいが輪に生きる
忘れること忘れストレスすこし減り
上役にテクノストレス不安型
意気投合慰め合いもため息に
美しく老いる幻かも知れず

香川県 松村 迷観子

門前で生きる力を授けられ
因縁を果す病と闘おう
子や孫にかかる難なら受けて立つ
衣食住足りて欲の芽が出だし
正座した話重荷になつてくる

弘前市 真喜内 實

おいらくの私の丘は花ざかり
老夫婦時計は五分進めとく
今日のこと今日でまとめる明日は雨
病は気 元気も気から湧いて出る
ホホ ホホと笑う上さんお金持ち

町田市

竹内紫鏑

尼崎市 奥山美智子

バッテリー終わってからの良い握手
髭そり器も長寿 相手は白が増え
親子とも知るCMのロングラン
ギザギザ字 戒名までは追って来ず
曲がっては街路樹まなぶ万歩計

竹原市

岡本清水

人の世話 苦勞の程は気付かれず
一人娘可愛き苦勞は知らぬまま
高齢者逝く一本杉には未だ遠い
ハウス農業自然をコントロールする
顔役のここにも年齢限度見る

鳥取県

羽津川公乃

海鳴りのメッセージとは何だろう
陽の昇る海に弱気は見せずおく
金魚鉢わが家も同居家族です
風紋の消えた砂丘にある挽歌
テープ切る鉄に鈴は付けずおく

京都市

松川芳子

足元がおぼつかなくて軽い靴
天秤にかけた愛など欲しくない
ハンカチが演技している泣き笑い
一方通行の耳で母達者
能面の下で喘いでいる孤独

絆とや言葉少ない母である
鍵束のひとつひとつに男の絵
ふるさとで独りぼっちの風を抱く
添うことの幸せ人の妻となる
ふんざりがつかないままに暮れてくる

岡山県 花田たけ志

外見はケチだが本人は自然体
クレール車がピルの谷間に角並べ
いい湯だな今日の暮らしの総ざらえ
自分史と言う原作に朱はいらぬ
母強し父よあなたは弱くなり

岡山県 二宗吟平

亡友たちの名に指を折る眠れぬ夜
お母ちゃーんたった一声生き別れ
綿入れが母の思いの温かった
信仰の母の祈りでこの米寿
思い出は私一人が生き残り

大阪府 坂口公子

聞いている風は見せない癩の虫
耳よりな話へ距離をつめていく
聞き耳でいつも小言を拾う鬼
聞き耳のひとつは老母にとっておく
舞台裏残る女が瘦せていく

静岡県 蘭田 獭 杵

終電が去り山の駅山に溶け

無人駅誰が育てた立葵

偶像に心を入れる緋の衣

ナナハンの音が帰って安堵する

窓辺では妻旧型のミシン踏み

東大阪市 崎山 美子

タイミングの良さへ疑う下心

タイミング悪く平行線のまま

一生のお願い連発する女

やつとひま出来れば持病になやまされ

紅い糸とめぐり会えないタイミング

大阪市 井上 白峰

華やかな過去振り向かぬ父の汗

裏町のくらしにもある雪月花

家計簿に今日も妥協の冷奴

ハイハイと妻が上手に負けている

点と線五七五の綾を織る

和歌山県 寺田 裕美

校門で別れたきりの彥星よ

自から歩幅がきまる荷を背負い

すぐ動く腰を頼りにしていない

茹でられてグラムになった蛸の足

する事をすれば意見がまた変る

大阪市 板東 倫子

東大へ子をかりたてる鬼子母神

あわだち草のびてマンション売れ残る

バカを売る男が年収一億円

坊さまと葬儀屋あうんのお取引

梅肉の紅差す鱧の白い肌

大阪市 富上 光代

距離置けば愛がひしひし押し寄せる

同室の病状気遣う快復期

一通のはがきの温さ抱いて病む

空っぽの頭病んでる白い壁

ひと山に盛られ自分を消してゆく

羽曳野市 吉川 寿美

姑逝って屋根がだんだん低くなる

自信喪失開いてくれぬジャンプ傘

小細工が効かなくなったぼんの窪

音無しの構えで妻の謀反劇

鬼の面つけても鬼になり切れぬ

富田林市 松本 今日子

スランプをじつと耐えてる水たまり

滝の絵で暑中お見舞い申し上げ

小綺麗に咲かしています姥桜

スーパードおんなじ柄の服に逢う

ロマンスに縁が遠くてねぎきざむ

今治市 野村京子

出雲市 久谷まこと

ある別れモカの香りを追う末練
飯りの世の修羅へ揺れてる絵ロウソク
輪の中で生きて無風に馴れてくる
そして夏ゴッホの絵より炎える恋
雑草と夏の軍手と父の性

豊中市 吉田あずき

病んでいる学術名が立派すぎ
呑み込んだ言葉に消化剤が欲し
若い夢 無限大でも許される
野の色に溶けぬクレーンのひとり言
雨烈し帰り来る者無き安堵

鳥取県 土橋はるお

銀行に出入りのできる顔でなし
いびつな姑のおしえに染まる座りだこ
音痴の唄も怒るよりいいじゃないか
恋人に逢う約束の無人駅
君の名を箸の袋に書いて問う

鳥取県 江原とみお

弱腰をねらって風が吹いてくる
銭のことになると仏も横をむく
仕合わせを見送る側にいつもいる
質やさんに男の顔をおいてきた
お釈迦さんに渡す白紙の委任状

下心あるから笑顔くずさない
服ぬげば言葉使いもくずれてる
ストレスを溜めているから酒が効く
一の矢はつる音高く飛ばしとく
いたわりの言葉善人らしくする

大阪市 北山悟郎

好きな事するだけなのに愚痴が出る
川の底今昔の石同床異夢
実直に尽くす男に骨が折れ
歳取ると思い上りを程々に
信心は無いが悟りの道が有る

高槻市 竹内花代子

同乗の他人様が嬉しい救急車(老母入院)
仏飯を炊きに戻った朝帰り
配膳のおかず刻まれて来た歯ぐき
看病へ通勤妹バス電車
手を引いてトイレへ行けるほどに癒え

大阪市 渡部さと美

スタイルに見切りをつけた五十の背
夫と子へ程よい距離をおき五十
腰すえて五十の世間怖くなし
葬式の村 賄いのにぎやかな
譲られた席またゆずる妊婦服

湾岸とイトマン謎が深くなる

川西市 松本 ただし

玉虫色の裏でちらちら出る偽善

四面楚歌それほど他人悪くない

ライオンと人間どっちが野性かな

保護色の九条に迫る色直し

あじさい忌 星も潤んで見えまする

広島県 藤解 静風

ささやかな贅 菜園の旬を食べ

置薬と妻にはいつも世話になり

男の自立 料理教室などいかが

九条も小選挙なら変えられる

境港市 細木 歳栄

青春の一齣終戦記念日よ

ああアカ子よ又もや仲間に村八分

クラス会 所もなつかし峯の寺

がつぷりと孫と組んだら後がない

もじずりの恥じらいなのか身を振る

大阪市 榊本 路児

コマーシャルあれも欲しいしこれも欲し

やけっぱち風船飛ばす鬱とばす

一病息災その一病が恐ろしい

野心家の杯いつも空いている

上高地雲も恰好よく流れ

仙人掌の鉢置いてある駐在所

守口市 森川 まさお

熱帯夜寝不足らしい月の暈

テトラポットに上げ潮の音がする

船着場足投げだして雑誌見る

鳥取県

石尾 かつ乃

迎え火を焚いて昭和の傷痛む

そして秋 母の年忌へ虫が鳴く

横顔がチャームングそのままで居て

雑草の私語へ黙った虫の声

大田市 藤田 軒太楼

おっとりな亭主で万事まかせきり

知恵つけて首尾やいかにと紫煙の輪

農政にかかわりはなし稲稔る

うるさ型上座に据えて口封じ

和泉市 西岡 洛醉

片ちびの踵に労苦の重さ載せ

ミニ薔薇の可憐が好きでお人好し

笑い上戸 位牌の中に親父の目

話下手それが可愛い妻で良し

寝屋川市 宮尾 あいき

梅雨の土手やと見つけた月見草

月見草今夜も月は出ぬらしい

しがらきの狸も私も目を見張る

ばけ防止のお守りでっせ旅土産

和泉市 岡 井 やすお

ご隠居が脚光浴びる村祭

逆玉が決まって言葉まで変わる

娘は側に置きたし置いては困る

学歴も趣味もやっぱりが要る

貝塚市 行 天 千 代

新聞よりチラシが重い日曜日

お中元私の行く先お医者さん

気の早い梅雨も明けぬに夏が来る

趣味の土鈴やつと百個になりました

西宮市 秋 元 て る

老母の目によかった昔だけが棲む

気がつけば小言言わない父になり

発車ベル昔は二段ずつ跳んだ

バカになった古花鋏 梅雨明けず

静岡市 安 本 晃 授

夏の絵の中で行き交う父子の夢

致死量の悪夢が溜まる紙コップ

風に乗る気はありされど妻の影

もうひとりの私を意識する指紋

河内長野市 井 上 喜 醉

引き潮に止った母の心電図

列島の端まで歩く食いしんぼ

知らん間に相手のペースへ乗っている

手紙までワープロ友情が遠くなる

玉野市 小 谷 仙 山

あやまちはお互い様と馬が合い

幸せのこぼれで猫も小鳥も飼い

輪の真ん中に居て退屈をして居ます

忠孝を今なお老いの杖として

唐津市 筒 井 朴 竜

動物の環境壊すゴルフ場

里へ出る狸公が棲む下水道

膝へ乗る猫は鼠に脅えてる

百獣の王ライオンを蛇が刺す

西宮市 瀬 尾 六 郎 太

阪堺線 街にロマンの誇りあり

進学率誇った頃の教師像

辰の娘と辰の孫とが折り合わず

あなたはね口で失敗する人ね

堺 市 柿 花 紀 美 女

ぼっくり寺勝手な願いして帰り

お互いに可も不可もなく共白髪

三叉線の軽さ考える

犬もまた主人に辛抱してゐらし

藤井寺市 福 元 み の る

七人のなかにかつての部下が居る

七輪を知らぬ娘の居るバーベキュー

向い風避けたら鍛えにはならぬ

恥をかく事にも馴れて老化せず

竹原市 信本博子

問題は戦うべきか見物か
ひらひらとあなた任せの金魚鉢
五十年を埋める話題が切れ無口
風紋の過去は問わない雲流る

羽咋市 三宅ろ亭

人知れず喜び一つくらい持とう
箱掃除母がしまった京土産
捨てられる運命子猫寄ってくる
送りきたスナップ彼のこの好意

島根県 北川民子

腹立つ日眉は思わず濃く引く
目の中に入りもしない孫自慢
鬆のたった頭を脳外科ほめてくれ
見栄張って買った靴です豆ができ

西宮市 西口いわゑ

許す氣へ蛙激しく鳴きやまず
昔話に悟りを一つ頂きぬ
新築のすこし嫉妬をほめてくる
月下美人さわぎの中で遅々と咲く

出雲市 板垣夢酔

まだ愛があつて引き金ちゅうちよする
健康法読んだだけでは治らない
転宅へ貧乏神が先回り
生臭い話が好きなマムシ酒

出雲市 石倉芙佐子

おこりんぼう計算違いもあるでしょう
おこりんぼう一人ぼっちは大嫌い
酔うほどにますます冴えるおこりんぼう
おこりんぼう黙って鍵を置いていく

出雲市 小白金房子

無縁墓地荒れて哀しい雨の音
花づくり政治語らぬいい仲間
娘の見合い最初の顔が袖を引く
飼う飼わぬもめる孫らと猫の世話

出雲市 小玉満江

先生の眉間のしわに理由がある
もう駄目が口ぐせになる老いの坂
編物をせっせとしてる九十歳
私などどうでもいいと嘘っぱち

鳥取県 谷口次男

おとなしい男もいつか爆発し
ネタ切れを巧く補うスキャンダル
ゴマスリの上司の上を行くピエロ
嫁さんを喜ばす手が底をつき

出雲市 竹治ちかし

母と子の数える数が違いだし
完治して傷の大きき自慢する
満たされた手で反戦の旗を振る
ゆつくりと歩いて勝てぬ亀でいる

鳥取市 武田 帆 雀

菊五十鉢許せ今宵は梯子酒
古い名の菊に一途な愛がある

敗因は肩の力が抜けてない
親が子に負けてめでたい華燭の典

鳥取県 さえき や え

残された命へともす灯をさがす

咲きほこる花に病気は知らせない
病人もカエルも鳴いて夜が更ける

退院のよろこびに縫う夏衣

鳥取市 小 谷 美 っ 千

逃げ腰にならぬつもり握り飯

裏切りを許して昼の月を見る

泣きに出た畑にトマト熟れている

積立てが百万円に辿りつく

鳥取市 美 田 旋 風

悪役がいいからドラマ盛り上がる

筋書きになかった子らのUターン

鈍行で旅の名残りをしめくくる

万緑を生かす梅雨なら愚痴よそう

鳥取市 岩 原 喬 水

矢表に立たされ黙秘続けてる

胃カメラに医者の言葉を待つながさ

水虫の天気予報がよく当る

さかさまに寝て枕が見当らぬ

鳥取県 上 田 俊 路

正装の妻は黙した方がよい
終章もうるさい妻と綴ってる

記名する調査は本音隠しとく

ハイテクもなす術もない火砕流

岸和田市 島 崎 富 志 子

ポケットの中で仕事の鬼が鳴る

貧乏くじ引いたは私か夫なのか

千代紙で孫に遊んでもろてます

同居して庇も母屋も貸します

岸和田市 清 野 こ う

海開き祝詞かしこみかしこみて

おつまみをさげて楽しいお茶の友

嫁の愚痴言うて我が身をせまくする

孫の事故 電話の前でふるえ出し

岸和田市 古 野 ひ で

床の間の青磁の香炉にある歴史

父の日に娘が喜々と嫁にゆき

恋心 娘は絆切ると言う

人許す程にゆとりを持って老い

岸和田市 原 さ よ 子

野仏を慕い一輪咲く野菊

残すのが勿体なくてまた太る

老体をかくしきれない夏の服

特選のラベルに弱い私です

岸和田市 芳 地 狸 村

施福寺へ一息入れるボテ峠

(横尾山)

切妻の造りを誇る船屋形

(相楽園)

漂流の淋しさ星に助けられ

退院に注腸検査が待っている

和歌山県 岩 崎 瑞 穂

無欲だと言いつつ毎朝何祈る

長者表生き血を吸った鬼もいる

顔の皺喜怒哀楽の後遺症

言葉など要らぬ目と目で話し合い

和歌山県 田 中 輝 子

ゆっくりと忍耐力を試される

余計なこといすぎたよね星月夜

その内に雨もこやみになるだろう

まつり太鼓に紛れてしまっひとりぼち

和歌山県 山 田 高 夫

一生は回り舞台の泣き笑い

老いらくの恋生煮えのまま終る

固いだけ取り得男の楷書書き

アリバイを知っているのは影法師

大阪市 寺 井 東 雲

玉の汗知ってかりンゴ実を付ける

放火犯火事の現場におるそうな

離婚さたどちらも辛抱足らなんだ

辛抱して診察すれば後三月

大阪市 上 田 柳 影

耳栓をしてる寝顔が憎まれず

このひとが人妻かいなミニの膝

ころりつと死んでと恐い妻ジョーク

忍従の馬鹿になりきるむつかしさ

大阪府 塩 田 新一郎

嬉しくて煩わしくて夏休み

当てにせぬと言った兄弟奪い合い

ありのままで行こうと捨てた白髪染

警告は仏の慈悲か普賢岳

大阪府 町 田 達 子

催眠法聞きかじってる不眠症

お情けを貰う大吉のみくじ

もうよりはまだと言いたい若い気が

自画像の未完にドラマ溢れてる

大阪府 神 保 拓 生

救急で来たとベッドで威張ってる

共白髪と言えない僕は禿の筋

夫婦でも元は他人と妻の愚痴

暖房の効き過ぎですと夏を耐え

岡山県 岩 道 博 友

禿はじめ散髪少し変えてみる

腕組をして剣道の孫へ檄

盆栽の値段は知らぬが賞めておく

腹芸をした吊り橋がよく揺れる

岡山県 山本玉恵
糠よろこびを捨ててに行く日のペダル踏む

七つ子を育てて烏威張ってる

糸の切れた凧で天下の遊び好き

女の本音 義理と言う字の通せんぼ

岡山県 千原理瑛

真実が今埋もれてる泥の中

B型とO型翔んだり押さえたり

プライドあるが芯から妬いた事はない

結果論あれこれ言うて無責任

岡山県 松本元江

話し好きあなたの本音まだ聞かず

人の齒に乘らぬ用心して暮れる

不変不動仁王の眼世をにらみ

変身のきかぬ一途な性で生き

(前月分) 松江市 竹内寿美子

来年の約束はせぬ柿若葉

湖が好きで故郷離れない

船迎え船を帰して鳴く鷗

影消えて寒い男が立っている

松江市 竹内寿美子

草笛を鳴らし少年反抗期

振り向けば振り向いた眼とまた出逢う

嫉妬心女と生まれ詮もなし

泡立器いつか私を見失う

島根県 藤原鈴江

感情の起伏ほとほとてあまし

静かです真夏の昼の子守唄

人妻のその名は重く美しい

ささやかな趣味を楽しむ萩の露

島根県 石飛水煙

汗をかくことが至上のよろこびで

こだわりがあるから仮面のままで来る

忍従はごめんよさっさと別居する

時に邪魔時にいとしく夫婦老い

倉敷市 田辺灸六

落日の水平線に続く明日

引込思案の愚策を笑う昼の月

父の笛途絶えて足を踏み外す

朱鷺かなし佐渡に哀史をまた添える

倉敷市 井上富子

長命の相と言われた手を握る

胃袋に不満を貯めている同居

ちらちらと美人を盗むサングラス

女房がいざと言う日の貌を持ち

倉吉市 渡辺菩句

庭の蛙よ雨が降るよと何故鳴かぬ

石段を数える癖がなおらない

地球のおしゃれみどり匂わせる

正直にバカが付くほど梅雨荒れる

倉吉市 淡路 ゆり子

あじさいも人の心も七変化

老臭をいたわっている匂い袋

チャンネルは野球 ゴルフと夫のエゴ

実家訪問泣きに來たなとすぐ解る

十和田市 齊藤 島

せせらぎの音に呼ばれて川料理

今年また値下げと稲にまだ言えず

クローバーがおしやべりさせる少女の輪

森林浴蛇も蛙も人間も

黒石市 相馬 一花

辛い時そつと襖をしめて泣く

綿飴を食べると顔が口になる

襟足がともきれいなよその妻

大姑むかし花嫁だったのよ

弘前市 村田 善保

秋桜 女ばかりの庭に咲き

悔いのある人生だから長く生き

影法師だけが私を見捨てない

人生に毘あり赤いバラに逢う

弘前市 小寺 花峯

ふるさとを捨てたカラスを友にする

倦怠期近づく妻の二度返事

美しく咲いた薔薇への嫉妬心

厚化粧落とした顔が母になる

十和田市 阿部 進

満ち足りた顔浮かんでる露天風呂

燃えつきてしまえば粗大ゴミにされ

度の過ぎたサービスだから勘ぐられ

古里の道につまづく石がない

伊丹市 山崎 君子

税務署のむつつり右門もいい父だ

フラックでコーヒー飲んでペンを執る

花時計ゆるりと刻む夏の色

バスポート変な写真でかわいそう

寝屋川市 堀江 光子

軽くなることのうれしさ更衣

風鈴を吊せば風が寄ってくる

週末はパート帰りの舞扇

七回忌 月日長くも短くも

鳥取県 田村 喜美子

伝説の浜でデートをしています

童謡を唄う会です行きましよか

梨娘とつとり弁で売りなはれ

わたくしのセンスで夫をリードする

吹田市 栗谷 春子

大正の夢は市電で待ち合わせ

旅疲れ忘れる年金通知あり

月並なことば何よりあたたかい

再会是不味いコーヒにしたくない

茨木市 堀 良江

日焼けどめ私ちつとも効きません
都大路こんちきちんで梅雨が明け
おみこしと太鼓と孫を呼びよせる
出しそびれた手紙事態は好転し

竹原市 岩 本 笑子

夏少女はじける笑い声もして
つゆ草の露 紫に頂きぬ
匂い袋よゆかた姿に惚れ直す
星月夜小さな命生まれたり

寝屋川市 平 松 かすみ

医学書を積み上げコレステロール食
梅雨晴間絵ごろ誘う三方五湖

永平寺ころお掃除深呼吸
八月のお経に邪魔な玉の汗

八尾市 吉 村 一 風

昨日より今日の自分がうんと好き
作文に母は一番えらい人
女です女ですもの一人ゆく
やけぼつくい どぶ板踏んで縄のれん

富田林市 片 岡 智恵子

ちぎれ雲誰かにひかれ又ちぎれ
水入らず猫と自由を欲しいまま
地球狭くなって時間の早くすぎ
振り返る白い病棟老母癒える

諫早市 原田メイシユン

山小屋を縛ったように蔦の蔓
なさない一円玉に似た余生
四海波ボツボツ荒れる三年目

大阪市 松 尾 柳右子

齢かさね薄くなり行く欲の皮
梅雨はれま真つ白のシャツたたむ幸
ソーメンを食べつつ結納話する

米子市 茂 理 高代

雷が落ちてもゆるり紅をひく
通りすぎた橋に残した疵の跡
気位が高くて樹から降りられぬ

箕面市 椎 江 清 芳

世の移り家風を変える嫁が来る
降り止まぬ雨に日銭を数える身
喧嘩した夫婦花屋で顔合わせ

大阪市 富 岡 温 子

ゆつくりと今戦場を語る夫
ゆつくりと腹立ち前のワンテンポ
子供等に目線を合わせ意志疎通

豊中市 上 田 登志実

外人も香煙浴びる観世音(東京寸描)
新都庁 西新宿は変貌す
寝転んで音聞くも佳し遠火花

岡山県 池田半仙

人前は素直な妻を演じきる
造成地 山土芝原と化す

花の美をまるきり出せる備前焼

河内長野市 植村喜代

夕焼けに明日の祈りするばかり

明治女どこまで行っても苦は消えず

優しさの奥に光るは女の目

鳥取県 乾喜与志

塩釜の蒲鉾に惚れ連れもどる (東北旅行)

修行僧の洞は崩れし瑞巖寺

温泉にひたれ夕立来てくれて

藤井寺市 中島志洋

懐かしい訛りに出合う甲子園

惜敗の球児の背に明日がある

シルバースhirt漫画読んでる臍かじり

川西市 野村静雄

不覚にも夫婦喧嘩を妻に勝ち

雄弁になって日記を書いている

病院を出れば精気が溢れ出し

大和郡山市 坊農柳弘

欲望を抑える理性酒に負け

婿養子迎える話妻安堵

一坪の庭朝顔も向日葵も

出雲市 伊藤寿美

あれ以来肩身の狭い猫の髭
家中を片付け主婦のパスポート

ガス止めて出れば布教の母子連れ

吹田市 井上照子

紅ひいてまだ燃えている六十路坂

遠花火あれは初恋した火花

物忘れ続いて姑と妥協する

鳥取県 山根八重

紫のあじさい野心抱いたまま

一枚の賞から高い座にすわり

短くていい付け合いは帰らない

島根県 高野律子

七十の坂にも燃える夢がある

一人には一人の良さで今日が暮れ

数のない花は仏に惜しみなく

和歌山市 北山好笑

忘れ上手な悪女になれぬ日の苦悶

実年の恋は不倫のかげを呼ぶ

めぐり逢い女の坂の急カーブ

大阪市 榎山隆

幻か空似の女駅に立つ

嫁いだ娘赤字補てんは母がする

一つのドラマ成田を離陸する

豊中市 滝北博史

台風も大戦争も耐えた母

鳥取県 黒田くに子

女房の言い訳を聴く不しあわせ

仲人の上司夫妻が別居中

こんな世へ一歩ふみ出す呱呱の声
いたずらな風は許さぬ桃の肌
母がいる厨なんともいい香り

大阪市 松永すすむ

寂しさは頭脳も酒も弱くなり

弱気虫追えどはらえどついてくる

ボタン押すだけで事足る近代化

人間が捨てた空缶犬集め
公園を罫にしているイラン人
価値観の違いが喧嘩の種になる

鳥取県 津村八重子

塩みがききゅうり緑もあざやかに

五指そろこの手を朝の陽にかざす

無になれず頑固に今日も生きている

大阪市 岡田ふみ

金賞をもらうて後の絵が画けず

大阪に自慢がふえた海遊館

大阪で七つの海を目の前に

豊中市 三宅つえ子

充電をして春を待つ車椅子

電光ニュース声高によむ二人連れ

六十歳少し悔いあり髪洗う

鳥根県 佐々木芳正

ひょっこりとマンションへ来た国訛り

破れ傘聞けば茶花のことでした

手ぶらでは行けぬ思案の靴を履く

正面にミニが座って目がある
昔々と回り始めた走馬灯
定年に娘二人の荷が重い

奈良市 米田恭昌

オイオイのあんとと五十年を添う

鳥取県 乾隆風

緋のべべで育った方が親思い
望蜀を抱いて霊柩車を忘れ

鳥取市 春木圭一郎

さりげなく気にかけているああ夫婦
考えりや選び選んだ二人です

金もなく力もないがついてくる

鳥取県 西川和子

胃カメラが写す日頃の不摂生
足跡を辿れば母の懐に

人の世の裏にはうらの唄がある

香川県 木村 明人

岸和田市 三輪 通彦

倅せは夫婦ゲンカの出来る人

二重橋ヤツバリ日本のシンボルだ

年金の暮し仲々日が暮れず

島根県 加本 義良

ビールの泡と昔話を楽しもう

根回しの酒に目線が合うて来る

肝心な節目に釘は打って置く

鳥取市 前田 一枝

旅の宿手づなもゆるみねじゆるみ

歩道橋渡る手すりに愛がある

通院も回り道して花見する

鳥取県 太田 幸枝

御詠歌で仏心の掌に触れる

出征の兵を送った駅がない

真直ぐに生きて仏の目に出合う

豊中市 江口 明光

種切れの夫から貰うのは年金

鯖を読む齢ではないのに鯖を読む

頂点に立てばぐるりが敵に見え

吹田市 山本 希久子

空白が空白を生む蟬時雨

万が一もしもと母は苦勞性

昔話少しアレンジして聞かせ

フィーリング良いのでころり騙される
卒寿でも生きる欲あり医者通い
肩車した頃までは子も素直

鳥取県 幸家 單車

万歩計今日もストレス捨てに出る

故里に螢飛ぶから川がある

育つ孫だんだん電話長くなる

米子市 木村 富美子

反論を呑んでお腹がふくれ出す

新暦も旧暦もまた餅をつく

旧交を温めている夏祭り

鳥取県 西原 艶子

離婚率この頃いやに気にかかる

黙認のふりして父の目が光る

哀しみの染みた枕を陽に晒す

川柳塔唐津九周年川柳大会

とき 11月17日(日)午前10時開場

ところ 唐津市東城内「城内閣」

兼題

「袖」「泡」「歌う」「OL」「英雄」
「カード」「九」(各題2句)

自選集

岩本雀踊子

正本水客

晒し首一つさげてるふき溜り
ああ正義 邪魔な男にされている
すくすくと育つ娘へ桐の花
不揃いの身内の下駄をそろえてる
慈母観音 乳房あたりが温かい

水粉千翁

有働芳仙

生甲斐の青さを海と空と風
こけまいぞ空の広さと風に向き
いくさ楽しくおおそうか父の日か
雨雨降れふれそれそれ迎え傘
片道はきれいな噂聞くとする

兎島与呂志

辻白溪子

風九月お寺の鯉も動かない
大門を抜けていつもの人と会う
朝晩の寒さ地蔵に編む帽子
臆病な心が覗いて恋が出来
人情の笑いを拾うて旅終る

伝説がどの滝壺にも眠ってる
滝しぶき足許から降ってくる
裏側から眺める滝の陽の光
落口に石楠花色を添えている
三段に落ちて流れて水は生き
初恋の頃の貴方が消えている
いつだって見事な嘘の言える人
悲しいネ女の強い国になり
九官鳥の本音に誰も振り向かず
戦友会貴様と俺で若返り
贅沢な個室で患者無理を言う
情熱はあるが金には縁がない
腹の立つ話を養子外で聞く
足洗うてそれから夜の街へ出す
企みがあるから優しいことを言う

本田 惠二朗

一輪の花と対話をして飽きず
出不精を舌三寸でおびき出し
変幻自在 良友悪友使い分け
一に運二に運三でけつまずき
倅せを等分し合い結ばれる

波多野 五楽庵

親と子の積んでは崩す輪廻かな
いかにせん我が酒壺の破れたり
弥次郎兵衛まだてのひらに乗るなんて
さか上がり蜻蛉の交尾見てしまふ
耳鳴りが止まる 蟬でも死んだのか

金井 文秋

健康をまだ維持できている歩幅
長寿国自慢にならぬボケの数
年金暮し予算は削ることばかり
フルムーンしたかつたろと亡妻憶う
生者必滅その時まで頑張ろう

野田 素身郎

相手により病状少し軽く言う
値打ちのある茶器は先代からのもの
年金暮らし時間がくれば腹が減り
テレホンカード貰ってからの長電話
傘さしては通れぬ路地の奥で貯め

工藤 甲吉

センセイが青くなってる区割り案
三割も田をつぶさせてまだ足らず
雲の峰麻生路郎は火の如し
いつからか老いの癖なるとっこいしょ
肩書を外して素面とり戻し

八木 千代

今は気体かみごとに指をすり抜ける
笛を吹くのは今昇ったばかりの月
今折ったばかりの鶴が翔んでゆく
これはたしかな今で体温計の熱
今が発つ風か首すじが寒い

野村 太茂津

出つくした殺し文句の裏覗く
逆らわず本音ばかりで押し通す
線描きの構図を誰かに見せに來い
塩梅もせずに甘辛やかましい
手も出さず臆面もなくお世辞いう

遠山 可住

修業が足らず八時間寝ています
美しい言葉が寒し安楽死
戻らない猫の茶わんへ陽が落ちる
年輪の終りは松喰虫が喰い
ゆっくりと念仏聞こう棺の中

黒川紫香

ふるさとをまた訪れる残暑かな
嗜好品すこし変わって老いを知る
主導権曾孫にとられ疲れきる
お隣の夫婦喧嘩を聞く夜中
ご隠居と呼んでる方が金持ちで

久家代仕男

神畏れ 神と労り合っている
罪だけが残るわたしの消去法
手加減はよそう情性が癖になる
他人にはとても優しいうちのバラ
ままごとが下手で買い出しばかりする

大矢十郎

ハンドルは若葉の孫で墓参り
理工科に習字の時間もある便り
ある日ふと父と娘の風呂ばなれ
謝罪文棒読み 役者でない狸
道で会う議員はあごをしゃくり上げ

松川杜的

何もかも昔と較べぬ事にする
観光客の居ぬ五重塔のありがたし（東寺にて 四句）
年々歳々蟬の声も減ってくる
鳩ひまかあっちこっちで恋をする
頼られそうな修業大師の肩の幅

月原宵明

思春期に父の尊厳揺れ動く
すぐ拍手して根回しのよい会議
グラジオラスに媚を覚える応接間
袋小路仕立てで生きる座りだこ
ゴミの日は亭主の方がよく覚え

藤村 女

なぐさめる私に余裕のない暮し
聞くだけのことしか出来ぬ友の愚痴
割り切れと言った私も割り切れず
あきらめることにも馴れた花鋏
花いちもんめみんな白髪の花となる

小林由多香

あじさいを活けて気楽な客を待つ
禁煙車いらい顔を積んでいる
少年のキラキラ光る目に負ける
了簡の狭さ砂丘で思い知る
悔しさを酒にまぎらす卑怯者

高杉鬼遊

豆のつるもう考えぬ雉子郎忌
補てんリストにうちの会社載ってない
大器晩成駅の階段あがりかね
年金のいのちに暑い夏だった
ジョギングのふたりいつまで生きられる

阿 萬 萬 的

飛鳥路は悲し蘇我氏の夢のあと
氏族争闘血が一塊の土に沁む
蘇我氏横暴皇子次々葬られ
太子と蘇我の間で帝なやまれる
歴史はめぐる蘇我氏飛鳥の地で果てる

西 田 柳 宏 子

石投げて波紋の外で見てる鬼
うっかりと素顔見られた大欠伸
未だ尻に殻くつつけたのが威張り
今日も亦暑さに負けた万歩計
色褪せた頑固を抱えている孤独

小 出 智 子

等身大の鏡そっくり子に譲る
女とは思ってくれていないらし
言うことを聞いてくれないネジ回し
うれしやなわが寺子屋も夏休み
きのう注文したのは終の冷蔵庫

橘 高 薫 風

瑞瑞と蟬はたかぶり子は娶る

上村松室画伯米寿

四季浄土花は歌うて鳥匂う

直原玉青先生米寿・玉青館落成

青玲の気の魂と凝る館

「短詩 平成川柳作家抄」・好評・発売中

* 川柳作家必携の書

全国の新聞（読売・朝日・毎日・東京・中日・その他）に広告、大きな反響を得、好評を博しています。

【装丁】A5判・上製本仕上げ・ビニールカバー・ボール箱入り保存本。

【定価】1850円（消費税込・送料別）

① 第一回全国川柳大会（主催・日本伝統美保存会）*最優秀・優秀・女性奨励賞受賞者の色紙・作家作品抄 *佳作入賞作家など全入賞作家1485人の作品……………

② 明治以降有名作家の作品を創作参考の「例句」として収録。

③ 創作川柳作品の保存欄*あなたの川柳作品を日誌形式で記入できる編集。

【申し込み方法】*代金後払い。ハガキに注文冊数と住所氏名を書いてお申し込み下さい。

〒194-001 東京都町田市金井385
芳文館出版・川柳作家抄係

同人吟

秀句鑑賞

—八月号から

林 荒 介

毎号雜文に目を通した後は、ばらばらと頁を捲ってお終いの柳誌だが今回は精読した。

日本列島は北海道を含めて、緯度・経度とも約十五度の広がりがあり、太平洋側と日本海側とは氣候も違えば、人の氣質も違ふのに、作品の上ではそれが見られぬ。生まれ育ててくれた風土に根をおろした作品が欲しい。川柳は省略の文芸だと思つてゐる。大切に言葉を撰び、十七音に作者の念を凝縮しなければ、作品とは呼べない。省略された作品を如何に読むか、試されることになった。

悪い子はどこにもいない松の芯

齊 藤 嘉 島

庭の松はとくに新芽を摘んで、二番芽が吹いて来ているが、数鉢の摘み残しがまだある。太い枝からは太く、小さな枝からは小さな新芽が素直に天に向つて伸びてゆく。どのミドリも力一杯に自分を主張しているのだが、身勝手なニンゲンにミド리를摘まれてしまふ。

レッテルを貼るのはその身勝手な、にんげんたちの責任ではないだろうか。「松の芯」から作者の念が伝わつて来る。

父の日が来たから栗の花が咲く

榊 原 秀 子

お父さんの忌日と取るのは読み過ぎだろうか。読んだ瞬間に「ご命日」と思つてしまつた。六月の第三日曜では面白くない。「来たから咲く」素朴な栗の花に父の残像がある。

お母さんひじきおいしゅうたけました

本 間 満 津 子

これも鎮魂歌。素直に表現されているが、内容は重い。妣の歳を超しても、「はは」は何時までも生き続けている。

弱いものいじめはしない鬼あざみ

高 杉 千 歩

二米近い草丈から鬼薊の名が付けられたのだろうが、秋に咲く花は可憐だ。弱者との連帯の中から川柳は生まれる。日本には八百万の神々がいられる。砂漠の宗教との違いはそこにある。神仏の全ての存在を認める非合理なところで、川柳は創られると思つてゐる。

ポケットがあるから耐えている拳

石 川 侃 流 洞

青空に本気で石を投げてみる

竹 内 す み こ

生き残るために頭を下げておく

嘉 数 兆 代 賀

生き死にの間の川柳だが処世術は難しい。

なかなかのことで「生かされて」の心境にはなれぬ。ポケットの中で我慢している拳、ポケットが無ければ拳が炸裂してしまふ。いくら石を投げて問題も解決しないが、次第に心は鎮まってくる。さりげなく謝つておけば波風はたたぬのだが、右を見ても左を見ても腹の立つことの多い昨今だ。

八月の虹がきれいな河川敷

羽 原 静 歩

八月はもう沢山だと思ひながら、八月が近くなるとこたわつてしまふ。河川敷が佳い。平和慣れた河川敷にはヒロシマの痕は見当らぬが、脳裏に焼付いた傷は永久に消えることはない。

雑音もモーツアルトも聞いている

福 井 桂 香

思い出し笑いをしてるオルゴール

松 川 芳 子

待つ事は何んにもないがカレンダー

谷 真 風

作品によれば闘病中のご様子、お見舞い申しあげます。カレンダーも今では豪華になつて、私の部屋には鉄斎の晩年作品のと、平櫛田中の絵と書の二つの月捲りが吊つてある。暦には昨日もあれば明日もあり、今という時間もある。病室にもいろんな音が聞こえてくることでしよう。ご養生をお祈り申しあげます。オルゴールからは楽しかった昔が甦つてきます。

若柳潮花

東野 大八

て仲人役もつとめた潮花君であった。

少し引用文が長くなったが、以上は本社
黒川紫香副主幹の筆者宛私信と潮花悼文をア
レンジしたもの。潮花は昭和59年9月10日死
去。行年七十七歳、秋岳茂照居士。

潮花・水客・紫香の仲良し三羽ガラスは、
川雑内でも自他共に評価され、「路郎先生も
異色の存在」と自慢されていたとある。

その三者揃って喜寿を迎えた昭和59年7月
16日、そのお祝い吟行として近江八幡へ旅し
た折は阿萬萬のを加えた四人で「よろこび」
という小冊子を発行している。この中に付録
として、川雑（昭和31年12月号）所載のこの
仲よし三人を語るといふ座談会が採録されて
いる。その中の「潮花を語る」項の中から、
潮花の人となりを語り合った路郎・葎乃、梨
里の言葉を抄録しておく。

路郎 日立造船のような所に勤めていて川
柳もやれば舞踊もやる、一寸普通人が想像も
出来ない活動家である。非常に女性的である
かと思えば、親分肌のところがあるので、み
んなついてくる。考えと矛盾した性格の持
主のように思える。話術も相当巧みで、すぐ
誰もが十年の知己のようになってしまふ。川
柳雑誌婦人友の会の肝いり役で、女流作家の

「潮花とはじめて会ったのは、小学校三年
の春、転校先の中津第一小学校で、同じクラ
スに彼がいた。私も小さいが、この相手も、
「こまかい奴だな」と思ったのが第一印象で
目立ちたがり屋でチョカチョカとよく動いた。
組対抗の野球試合で、ピンチヒッターでボ
ックスに立ち、うまく当てたのはいいが、一
目散に三塁へ走り、審判の先生が笑いながら
「セーフ」と宣した笑い話が残っている。
お互い身体の小ささをかこち合いながら意
気投合し、その後、彼は日立造船へ、私は阪
急電鉄に就職し、正本水客君と三人で文芸同
人誌を発行し、ひとかどの文士気取りになっ
ていて少年から青年期へ。そのうち水客君の
縁で、福田山雨楼さんが指導の大阪鉄道局の

川柳会へ顔を出すようになり、そこで麻生路
郎先生に出あい、お教えを頂くようになった。
こうして本誌の前身『川柳雑誌』の事務所へ
出入りして川雑運営のお手伝いをするうち路
郎先生の奨めで、昭和33年句集『三人』を出
し、五百部全部売切れ、先生を喜ばせた。
その頃、彼は母の姓の丸尾潮花を名乗って
いたが、日本舞踊若柳流の名取りになり、柳
号を若柳潮花と改めた。本名は竹内茂、明治
41年3月28日明石市生れである。天性の世話
好きで、川雑婦人友の会の世話人で東奔西走
し、一時は百余名を集める賑やかさ、路郎先
生御夫妻に可愛がられ、戦時下の疎開で先生
一家が大和に疎開の折は、三女梨里ちゃんを
預かったし、次男一歩さんのお嫁の世話をし

インタビューをやったのと、柳号が潮花というやさしい名だから女とまちがえられて、女性から同性あてのような手紙を貰ったり…。

霞乃 婦人友の会の集いで、出席された娘さんが、お母さんを亡くされたこともあって、潮花さんを本当のお母さんに見立てて手紙を書かれたそうです。それが男の方とわかった時はきまりが悪かったそうです。潮花さんが川雉の近作柳壇へ登場されたのは昭和13年8月号だったと思います。とにかく句会部幹事の花形で、お茶も汲むし、句箋も集める。その忙しい中で席題も作っていつも三才に入る。相撲吟でも優勝はいつも潮花さんで、「潮花君には勝てんなあ」とみんなから感心されていました。

梨里 女性から手紙がくると必ずこまめに返事を出されていたそうですが、その手紙も女性的だけど、実際に会っても、女の人にあまり男性らしい感じを与えない人ですね。

霞乃 男の方からも万年青年といわれますが、精神年齢は万年青年ですね。昭和22年から27年ごろまで本名の竹内姓、27年4月からペンネームの丸尾姓。この人の句はいつも艶っぽいスケッチが抒情的なものが多い。この人から知性の句や批判的なものはあまりみつ

かりませんね。

どの顔も嫁してしたがう娘に見えず

この辺で捨てる相手へする無心

梨里 句もそうですけど、好みもそうなんです。戦前だったか、どこかへ行かれた時のお土産に花瓶を頂いたのですが、それが十七八の女学生からのプレゼントみたいなんですよ。

霞乃 あの花瓶は私も覚えていますが、あれを頂いた時には、ほんとに潮花さんのセックスを疑いました。それ程印象的でした。

「小ぶりで女性的であったので、昭和天皇の御大典の折、昭和3年やから二十歳はじめに、女装して祝賀行列に参加したところ、夜のことでほんものの女と間違えられ、大正橋の下へ連れ込まれ、あわやの一幕を体験した程で、とにかく男にも女にも大層なもて方であった(黒川紫香書簡)」

「亡夫の想い出を申し上げますと、周辺には女性が多く、川柳・舞踊とも女性の交際が多く、私も一緒に仲間入りをして、どこへでも出かけたことであります。外食が嫌いな人で、どんなにお腹が空いていても家へ帰り、お茶漬けで満足していました。黒豆を煮るのが殊の他上手で、年中行事のように美味しく

頂きまして、暮の忙しいときは大助かりでした。家庭でも話好きで、その喋り方が面白くて楽しく、何度同じことでも飽かずに聞かせてくれました。日舞も教えてくれましたが、仲々上達せず、男のおれが女舞をするのに、女のお前がなぜ出来ぬとよく叱られました。花がとても好きで、定年後はベランダに足の踏み場もない程、鉢植を並べて楽しんでいました。辛抱強い人で、白内障・大腿部骨折、最後のガン性胸膜炎も、私に苦痛を訴えることもせず、それだけに胸が痛みます(竹田花代子書簡)。

高槻川柳サークル卯の花会長 川柳塔副理事長などをつとめ、昭和59年9月黒川紫香、正本水客ら知友らの手によって『若柳潮花遺句集』が出ている。竹内花代子(潮花夫人)の潮花遺句の『踊りの句』の推賞句次の通り。

御ひいきへ春口上の手をつかえ 潮花

忠信の出となる鼓締め直し

助六へ宵の廓の通り雨

また恋の仕草にうとい藤娘

傾城の胸の重みのかかる帯

緋鹿子へ紙の吹雪の散る櫓

樂屋風呂男へかえる湯をあびる

▼次号は「宇和川木耳」

柳籠裏三篇研究 (九丁)

佐藤要人・八木敬一・七久保博

岩田秀行・紀内恒久・西原 亮

大野温干・青木迷朗

鈴木倉之助 故岡田 甫

144 おかしさは和尚陰馬を買ってミズ

佐藤||意味がよく分からないが、この和尚はなはだ好色のくせに、陰間買いに一度も行ったことがないらしいのは、どうも腑に落ちぬというのであろうか。坊主が陰間を買うことは、大目に見られたことだし、法の規定にも束縛されなかった。それにも拘らず陰間に興味を示さぬのは、けだし他に掘っている穴があるからだというのがちであらうか。手の届くところに後家などがある場合、何もわざわざ陰間買いに散財する必要もないはずである。七久保||川柳では、和尚を詠む場合はおむね好色漢としているが、例外もあるという

ころか。大黒専門なのであろう。その堅物さがおかしいという意か。

岩田||弘法大師の昔より、和尚と男色はつきものであるのに、近頃のどら和尚は、その最も和尚的であるはずの陰間すら買ってみたいという意味であらう。和尚の、やはり女がいまいわいという俗の在り方、つまり凡夫そのものでおかしいのであると解したい。

よし町でうつはりちぎな和尚也
よし町は損だと和尚気がそれる
鈴木||礎稿、岩田氏説賛。岡田||同。

六 15
五 17

145 出合茶屋へのこの筋骨をぬかれ

佐藤||上野池の畔の出合茶屋は男女密会の場合である。満を持して来る男女なので、根かぎり精のつづくかぎり、淫楽にふけるので、女はまだよからうが、男の方はぐにやりとして、もう役に立たなくなつて仕舞う。これを「筋骨を抜かれた」と面白く表現した句であるらしい。

岩田||「筋骨を抜かれた」と面白く表現した句、とするのは説明不足で、「俚言集覧」に筋骨を抜かれたやう 疫病の意とあるように、「筋骨を抜かれたやう」という成語を踏まえた事を明示してほしい。

すじほねをぬかれたなど、まけたやつ

二〇 18

出合茶屋しまひはおつべしよつて入れ

末四 29

西原||賛。「筋骨を抜かれたよつ」(くたいたになるまで疲れる。疲れきる形容)の成語あり。

鈴木||岩田氏お見事。岡田||同。

146 やたらさせるのを定家は壱人り入れ

佐藤||定家選といわれる「小倉百人一首」の作者の一人、「相模」のことであらうか。

相模守大江公資の妻であつたため、夫の官名を称せられたので、本名は乙侍従といった

という。「相模下女」を持ち込んだだけの句案であらう。

百人一首迄が相模は恋歌なり 七二六

西原〓賛。一度もさせなかつた小町と対比しているのであらう。「恨みわびはさぬ袖だにある物を恋にくちなんこそをしけれ」。

青木〓賛。

百人に女二人は好き嫌い 三二六

鈴木〓礎稿に賛。岡田〓同。

147 白無垢でいつそ髪がぬけんした

佐藤〓「いつそ」という問投詞は、前後の關係で若干の意味の相違があるが、「一層」という語の略化したものといわれる。

主題句の場合は、「一層」の意に近い語感があるうか。

八朔の白無垢を調達するのは、花魁にとつて大変な苦勞、もちろんスポンサーがつけばよいわけだが、それは容易なことではなかつた。そうした紋日前の氣苦勞が、白無垢を着てほつとしているものの、秋の抜け毛に無縁ではない。「こんなに髪が抜けてしまった」という女郎の述懐も切実な響きがある、という意であらうか。

八木〓八朔、白無垢のいわれは、高橋のオコ

りに癢するという俗説になっている。オコリは今でいうマラリやだが、熱病などの後には髪が抜ける事もあつたらう。

七久保〓巴屋の高橋太夫を詠んだもの。

岩田〓高橋に賛。八木氏説のように髪に抜ける事、間違ひなからう。

白無垢でとかく寒氣がしいす也 三二七

西原〓礎稿に賛。やはり、女郎の苦勞でしう。

鈴木〓女郎の苦勞では「髪が抜けんした」が付かない。やはり高橋太夫ととりたひ。

岡田〓面説、どちらにもとれる。

148 幾人にさせたましれる祭り也

佐藤〓江州坂田郡の筑摩神社では、四月一日に鍋祭というのが行われる。この日、氏子の女は関係した男の数だけ鍋をかぶり、神輿の渡御に供奉することになっていた。これを倅ると神罰を蒙るということで、村の女達は正直に、数だけの鍋をかぶつたものらしい。「猿蓑」には有名な左の句が載っている。

君が代や筑摩祭も鍋一ツ 越人

主題句は女のかぶつて歩く鍋を見て、幾人にさせたか一目で分かると、ずばり表現したものとされる。

性わるのちつきに知れる神事也 六五三

岩田〓賛。筑摩祭は王朝の昔より見える。

西原〓賛。彦根城より車で五分たらず、琵琶湖岸に社あり。社前の石柱に「筑摩神社」とあるが、一切の説明なし。

岡田〓同。

149 村の諏から尻で来る美しさ

佐藤〓「から尻」は「空尻」また「軽尻」と書く。当時、荷をつけぬ馬に旅人の乗ることをかく言つたが、手荷物五貫目までは許されたとある。しかし、荷物運搬としての場合は、四十貫を一駄とする本馬に対し、その半量の二十貫までを軽尻として取り扱つ定めであつた。

主題句は村の裸嫁を諷した句と思われる。

八木〓空尻馬、賛。美人だから持參金や持參の荷物も少ない。

七久保〓賛。お説の通り、裸嫁をから尻馬にかけただけの句である。

岩田〓駕籠で来る嫁に對して、田舎嫁を馬に乗せる趣向に、さらに「から尻」によつて、

はだか嫁の趣向を取り込んだ面白さ。

鈴木〓賛。岡田〓同。

水煙抄

黒川紫香選

兵庫県 円増純子

知恵袋借りて姑とは仲がいい
素足から土の温もりもろて来る
広すぎる食卓へ子を待ち続け
ジグザグの人生を縫う針光る
社内旅行上司が酒を注いでくれ

鳥取県 大角幸代

逢いたくて逢えない夜の星あかり
同じ夢見て幸せに暮らしてる
ケセラセラ入道雲と旅に出る
梨の芯酸いくて私戒める
童話の鳥はいつまでも青いまま

摂津市 木下道子

叩かれて西瓜色よい返事する
寝返りを打って唐黍焼き上がる
早起きをしてくもの巣に引っ掛かり
恐竜のような雲湧く夏休み
博物館ガラスの向うにある昔

松山市 宮尾みのり

泣き虫の想い出もあるビスケット
独り身で妹思い母思い
野良犬も猫もどこかで雨をよけ
リタイアをしてから視野が広くなる
揃うたら力ともなる頭数

松山市 白石春嶺

操縦のミスくもの巣に朽ちる羽根
一幕で語れぬ母のいばら道
母が泣くドラマをそばで子が笑い
編隊が健在里の赤トンボ
先生も加勢ようやく鈴が割れ

砂川市 大橋政良

落丁もあって身近な妻になる
満ち潮を見ている欲のない背中
狐火や里は今年も嫁ひでり
酔って候無職太平楽を言う
ポットから湯が出るありがたい暮らし

浜田市 中尾 まゆみ

風景画にピエロのわたし似合わない
死角衝く眼だなどにかく爪を切る
こぼさぬように思い出を汲む杓を撰り
文面をしかと受け止めバネにする
刃こぼれの論争だろう触れずおく

名古屋市 藤井 高子

少々は酒もたしなむ良い羊
雑学の初歩で六十路が面白い
許すこともおぼえ人間らしくなる
あんパンの臍に明治の味を恋う
平熱で聞けば何でもない台詞

富田林市 池森 子

愛が渴いて逆回転をする女
裏切りを許して待っている小指
遠い日の彼とわたしにある民話
北風に抱かれてやさしさを知った
三番目の兄は振り返らず走る

広島市 流 奈美子

真実を拾って帰る裏通り
生きてゆく指針 雑草から学ぶ
八月の熟れたみかんにある愁い
湧水に口づけをして充電す
病葉の一枚を手に淡き日々

熊本県 大川 幸子

ロボットにある筈がない恋心
うしろ指等は気にせぬ翔ぶ女
スターになった気分映画館を出る
血圧をあげてまで碁に夢中です
一寸おくれて話がしたいちぎれ雲

大阪市 新井 朋子

ざわめきの中から暗号送られる
君を探す人込みの中森の中
17歳はじめてはいたバレーシューズ
いたずらに鳴らしてみたい非常ベル
あの人の胸までとどけシャボンダマ

静岡市 沢田 きん

派手な音割れた器をついで見る
花言葉抱いて花のころ知る
物忘れ惚けが来たねと先に言い
ゆっくりと話をしたい白い雲
浮き沈み皆んな知ってる古日記

鳥取県 西浦 小鹿

北方の電波が乱れやすくなる
一線を越えて自信が顔にでる
咳こんだ本音が喉につまってる
政策が自信過剰になっている
友だちの知らないふりのかくれんぼ

米子市 足立 由美子

夏バテをせぬよう木にも水をやる
雨しきり雨の遊びを考える

旅の終 次行く旅の話する

印象をよくする白い色を着る

変わりなく湖にまた陽が落ちる

尼崎市 児玉 歌子

母さんが居る贅沢を噛みしめる

虫けらの意地をノートの端に持つ

もう少しお酒が欲しい差し向かい

自棄酒も振る舞い酒もある縮図

じつくりと急所突いてる句読点

尼崎市 的場 十四郎

うっかりと仕掛火花に乗った人

愚かにも酔うて隣の戸を叩く

七夕に恋あこがれてきたほたる

ぜいたくな言葉待ってる披露宴

紙コップ男の嘘を聞きもらし

久留米市 鶴久 百万両

おふくろのその後気になる日の帰郷

受け皿が欲しくて鳩を飼ひ慣らす

二人目の母の優しさには負ける

虹掴むまでは俺にも意地がある

踊り子になるわと母を慌てさせ

鳥取県 大角 正道

朝顔が咲くから早起きをしよう
不機嫌な顔が鏡に映ってる

足し算をしたらボーナス足りません

お似合いの夫婦といつも褒められる

鳥取県 大角 幸恵

もう少し一緒にいたら好きになる
好きだよと言われる前に目が覚めた

この道を肩寄せ合って歩きたい

返事など来ない手紙を書いている

旭川市 朝倉 大柏

とつとつ話の音が済んだ高笑い
喋るのに逆らわず父勝っている

満点の靴五線譜を跳ねて来る

躓いて知る平凡な語の深さ

富山県 高畠 五月

再検査言われて日記の乱れ文字

へそくりのための腹巻き買いに行く

満ち足りた日は夕焼けも美しい

米値下げ案山子が雨にしょぼくれる

富山県 大西 桂子

分離帯碎いたバイク父をのむ(父を懲ぶ 四句)

事故前夜虫のしらせか墓のこと

おしゃべりな小犬も通夜へ声たてず

父の日に抱えきれない愛惚ぶ

孫が来る花火をたんと買つて置く
尼崎市 森 安 夢之助

民宿の井戸に西瓜が浮いている
少年のハモニカに乗る夏の風
再就職素直に靴のひもしめる

尼崎市 尾 宮 弘 治

催促に口より怖い目がひかる

青空に蹴ったボールを子等と追う

調理師の資格に優る母の味

選挙権自慢した娘が棄権する

藤井寺市 高 田 美代子

おはようの後は戦となる職場

泣きたい時に泣けたらスツとするだろう

中途半端に許して悔いることばかり

続編は少し大人の振りをする

大阪市 新 井 泰 子

車椅子の詩人やさしい風運ぶ

何遍も聞いた話と夜半のお茶

日常の茶飯事以外とややこしい

風鈴がエアコンの風受けて鳴る

広島市 森 田 文

ひばり忌に勿忘草を歌ってみる

くる時が来たか夫の総入歯

葱坊主蝶がくるかと聞いてみる

種無しのスイカの親をふと思う

あじさいの彩を狂わす一つの計
女にはなれても母になり切れず
心乱れて仏の花が枯れたまま
寝返りをすぐ打つ人のうすい影
出雲市 岸 桂 子

好きな事してくらしてと放つとかれ
人嫌い今日の予定も箱の中
グルメツアー添乗員はバスで待ち
セレモニ―みそぎの鳩は先に発ち
酒田市 永 澤 裕 子

一言が言えぬばかりにうつを溜め

やさしい人の本音なかなか掴めない

煽てとは知りつつ乗ってみるも策

美術館 知的な顔になって出る
静岡市 小 木 久 子

順不同だから欲ばる余命表

来年の約束をする花ばさみ

反対をした僕だけになつく猫

夏帽子風の誘いについて行く
今治市 渡 辺 南 奉

玄関を掃いていい日であるように

病院の長い廊下は無表情

どの花を切ろうか迷うほどに咲き

いつまでの余白が愛に浸ってる
島根県 槻 谷 一 葉

静岡市 浅子 まつゑ

平和とは良きものですね花の下
末席で聞いているのも面白い
水墨で総ての色を出している
お相撲さん身体の割に小さい声

香川県 植田 チカエ

お早うと一声くれて母一人
短冊に老いの願いを吊して
八月の暑さ吹つとぶ阿波踊り
琴の音も共に聞いてほしい人

松山市 丹下 美津子

寡婦の句にいつか涙の句が消える
小利口に動いて足を踏み外す
夫婦して本屋をはしご雨の午後
胃カメラがこつそりのぞく胃の秘密

兵庫県 森脇 和子

花の無い部屋で悲しい夢をみる
女部屋深夜のベルに揺れてみる
輪にとけて程よく遊ぶ小半日
先ず位置を確かめゆつくり柳誌繰る

和歌山市 山口 三千子

受け皿が欲しくて無理を承知する
抓られた人しかわからない痛み
止り木が高くて話噛み合わず
野次馬がわたしの背中押しにくる

岐阜県 渡辺 杏村

二学期で黒んぼもいる登校日
衣替え少し暑いと腕まくり
海釣りもいいねと決めた縄のれん
ビールよりお酒が売れる炉ばた焼

大阪市 勢理客 トミ子

愚痴言えるあなたの傍が指定席
過労死の話聞いている床柱
トリカブト事件で怖い花と知る
猫の名をつけるに三日考える

芦屋市 黒田 能子

宿かりの出て行く先が見え始め
奥に住む鬼が時々騒ぎ出す
価値観が同じ仲良く暮して
片言の孫に合わせる電話口

出雲市 原 章峰

借り越しにならないように長らえる
伝説の姫も兎も泣き上戸
哀しみの数ほど燃える曼珠沙華
虹の橋渡る手摺がありますか

東予市 小山 悠泉

一言が多くて妻に嫌われる
許せない事も許して父も歳
酔いました女怪しい隙を見せ
見栄捨てた鯛がかかった鰯網

岡山県 中 嶋 千恵子

染めむらもなくて培う母の愛
茶柱がしこりを消した嬉しい日
わざわざに誘いがかかる今日の席
栄転の椅子だがストレスたまるだけ

西宮市 菊 池 トミエ

雨降れば心が痛む土石流
山門の高所に目立つ千社札
子の話今日は聞き役ソーダ水
鹿の仔に大きな耳を向けられる

尼崎市 長 浜 澄 子

騒動の種一つ置き客帰る
ネクタイを締めて表の顔になる
利休下駄浴衣の裾を弾ませる
関白にさせて黒子で通す妻

鳥取市 加 藤 二 代

怒ること忘れておんな帯を解く
公約を泡のようにはさせまいぞ
困ったな夫が家出をすると言う
OKの合図にブラを干しておく

和歌山市 田 中 み ね

ごたごたの渦に巻かれて瘦せこける
亀だってその気になれば走れるさ
お買得のチラシに弱いその財布
根っからの無口対人恐怖症

香川県 工 藤 吟 笑

夜の道 心を読まれそうな月
山裾の家がカスミの中に浮き
禁煙も禁酒も明日からにする
派手好み 色の尺度を見失い

香川県 川 崎 ひかり

待った甲斐あって文金高島田
古里の訛りと一緒に母が来る
偏見を捨てれば丸い輪が出来る
運命を大きく変えたあの出会い

姫路市 松 本 一 郎

億という土地雑草の茂るまま
オープン粗品を貰う列にいる
文学の館につづく石畳
毒舌がだんだん冴えて老い頑固

尼崎市 鈴 木 良 征

名水で孫のミルクを溶いている
酒ぐせを知ってか万事さけてくる
貫禄のついたライバルまだ独り
右へならえしたくて出した掃海艇

尼崎市 山 田 保 蔵

果物をさげて退屈分けにくる
トマトにさくら人をおちよくる銀行さん
今晚の花火見るため孫ヒルネ
長寿番組スポンサー疲れて交替する

寝屋川市 宮崎 菜月

誰も来ぬ日のくつろぎへ雨やさし
もう齢だ日々省略で生きている
縁あれば又会う人と思う人
柔な手で草の刃物に負けました

尼崎市 田中 薫

昼の蚊は叩かずにおく白い雨
ゆつくりと歩けば街の顔が見え
動物園へ来てペンギンは風邪をひき
自分史の空白過去が痛み出す

尼崎市 山本 すみ

叱るにも氣遣いのいる反抗期
美しい造花で蝶を待ちこがれ
ガス点火わたしの今日が始まりぬ
いたずらな風に風鈴腹を立て

堺市 桜井 莊次

饒舌な口が男を料理する
美しい文字で遺言書いている
座り直してからの話の長いこと
独り者影と住んでる四畳半

貝塚市 池田 寿美子

シベリアに無念の叫び浮ぶ亡夫
今更に鎮魂名簿おそ過ぎる
戸隠に囁りしみる森の詩
高原のひと駅歩きそばの味

兵庫県 北川 とみ子
悔い少し残して炎える爪を切る
待たされて待つて歩幅の揃う古希
それとなく君の視線にくすぐられ
見てみない振りで歯車合うて来る

尼崎市 吉永 伊三郎

良妻賢母が手綱握ってる
意地張った一夜も明けて葱刻む
日の丸の旗がわが家に無いという
戸惑うた果てに掴んだ売れ残り

尼崎市 中澤 向西

待たされて路傍の石を蹴ってやる
手ぶらではゆけんが電話しておこう
コーヒーの冷めないうちに和解する
ダブダブのシャツ着てはしゃぐ孫二人

広島県 森川 抜智

幸福の木 幸福すぎてよく延びる
何遍も言うようですがとくどすぎる
間違い電話そつけないく切られ
油絵の石仏すこし若すぎた

京都市 山海 友照

嫁と住む希望に青い秋の天
信じてる人の噂に鳴る風鈴
ならぬならぬと自分の掟に縛られる
わたくしの写真が意外な人の手に

和歌山市 森 茜

百合の種 少女の胸で発芽する
アーケードに来て突然の雨あらし
自転車寝そべっている始発駅

香川県 田 中 ふ み

加減して体重計にそつとのる
今日の憂さ踊りの中へ埋めてくる
老いの留守居重宝がられてよく動く

京都市 小 林 英 子

戻れない橋の絆をたしかめる
宿帳に妻と記してくれたひと
島原の子守唄消す火砕流

尼崎市 木 下 義 嗣

宅急便割れずに届いた肥後西瓜
情熱がまだ残っている老いの妻
風鈴の音が気になる浅い夢

尼崎市 湊 修 水

糸柳のように別れ話がつれてる
庭下駄を草履に替える虫の声
おみこしもギャルも待ってる夏祭り

尼崎市 佐 野 六 浦

内気だと言った此の人よく喋る
情け無用土用の鰻殺される
実験に鏡へ猿がうろたえる

尼崎市 明 壁 敏 之

突然の客に慌てる独り者
楽しみがふくらむ話のつてみる
雨の日に別れ話を出してくる

寝屋川市 井 上 す み れ

初対面話とぎれて髪を賞め
ゴシップをじっくり読んで美容院
あじさいの花を咲かせて水たまり

熊本県 高 野 宵 草

気がかりな老母へ不肖の子が多い
今日のこと思い出せない日記帳
仲直りする共通の敵が出来

西宮市 岡 本 道 子

問いかけてあたりさわりのない話
髪型が気にいらなくて梅雨疲れ
うつぶんを抱えて嫁のきゅうりもみ

尼崎市 前 田 い わ お

陽が昇る地球が回る気がしない
汗かいた甲斐があつたよ山の上
夫婦とは一人になって知る重み

尼崎市 井 崎 ミ サ 子

絵はがきの心遣いがうれしくて
目にしみる青葉の東寺でハイポーズ
もめ事を聞き置くだけのゆとり出来

尼崎市 萬本よし子

生涯を雑用ばかりで終りそう

園児らの演じる鬼はユーモラス

マイホーム ローンが済めば二人きり

尼崎市 水流悦代

肩書で人の値打ちはわかりかね

悲しみを日記の中へ刻み込む

毎日のおかず考えうんざりす

柏市 上鈴木春枝

口説かれてまっすぐ揺れるイヤリング

瞑想をしてます妻の長い風呂

約束を破り悪女のふりもする

香川県 永峰伽名子

重宝してますの一言励みになり

所詮他人わかってもらえぬ歯痒いさ

花一ぱい埋もれて帰らぬ旅に発ち

熊本県 岩切康子

オイオイと昼寝を起す夫憎い

友逝きし悔し涙の雨激し

助手席の眠りを起す着きました

熊本市 黒田緑

自転する地球と生きて来た命

螢光灯の息切れに似た眠り癖

秒針にコチコチ命削られる

佐賀市 江口万亀子

母として場所わきまえて物を言う

しまい風呂ぼんやり蛙の声を聞く

男と女泳ぎつかれる熱帯夜

十和田市 阿部喜久江

お月様あまり綺麗で遠まわり

世話になる嫁さんだから大事にし

育児書の通りにならぬ子の育ち

和歌山市 玉置当代

嫁ぐ娘を送る車中の四人掛け

梅雨晴れ間どつと洗濯物を干す

らっきよが旨く漬かったからカレー煮る

和歌山市 堀畑靖子

職安へ登校拒否の子が出向く

わたくしの批判は陰でなら許す

あの恋は無駄でなかった茄子の花

枚方市 中山おさむ

ストライクゾーン抜けて嫁姑

ララララ若い娘にもっている

着地点睨んでリズム整える

枚方市 森本節子

いつになく背すじのぼしてお茶の席

置きざりの自転車かたむき夏の雨

万歩計スカート穿きかえもう忘れ

鳥取市 大坪天涯

悪友の着くまで長し夜は速し
新築のにおいがいつの間にか消え
ふる里の川で魚とたわむれる

大阪市 今西静子

祇園の夜の約束を待つコンパクト
他人にはいつもよい顔する夫
無理をせず風のままに生きてます

高槻市 芦田静江

悲しみの日記が白い無常観
羅漢寺竹の向うにも父の私語
血の色に夾竹桃が咲いて夏

静岡市 大村正雄

煽てる心の裏にある野心
正直に歩いて人に裏切られ
かじられた臍にうれしいプレゼント

静岡市 増田扶美

無人駅雨後の紫陽花きらきらと
駅で逢い山でまた逢う花の旅
栄転と言うが勇退待っている

静岡市 柳沢たま

髪洗う女のうしろ隙だらけ
公園のベンチ夫婦でないらしい
歩けるは素晴らしいこと松葉杖

箕面市 岩津ようじ

ダイレクトメールさえ来ぬ無聊の日
そいうが勝つこともあるタイガース
むごいこと長旅終えた鮭を焼く

広島県 岸田武

新人に職場の空気ゆさぶられ
雨宿りまた無駄なもの買う羽目に
送り主見れば何かとすぐ解る

熊本市 遠山夏生

にんにくの調味がふえる妻の愛
雨宿り零みつめている二人
二人して剪定鋏持つゆとり

岡山県 後安ふさえ

星一つ流れて友の計に出会う
テレホンカード使わずやはり銭さがす
男と女泣くのはやはり女だけ

芦屋市 根来敬

思いやりの足らぬ言葉が兇器にも
狭かっただろうと鳥の死に詫げる
つまずいてひよいと思案の先が見え

米子市 小塩智加恵

暇だから三面記事を念入りに
偶然が出来すぎているお膳立て
反対の署名は妻の名だけ書く

神経をみんな鏡にして女

大阪市 川原章久

肩馬の子が手綱持つ祭稚児

気休めを言われて病の重さ知る

姫路市 福本好花

ピアガーデンあら奥様があちこちに

鳥取市 西村黙光

病窓を真つ暗にした聴診器

ニュースからバブル経済知る民衆

熊本県 増田一乗

諦めてじっと見ている流れ星

千羽鶴日ごと夜ごとに色が褪せ

大阪市 山北三三三

恋をする猫が家出をしたきりで

頂上に立てば小便散らす癖

大正の夫婦で朝日に手を合わす

和歌山市 山田博章

間違っていないと言ひ張るのも威厳

勝ち負けにこだわっていた頃の愚痴

まるい月置いてきばりにされそうで

熊本市 北川一進

それからは無口になったのが不安

日曜がちぐはぐになる共稼ぎ

手話覚えボランティアから今日も生き

寝屋川市 豊福路子

以心伝心 詩集がとどく恩師より

ゆっくりと歩けば延びる余命表

人ごとと思っておれぬ無縁墓

下積みの長い上司のいぶし銀
鯖寿司の郷愁青い海を恋う
自分史に妻との出逢い大書する

泉佐野市 真崎浪速子

針の山越えて閻魔に会釈する

空梅雨に雨乞いしてる河童たち

口上を並べ寅さん旅の空

和歌山市 木村親路

娘三人みなそれなりのドラマもつ

一と言が胸に重たい今朝の箸

悲しい時も笑うゆとりで世にまけず

兵庫県 奥野テル

夫婦共病んで深まるめもと愛

日に三度僅かになった歯を磨く

人間味が消えて悪魔が誘い来る

池田市 水 木 博 男
好きな人出来てはじめて紅を買い

花の鉢跨いで路地のお早うさん
大吉だけ残しておみくじみな破り

広島市 中 村 要

日向ぼこ殺すつもりのない欠伸

シャンパンはライバルの方に向けて抜く

末席の方で笛吹く奴がいる

岡山県 福 原 辰 江

瞑想にふけて雨のしずく追う

娘を離す覚悟へためらいつきまとい

弾丸の下くぐった父の平和論

鳥取市 中 居 武 士

くもる日と照る日はげしい株世界

酔うまでは良い人ですとひやかされ

お見合いがえくぼ一つで吉となり

出雲市 富 田 蘭 水

定年やプラン過剰の軽い肩

心までにぎやかになる町がある

二人して漕ぐボートにはかなわない

東大阪市 安 永 曉 子

夕立にいたずらされた物干場

ポケットベル電車の中は気がひける

今日もまた好きな一品冷ややっこ

河内長野市 大 西 文 次
素うどんが旨いと話よく解る

犬小屋の掃除ついでに頼まれる

甲斐性はないが火遊びだけはする

静岡市 永 倉 柳 華

陽を吸った布団で眠る子の寢息

昼下り猫と昼寝の小さい幸

ささやかな抵抗 塾をさぼってる

寝屋川市 坂 上 高 栄

石蹴って切ない女の昼下り

落書きの夢は広げよ雑記帳

地獄だなあ燃える小石が降って来る

岡山県 牧 野 秀 香

夢の中 八十年振りの友に会い

寝たきりに笑い話を見舞いにす

詩吟あり柳友ありて老い楽し

相生市 中 塚 礎 石

蟻の列例外がいて旗を振る

夕立へ住所不定の猫が訪い

出世するはずの過労が死を招き

岡山県 土 居 ひでの

ユニホーム明日を誓う玉の汗

結び目を少し緩めて夜尿症

ミサイルを減らす話で揉めている

寝屋川市 北岡 波留吉
まさかの準備針の穴から漏れている
なりゆきで器でないが社長の座
何かに在る妻が素直に返事した

岡山県 江口 有一朗

夫々に私のためにある世界
追うほどに段々遠くなる理想
感心をしているだけで芸がない

青森県 福士 トキ

掃除機に吸われた蜘蛛の末案し
山形で名物のサクランボ値切ってる
観光バスを横目で見てる賄い婦

豊中市 井上 直次

貧乏な昔はもつと夢があり
にぎやかな男 吊橋渡れない
ジョギングが集まる雨の喫茶店

八尾市 向井 しづ子

同類を呼んでせっかちのお嫁さん
機動力出たら屑屋はもういない
サイダーで割った梅酒に酔った老い

大阪市 清水 絹子

墓参り迎えてくれた梅雨晴れ間(尾道)
鍋こげたぐらいですんだ三隣亡
喜びの家の鏡台あくまなし

静岡市 宇佐美 寿美
ふるさとの夢は螢が灯を点す
螢籠幼い頃の亡母が在る
昇給を祝う夕飼の座が円い

羽曳野市 芦田 絢子

自動ドア開かぬ呪文を考える
自問自答して今日の絵を書き終える
気楽さが取り柄同居を遠慮する

静岡市 青柳 金吾

お金持ち家のペットで無愛想
冷暖房ひ弱な人に育ててる
健康な証 洗濯竿に見る

今治市 渡邊 伊津志

故郷を母はどっかと背負い来る
名曲を聞かせてくれる海の音
外海の荒さを煮込む鮫鱈鍋

岡山県 平田 たけよ

石橋をたたきつづけた父の杖
うちわ風おくれば孫はもう寝息
絵日記の婆ちゃんしわが書いてない

岡山県 福原 悦子

まだ一寸脈がありそう妥協する
負けた日の愚痴を書いている古日記
力一杯余生は農に生きている

岡山県 伏見 すみれ

羽織脱いでから仲人飲み直し

母の日のせめて笑顔を忘れまい

噛みしめて味わいの出る母の味

尼崎市 那賀島 雅子

甘いドラマ夢みて婚期おくれてる

子の結婚万感胸に母の風

道行きの雨に蛇の目が似合うこと

佐賀市 古川 一徳

忠烈祠立哨交代ひと目惚れ

好カード名古屋を沸かす貴花田

残高0でちつとも値打ちのないカード

香川県 田中 スミエ

じいちゃんが元氣採りたて食べられる

受け取ってずっしり重い川柳塔

明日心配あさって心配百合ひらく

新潟県 高野 不二

乗物で行って帰ってくたげれる

見舞より患者の方が氣をつかい

一円がない日とたまる日があつて

姫路市 谷 清柳

組板で弱音は吐かぬ出世魚

心配が心配をよぶ苦勞性

浪花節男ひとりの露天風呂

唐津市 浜本 治幸

当選をすれば議員の顔になり

捨てきれぬ父のカバンが一つある

現代の科学手が出ぬ火砕流

唐津市 入江 喜久亭

換氣扇隣は今日もすき焼きか

転職をさせた憎つきロボットよ

美しく訣れ心の燃ゆる日々

池田市 木村 一笛

時々は臍繰りで飲む赤提灯

横綱に土を舐めさす名勝負

村祭り天狗におかめ踊りだす

東京都 山口 新子

銀座にて壁とBランチ食うもよし

またひとつ心配増えて座りダコ

脚本を書いてあなたへ迷ってる

八尾市 秦 正子

知らぬ間に庭に住みつく桜草

口車に乗ったうわさに流される

添加物入れて長生きするオモチ

鳥取市 近藤 秋星

向日葵も美人の方を向きたがり

盆栽の世話が帰れば待っている

いつ離婚してもおかしくない二人

米子市 木村はるえ

思惑は色々とあり見舞客

私が私で無い顔をして

ポーナスが家の空気を軽くする

大阪市 尾崎黄紅

添書きの老母のひらがな泣けてくる

愛犬の食事のあとで食事する

錨おろして年金と老妻と

唐津市 福島紀一

兄さんと呼ばれ宅配便届く

塾通い孫も時間が無いと言う

ミニトマト軍勢のごとよく伸びる

和歌山市 榎原公子

新妻はありやなしやの風に揺れ

恋人ができてギョウザがいやという

老けたなと思う夫の目が笑う

今治市 和田宏

ジョーカーを握ってギョロリ目が動く

もう一人の自分と作家対話する

札幌で責任を取る親である

奈良市 米田芳子

ゴミの日のカラス カアカア姦しい

子を思い孫を思つて兜彫る

青信号真紅な傘が駆けぬける

鳥取市 田賀八千代

涙のおくで女の香り生まれます

愛を知り嘘が上手になりました

砂丘の中に壊れた夢をうめていく

岡山県 後安江山

親切も重荷はいやです疲れます

生活のリズム乱れず心豊かに

虎の威はもうない母の丸い背

藤井寺市 田中孝子

友の訃を抱いて鳴き砂の丘に佇つ

亡夫の肌着一つひとつを手洗います

山ウドの香とニコニコ顔の嫁が来る

島根県 菅田かつ子

茄子胡瓜南瓜それぞれ意見吐き

それぞれに苦労持ちこむ子が三人

紫陽花のはちきれそうな花をつけ

池田市 林すて

名も知らぬ鳥の鳴き声山歩き

建売の家のぞいてる夫婦づれ

好きなことどこでも行ける有難さ

岡山県 杉本伊久栄

天気予報聞いて明日の服選び

仕舞風呂タイルの汚れ気にかかり

父よりも祖父に似て来た孫の好み

羽曳野市 徳山 みつこ

老杉を見上げる老父の背が丸い

村役場石垣残し消えていた

兵庫県 玉田 三重

うたた寝と思えぬ程のいびきかく

妻はもうあくびに蓋をしなくなり

岡山県 大石 あすなろ

ためろうたばかりにチャンス取り逃す

双六のあがりはきつと天国だ

鳥取県 浜田 民子

窓際の椅子にクーラー冷たすぎ

夕焼が砂丘に影を長く引く

兵庫県 倉垣 恵美

思案したあげくのはてへアキマヘン

念仏を聞いている庭の花しようぶ

出雲市 島重 昭

この辺で別れなさいと橋がある

浮雲に走る僕らも未来形

鳥取県 中西 智恵子

怪しげな雲に雷のつてくる

仲の良い夫婦に刻む知恵袋

枚方市 濱田 良知

言い訳を考える間に家に着き

マネキンが着ていたほどに見映えせず

松江市 佐野木 みえ

夏祭りラムネの泡にある郷愁

未来図が子供と私かみ合わず

吹田市 西岡 豊

共通の話題を探る見合席

宇治金のうまさ冷たさ夏の味

鳥取県 美浦 美代子

望郷の海は亡母なる顔で待つ

怒っても父の背いつもゆるす気だ

東大阪市 大平 太郎

まあまあで子は案外に人気者

年寄に我関せずの人も人

静岡市 三浦 つね

旅馴れたガイドで話おもしろい

乱筆を何時も知ってる筆の先

鳥根県 武島 ちよえ

聴診器冷たく胸を撫でまわし

ゴキブリも見つけた方も大慌て

島根県 松本 聖子

六十路ですやる気に健康支えられ

人形とひねもす老人ホームの女

今治市 越智 青園

前向きに生きるダンスを習い始め

他人は他人私は私箸運ぶ

花の虫つまめばきつと夜叉の顔
旧暦が一番似合う花暦
米子市 中井 ゆき

口喧嘩しているような十姉妹
口喧嘩した後思い切りおしやれ
鳥取県 橋谷 静江

盆踊り恋し懐かしはやり唄
二期期だアイデア一ぱい僕の作
和歌山県 上岡 正直

頭数揃わぬままの派兵論
母の目と子の目がからむ参観日
神戸市 岩田 信義

シャツ一枚ぬげば生身の男です
ハンガーにかけて虫干ししたい人
松江市 松浦 登志子

気が弱い分だけ酒が強くなる
故郷の市役所都会的に建つ
茨木市 藤井 正雄

母と娘が塩の加減をくらべあう
夕立に洗車の続きしてもらう
鳥取県 鈴木 公弘

説き伏せて帰した後を蝶が追う
夢多彩ミニのスカート走り出す
寝屋川市 太田 俊子

雨が好き本読む時間増えるから
梅肉にほのかな想い手毬唄
大阪市 小糸 昭子

嫁ぐ娘に料理百科をもたす母
大掃除恩賜のたばこ見つかった
富田林市 山原 昭水

寺の鐘 余韻を残し日が暮れる
同居した姑は孫の味方する
鳥取県 中藤 俊子

丸腰の平和路線は無理ばかり
ためらわず無職と書ける齢となり
奈良市 井上 大

胸叩く自信と頭掻く弱気
モノリザの画像見つめて夢に入る
大阪市 武田 昌三

酔えばでる老父の軍歌が笑えない
オトンボへ大黒柱背負わせる
鳥取県 石谷 美恵子

暑くるし髪も植木も切って夏
またもとの二人になった市場籠
藤井寺市 楠 昭子

停年にお中元ですと銀行から
不器用な子供に育つ電池式
大阪市 家村 高雄

米子市 池尾保子

さあ仏様今年の新茶ですおのみなさい

おじいちゃんが金買取ったさつき展

東大阪市 松山隆

言葉の綾胸に溜めずに会いにゆく

ナムアミダ儀式ですから唱えます

羽曳野市 山本たけし

時効でも背信の日々なお重く

半分は落して過ぎた僕の運

富田林市 浦田トシエ

金魚みな死んでしまった空しき日

孫が来て似顔絵書いて置いて行く

唐津市 山口ふさ子

警察の前でペダルが浮いてくる

医者椅子 患者のそれより立派すぎ

泉南市 坂根流水

楠妣庵 紫陽花咲かせつつましく

鎮守より地蔵が好きで子等集い

八戸市 島田昭治

検診で何言われるか怖いとき

玄関を出ればすかさず灯を消され

和歌山県 三原三究

ペテランのうまさに勝った新鮮さ

消費税込みと言われて得した気

岡山県 富坂志重

人並になれずあほうと叱られる

添い寝する母がねた間に子が這い出

大阪市 乾哲静

手料理で間に合っている夫の口

一つ年上が何より母のお気に入り

鳥取市 谷口百合子

困るほど愛されている花の中

別れると言えぬ私の影法師

池田市 岡本吉太郎

さりげなく避けた相手にまた出会う

ふと会った相手が人生狂わせる

大阪市 森崎忠禄

駅五分聞いて極楽見て地獄

飼犬の謀反ロボット人を噛む

唐津市 野田旭恒

スパイスを効かした祇園夏祭り

畳の縁高くもないに躓いて

宇部市 中村三良

憤りのパフは鼻だけたたかない

連鎖反応貧乏ゆすりの次欠伸

鳥取県 山本正光

待ちばうけ吸いながら捨てる場所もない

お馴染の顔と浴衣の盆踊り

鳥取県 小西 五十鈴

寝てるのも楽ではないと風邪三日

一等の旗をめざして運動会

和歌山県 吉田 武治

まだ生きる望み嬉しい趣味の会

検査結果 一番先に妻の顔

豊中市 みき わきみ

桐火鉢妻持つて来たまんま

友よ未だ毎晩二合飲んでるよ

静岡市 中西 雅

壺みれば亡母が活けてた百合思う

迎え火で席ゆずり合う小仏壇

唐津市 野崎 ハル

ゴーツと凄雨風荒れる午後

一日が潮引く如く過去と消え

鳥取県 山内 芳江

冗談の通じぬ酒が怒り出す

贅沢に慣れてストツプかららない

島根県 今川 三津江

カタツムリ親子で雨の旅に出る

つかの間の太陽物干賑やかに

米子市 服部 朗子

念願の和讃のテープやっと掌に

霧に霞んで絵のような夏の朝

姫路市 山崎 治夢

梅雨晴間雑草取りも追いつかず

掃海艇一個を処理し胸を撫で

鳥取県 今本 早苗

夕立ちが来そう母さん窓閉めて

赤とんぼ夕焼け雲が踊りだす

藤井寺市 菊地 繁男

指一本大事にしとこスイッチポン

屑籠で没が互いに慰める

静岡市 大石 たき

酒の席煽てに乗って上機嫌

気晴しにお酒を飲んで歌いましよう

島根県 福岡 博利

お付合い年金生活加減せず

スリッパが日がな玄関で待ちぼうけ

大阪市 平井 露芳

万年不良眼鏡の奥に笑みのこし(故ディック・ミネ)

タイガース身売り話も出る不振

岡山県 三村 美恵子

ストレスが体内通る電話口

味気ない宅配声が欲しくなる

豊中市 田中 道胤

バイエルが物憂げに鳴る昼下り

夏が逝く潮騒夜毎近くなる

泉佐野市 大工 静子

八十歳奇麗にしようと髪洗う

初月給家族に一品ずつ買ってくれ

島根県 岩田 三和

里がえりの岡に見えるは花子さん

裏口は立派なものだ金の門

橿原市 西本 保夫

一枚の皿へまたまたパンを食べ

他人の眼は正直ボクを老人に

鳥取県 谷口 侑里

古い家安い税金だけがよい

子守唄母さん先に寝てしまふ

島根県 児玉 幸子

垣根越しみかんの花のおう朝

朝早くとんぴは丸い輪をかいて

大阪市 喜多 佐津乃

オホーツク海荒れる海など知らぬ顔(北海道旅行)

来て見ればただ広いだけの北海道

明石市 小川 酔月

戸をあける音で母さん孫がきた

見てくれと言わんばかりのミニスカート

姫路市 福島 姫女

一人娘が嫁して老後の不安知る

終電車乗りおくれたが始まりで

羽曳野市 福田 悦子

利き酒のように名水飲み比べ

ポックリ寺極楽浄土の夢ばかり

十和田市 小笠原 敏夫

時間がない何時でもこれで逃げている

時間がなく車で食う飯味気ない

唐津市 山門 幸夫

善光寺オリンピックを信者にし

お戒壇閣を手探り眼はかつと

姫路市 服部 一典

来客へちよつとお茶でも喫茶店

連休へ金を払って疲れきり

創立三十五周年
「竹の子」発刊
山内 静水追悼
川柳大会

とき 9月8日(日) 午前9時開場 同11時半締切

ところ 大広苑(竹原市竹原町新開)

兼題 「新」「旧」「真」「情」「美」

主催 竹原川柳会

平成三年度

路郎賞

川柳塔賞

候補作品中間発表

自平成3年5月号
至平成3年8月号

路郎賞候補作品

野村 太茂津

辛抱の形に足袋が干してある
人誘る苦い後味いつまでも
縫る気になったか声をひそませる

奥田みつ子
垂井千寿子

自問自答つまり私を殺さねば
愛しいと思う消しゴムちびている

吉岡きみえ
福本 英子

終点が見えて仮面が重くなる
雑巾をきれいに濯ぐ恩返し

川島颯云児
西山 幸

気やすめがすんなり言えてうろたえる
あなたには見えない風にゆれている

藤井二三
林 荒介

死にどきも忘れてしまう物忘れ
知らぬ顔できる男が恨めしい

越村 枯梢
矢野 佳雲

切られ役ばかりの父は庇えない

西口 忠雄

薬一本もしもの時へ取っておく
ほころびがそのまま人はみな孤独

寺田 裕美
高杉 千歩

脱ぎ捨てた足袋に口止めしておこう
脱ぎ捨てた足袋に口止めしておこう

山本 玉恵
西山 幸

雑巾をきれいに濯ぐ恩返し
オイと呼びハイと答えて五十年

上田 翠光
新 正子

グチを言う時は数えの年で言う
大学にオタマジャクシのまんまの子

真喜内 實
河内 月子

両親の喜ぶウソをたんとつく
天皇の帽子へ入ってみたい鳩

寺田 裕美
安本 晃授

目たたない要にいつも母の席
ポケットがあるから耐えている拳

石川侃流洞
青枝 鉄治

鬼の意地手の鳴る方へ背を向ける
生きてゆく私も蠅も命がけ

小林 妻子

家風などなくて仲よい嫁姑
タンポポの踏まれた型で花が咲き

西出 楓楽
宮崎シマ子

句読点つけて妻母女する
黙々と企業支える馬の脚

田中紀美代
米田 恭昌

寺町に住んで仏をまだ知らぬ
夫よりおいしく食べる友が来る

林 荒介
田中紀美代

スランブに負けては凝った甲斐がない
逢ってから微熱がつづくティースプーン

楊井 二南
門谷たす子

草引いて隣の草を覗き込む
浮灯台もかもめ春の波にのる

片上 明水
西口いわゑ

半熟のまま家裁の門を出る
うら表ない金太郎飴の笑顔

田中 透太
永田 俊子

ひょうたんの駒を出そうとあせってる
吉岡きみえ

病室の時計よっぱどのろまだな
噂ほど始末の悪いものはない
髪を切るもつ忘れたい事ばかり
補聴器をはずして素顔とりもどし

玉置 重人
舟渡 杏花
奥山美智子

阿 萬 萬 的

花切つてあげた匂いが手に残り 矢野 佳雪
死にたいと楽しいことのように言っ

松本 文子
北 勝美
三宅 保州
神夏磯典子
恒松 町紅
門谷たつ子
松下たつみ
本間満津子
寺沢みど里

温室の中の評論家が吠える
影の私を突き放せない岐れ路
点線をなぞり自画像書き直す
小間切れにすれば気の済む書き損じ

桜井 千秀
岸野あやめ
堀江 正朗
堀端 三男
吐田 公一
雨風も知らずに育った胡蝶蘭

橘 高 薫 風

四二・一九五キロ走って一秒差 小砂 白汀

紫の多彩を知って女老い
辛抱の形に足袋が干してある
逃避行梢の先はすでに春
逆縁を思う紋白蝶がとぶ
日木の摩擦が亀の甲羅まで
パンザイの背中ではみんな隙だらけ

板東 倫子
野村 京子
石川侃流洞
片上 明水
大阪と京都の旅は別な服
捨てたとは言えず一緒にさがす顔

高橋千乃子
若宮 武雄
高杉 千歩
野呂 右近
橋元 美恵
八木 千代
上田登志実
損をするばかりでもなし物忘れ
面白い人と聞いたが泣き上戸
勿体なや三百六十五連休
喧嘩して楽しかったよ嫁ぐ娘よ
恋文はポストの外に落すべし
ネクタイの一本ごとに過去絡む

川柳塔社常任理事会 (8月1日)

▽1年間の異動を収録した「同人名簿」補正
版を10月1日付で発行することを決定
▽平成3年度の同人総会を10月6日(日)、
大阪府中小企業文化会館で開く。

夜市川柳 募集

第4回「友」 高杉 鬼遊 9月末
投句先 〒593 堺市堀上緑町2-9-12
河内天笑方 堺川柳会

川柳塔賞候補作品

宮 口 笛 生

福の神そんな女がいてくれる 大角 正道
雑魚なりの頭で泳ぐこと覚え 玉置 当代
僕よりは少し大きくなれメダカ 藤井 高子
反省をしているうちに眠くなる 沢田 さん
嫁った娘が時々大根抜きにくる 伊藤 寿美
病室の寝息もチェックする天使 白石 春嶺
花火ドカンと何時かは掲げてみるつもり 高田美代子

大根の白さに嘘がつけなくて 池 森子
ライバルのお辞儀がとても美しい 木下 道子

涙を流すたびに人間らしくなる 大角 幸代
失礼ですが人が転ぶと面白い 亀井 円女
トレードに出したい妻の口答え 小山 悠泉
辛抱を固めたような太い指 那賀島雅子
すすいと事が運んでいる内助 児玉 歌子
子供らの姿に家の顔がある 植田チカエ

玉 置 重 人

燃えつきた後の白い白いページ 池 森子
人間らしく生きるやっぱり金がある 渡辺 南奉

それぞれが生きる仲間で助け合い 的場十四郎
古箏笛亡母のコントがまだ続く 福原 悦子

母という受け皿のあるありがたさ

大石あすなろ

ライバルのお辞儀がとても美しい

木下 道子

反省をしているうちに眠くなる
やつかないのちをくれた父と母

沢田 きん

能面になれぬ鼓動を抱いている

高田美代子

本心が見える眼鏡をさがさねば

流 奈美子

それぞれに流されてきた川の幅

小山 悠泉

余生とはこんなものかな茶がぬるい

森 茜

トーストが焦げる幸せな時間

谷 清柳

輪の外にいる友だから温かい

大角 正道

人許すことも覚えて海が風ぐ

藤井 高子

鬼一匹飼っているから耐えられる

大角 幸代

小出 智子

宮尾みのり

遮断機の向うへ風船とんでゆく

山海 友照

だれも皆ふりむく銭の落ちた音

那賀島雅子

桃割れの写真を出して見せる妻

水木 博男

子の上る樹を揺すつてる子煩悩

朝倉 大柏

嫁った娘が時々大根抜きに来る

伊藤 寿美

余生とはこんなものかな茶がぬるい

谷 清柳

長話せつせと洗濯機は動き

中塚 礎石

浅子まつゑ

煽て甲斐ある爺ちゃんになりきろう

中山おさむ

女にも五人くらの敵はいる

本莊 福子

にぎりめし一つの恩が返せない

大橋 政良

新妻の作る弁当皆のぞく

美浦美代子

赤い靴明るい嫁になりそう

原 章峰

花いらんかえ京は長生き出来そう

吉村 一風

高杉 鬼遊

雑炊の頃はなかつたダイエツト

井上 大

伝言板に別れた人の名を見つけ

高畠 五月

粗大ゴミなどとは失礼 家具同士

榎原 公子

バレンタイン隣の奥さんからもらい

森川 抜智

雨の日は仏のお茶も少な目に

浦田トシエ

警察の前で渋滞ひどくなり

木下 道子

山びこも愛想段々悪くなり

西村 黙光

アダムとイブが洋服を着て中之島

高田美代子

お互いに相手を捨ててきた二人

尾崎 黄紅

百までも生きると医者ににおどかさ

大西 文次

豊作のコメよ生真面目すぎないか

寺中三枝子

老いの首やつと半値で買い取られ

中塚 礎石

一円が足りず千円札を出す

北川 一進

あんな奴こんな奴でも皆わが子
鮎子しを食べて近江の息を吐く

坂根 流水

森崎 忠祿

うつぶなが消えてしまった洗ひ髪

森 茜

森を出ることが怖くてかたつむり

遠山 夏生

未来などどうあろうとも柿の種

大西 文次

さよならをしたのに帽子そばにある

大角 幸代

鮮やかに友ひとり切る紙ナイフ

中尾まゆみ

花の名を聞かずに男花を買う

水木 博男

人許すことも覚えて海が風ぐ

藤井 高子

遮断機の無い道をゆくカタツムリ

大川 幸子

うずくまる鬼がたくらむかごめの輪

宮尾みのり

ため息をやはり他人は聞きもらす

岸 桂子

頼りない人だと思ふ破れ傘

高田美代子

見せしめに使う女の黙秘権

児玉 歌子

梅雨の晴れ間に女と妻の裏を干す

池 森子

かくれんぼ誰もわたしを捜さない

山口三千子

美しい嘘なら許すことにする

沢田 きん

板尾 岳人

水煙抄

秀句鑑賞

—八月号から—

松原寿子

ときめきを押さえ王手の歩を握る

白石春嶺

句に華やかさはないが、次の一手を指すまでのときめきを押さえ、煙草に火を付けたがら対局者の腕組みを見ている姿が、ほほえましく描かれている。人間を詠むとき周囲にくらでも素材はあるが、この句のように自身を人間観察した所が面白い。

人許すことも覚えて海が風ぐ

藤井高子

人間の本質と自然の真実に触れようとするこの句の新鮮さは、無慈悲な海に感情を沈めた女ごころにある。何んとなくとしか言いようのない苦しさのそこから、目覚めようとするあたりに共感がある。

入院の友へジョークのありったけ

流

奈美子

奈美子さんの愛情が感じられ、絵になった川柳。しかし、胸中には、アツケラカンと遊び

を詠んでいる余裕がありそう。病室の白い壁からジョークが跳ね返り、「ドキッ」とさせておいて、実は優しく微笑を与えることも、心あたたまる友情の贈りものなのである。

梅雨の晴れ間に女と妻の裏を干す

池森子

平成元年度の川柳塔賞受賞以来、川柳にチャレンジしている作品に感銘を受けている。いつも角度を変えての作句のセンスの素晴らしさが注目される。強い個性の森子さん独自の句風でもある。女と妻の微妙な心の違いを「裏を干す」などと、ただの川柳ではない表現力に脱帽

触れ合うて歩いただけの傘たむ

高田美代子

春雨へ女房と濡れるあほらしさ（好郎）という句とは、対照的なこの句が察すると何んとなやかなお二人なのだろう。胸に抱いている想いも口に出せずいる。傘をたたんでからの女心の動きのなかに、快い余韻が残っている。

肩書きはないが自由な朝がある

的場十四郎

人生には、人間本来の部分と劇の部分があると言われている。停年か、それとも年金受給中なのか、淡々と詠み上げている中に、たとえ佻しさが隠されていたとしても、裸の心があり、「自由な朝」に作者の主張が生かされている。

砂時計よ止まれ恋しい人に逢う

鶴久 百万両

時実新子さん曰く、「笑いも涙も残らず包み込む十七音字の宇宙が川柳」とか、上五に砂時計を持ってきたということは、それだけに裏を衝けば、壊れやすい意味も含まれているかも。誰しも幸せと感じる刻は短いものでその僅かなひとときを容赦なく消してゆく砂時計なら、せめて恋しい人に逢っている時ぐらいは、刻を止めたい想いは当然だろう。

今ならばまだ翔べそうな赤い靴

山口三千子

階段を一段一段登りながら、人生を積んで生きている。「まだ翔べそうな」に置いた三千子さんの愉悦が、この句の焦点となつて下句に転換させ、広がりを実現している。女として、翔んでみたい複雑さもあるが、頭を柔らかにし、凝りをほぐす方向へ翔び、人生が描けるなら熱も入ることでしよう。

じゃが芋の花活けてあるビルの隅

高畠五月

この川柳には、新鮮な風景がある。情け心とは、じゃが芋の花言葉である。花屋さんでも殆ど見掛けないこの花が、都市砂漠のビルの連なる片隅に活けてあるのだとすれば、人の気のつかない境地へ発想を伸ばしている。古代から農耕文明に生きて来た復古への郷愁が漂い、人間の持つ心のふるさとをじんわりと突いている。

銀河系

河内天笑選

鳥取県 西浦 小鹿

泥臭い顔で愉快な芸を持つ
遠い日の腕枕には君がいた

宇部市 中村 三良

落日の大きな小言など止める
笑い皺とあきらめ玉子むいている

和歌山市 堀畑 靖子

あなたと逢っているのに襲う無常感
ありがとうで結ぶ私の愛の詩

名古屋市長 藤井 高子

とちり出す祝詞 訥弁とは温し
上澄みをすくうてお世辞だけ届く

和歌山市 後藤 正子

夏草の深い祈りにふれている
弱気吊るしてひまわりの黄に打たれよう

柏市 上鈴木 春枝

反抗期既に男の匂いさせ
ライバルの力試してみる握手

広島市 中村 要

年金と家賃がいつも背くらべ
阿呆やなど言われ続けてまだ呆けぬ

松山市 谷 信夫

人手不足だそう元気になりたいな
紫陽花へ雨の情けが降りそそぐ

砂川市 大橋 政良

思ひ出し笑いボタンが取れている
つり合わぬ花がコップに活けてある

鳥取県 新家 完司

響かない言葉が街にあふれている
次のページがわからないから面白い

弘前市 波多野 五楽庵

もう寝よう痴話がもつれてゆくばかり
うなされた妻を黙って見ているだけ

喜屋川市 江口 度

隣まで毛虫降らせた桜伐る
目立たずにひんころひんころ生きてます

桜井市 岩本 雀踊子

蟬の殻短い命の産衣だろ
善人を通す男の馬鹿はなし

米子市 新 正子

指貫が似合う私の生きてく手
砂山にナイフを埋めたのは誰だ

倉吉市 渡辺 善句

おしやれしてチンジャラに行く山の神
花あやめ僕はあなたのファンです

大阪市 稲本 凡子

壁越えるバネはいつでも掌の中に
夢ばかり抱いてわたしの影がない

羽曳野市 徳山 みつ子

カプセルに上司は愚痴を詰めて埋め
まだ雨に唄って弾みたい五十路

鳥取市 小谷 美つ千

乳の香を消す香水を忍ばせる
峠からエンストをして遅刻する

米子市 林 荒介

貸し借りが少しずつありながらえる

間違ひも渦は一緒に呑み込んだ
クレヨンが元気で回転木馬の渦

和歌山市 古久保 和子

ノーマーク麦わら帽子買いました
コードレス落ち着く場所のない電話

米子市 沢田 千春

駅止めで孫やってくる夏休み
都合よく嘘がころげる世の中で

米子市 八木 千代

朝のポストに森の匂いのする手紙
枕から生まれた蝶は死なせない

岡山県 矢内 寿恵子

生き抜いた余白は悔いのない彩で
起死回生千羽のツルにある情け

戦列を離れて見ればうなずける
倉吉市 最上 和枝

退院のあと怖そうに刺身食う
守口市 森川 まさお

休耕田僕も浪人しています
兵庫県 遠山 可住

愛想笑いも出来るじゃないのJR
箕面市 岩津 ようじ

年金でもう風向きは気にしない
豊中市 田中正坊

夢捨てぬ限りチャンスは巡りくる
大阪市 藤田 頂留子

四つ角へ来てから齢を考える
西宮市 林 はつ絵

面白くなるぞおみくじ凶と出た
米子市 政岡 日枝子

拝むなら美人がよろし仏さま
京都市 松川 杜的

ばあちゃんの駆込部屋に陽が当る
寝屋川市 太田 俊子

夕立が西瓜を叩き割っている
鳥取県 土橋 はるお

人妻の掟で船は座礁する
西宮市 門谷 たず子

灯を消して話すと本音すぐ洩らす
尼崎市 春城 武庫坊

子育てが終れば時が加速する
和歌山市 山口 三千子

花手桶 亡父母の昔を知る人と
西宮市 西口 いわゑ

友達のそのともだちというご縁
八尾市 高杉 千歩

へたくそな字で丁重に書いて出し
青森市 工藤 甲吉

美しい思い出という未練抱く
和泉市 中川 楓

どの道を行っても鬼が待っている
和歌山市 堀端 三男

花のステージ余生は美しく飾る
米子市 林 瑞枝

夕焼け小やけ川の流れる音がする
鳥取県 土橋 螢

人の死の刻の重さよ儚さよ
岸和田市 古野 ひで

真夏陽へ汗にまみれる心地よさ
岸和田市 三輪 通彦

電柱が犬の躰を考える
松江市 竹内 寿美子

身辺を整理するとはうまい嘘
倉吉市 淡路 ゆり子

妻の笑顔にことさら朝が美しい
海南市 三宅 保州

私というライバルを持て余す
香川県 川崎 ひかり

決心をしたのに迷うわかれ道
香川県 川崎 ひかり

気に入らぬ彩も塗らねばならない日
藤井寺市 高田 美代子

長身を三つに折って軽に乗る
鳥取市 武田 帆雀

不況風吹いて小さな仲違い
吹田市 山本 希久子

雨やんで人が湧き出る戎橋
大阪市 塩田 新一郎

申告が漏れたもれたでごまかされ
橋本市 岸本 木魚

スリの手の動きわたしは一度見た
米子市 田中 亜弥

ためらいを見せた時から負けている
岡山県 福原 辰江

肉親を失くした街が抜けられぬ
大阪市 榑本 路児

天と地をひっくり返し嫁同居
兵庫県 倉垣 恵美

横道があるき息抜きしています
和歌山市 田中 輝子

自治会長夫人に用の多いこと
寝屋川市 岸野 あやめ

戦車征く軌道修正きかぬ道
大阪市 板東 倫子

人並みに嫉妬もされているらしい
羽曳野市 吉川 寿美

輪の中に調子はずれが居て愉快
和歌山市 玉置 当代

羽曳野市 福田悦子

舵取りは母にまかせた父の船

七尾市 松高秀峰

雨の日は雨の仕事が待っている

今治市 月原宵明

反省と言う名で酒が飲める会

岐阜市 渡辺杏村

ガン告知日本の風になじまない

鳥取市 春木圭一郎

戻れない橋だが二人なら渡る

川西市 松本ただし

札東が出しやばりすぎて困ります

鳥取市 大坪天涯

つまようじ俺はひとりで飲んでいる

倉敷市 小野克枝

軽い音させて女に朝が来る

枚方市 山崎彩子

日本のバラ描き百の罪封じ

寝屋川市 堀江光子

風ときて殺し文句を置いてゆき

広島県 岸田武

神様へ談判したい事がある

鳥取県 鈴木公弘

幸せそうな顔をして泣いている

鳥取県 江原とみお

合い鍵が三つもつれておりました

今治市 渡邊伊津志

頭上からドミノ倒しの波が来る

八尾市 古川覚然坊

貴婦人の育ちがわかる笑いよう

香川県 木村明人

雲仙へスケッチに行く人も居り

唐津市 仁部四郎

哀悼の言葉カタカナ語はきらい

奈良市 井上大

かきわけてボスにはなってみなければ

岡山県 千原理瑛

あいまいな相槌打たぬことにする

豊中市 安藤寿美子

ビヤホール長居無用の固い椅子

羽曳野市 芦田絢子

サッシ出窓ドライフラーぬいぐるみ

米子市 金山夕子

叩かれて出すぎていたと気付く釘

鳥取市 西村黙光

飯の世と思えど神のえこひいき

大坂市 神夏磯典子

持ち方を変えたバットがよく当たる

尼崎市 明壁敏之

感情にまけて胸中さらけ出す

鳥取県 石谷美恵子

更年期なんぞと寡婦は言うけれど

和歌山市 山川克子

メルヘンの世界があらためて故郷

有田市 松井かなめ

鳩に食べられた大豆を三度蒔く

枚方市 森本節子

からかいの風を真にうけ鳴る風鈴

静岡市 柳沢たま

受診待つ妊婦の息の荒々し

和歌山市 桜井千秀

自動ドア一歩下がればスーと開き

兵庫県 北川とみ子

自分だけ耐えたつもりで妻である

和歌山市 福本英子

届けたら嫌な顔した落とし物

米子市 中井ゆき

旧式のあたまのネジを巻き直す

鳥取県 西原艶子

塩加減効いて男が寄りつかぬ

米子市 茂理高代

幸せをつかむジャンプをくり返す

出雲市 島重昭

童心の中に仏が住んでいる

倉敷市 井上富子

初心の凶心の壁に架けておく

唐津市 山口ふさ子

私にもあった若い日のさくらいろ

鳥取県 谷口次男

人生を考えさせる二日酔

堺市 高橋千万子

つぶやきは聞こえぬふりの多数決

鳥取県 西川和子

まあまあのセンスで唄をうたつて

寝屋川市 稲葉冬葉

祝電が来て決心がつきました

大阪市 町田達子

野性味を盛った磊落さを買われ

鳥取市 岩原喬水

お点前になると水虫騒ぎ出す

大阪府 深日 白光子

離れ住む愛には疵がつきやすい

大阪市 大福留吉

涙ふく仕草の裏に鬼が居た

米子市 小塩智加恵

人前でなんと演技のうまい妻

鳥取市 谷口百合子

落ち込んだわたし叱ってくれる友

大阪市 井上白峰

湯上がりの女斜めに身構える

貝塚市 行天千代

外出はお医者へ行くにきまつてる

東大阪市 松山隆

大風呂敷ひろげ人間値ぶみされ

岸和田市 芳地狸村

七キロもいっぺんに減る腸手術

十和田市 阿部進

ひたすらに君を愛して古希迎え

和泉市 西岡洛醉

ストレスをモカの香りで消すつもり

高槻市 川島諷云児

盗まれた方が不注意詫びている

吹田市 栗谷春子

仏さまつめたいビールかけました

姫路市 服部一典

粗大ゴミです濡れ落ち葉です耐えています

熊本市 遠山夏生

凶器にも麻薬にもなる札の束

岡山県 松本元江

どうしたら自然に戻るこの地球

倉吉市 奥谷弘朗

真心がないと大衆味方せぬ

大阪府 榎山隆

タイガースファンでないが腹が立つ

箕面市 椎江清芳

冥土への供は御免と影法師

伊丹市 榎谷寿馬

この夏は暑さと遊ぶことにする

唐津市 浜本義美

ひら仮名の色紙に女匂わせる

島根県 加本義良

強がりの肩が淋しい影法師

米子市 小西雄々

腹を切ることは馴れた男秘書

宝塚市 丸山よし津

昼も夜も眠らぬ街で病んでいる

熊本県 増田一乗

元氣かな傘寿氣遣う子の電話

寝屋川市 平松かすみ

棒グラフ上司の鞭に踊らされ

和歌山市 山田高夫

不用意な言葉にぼろり出た本音

鳥取県 さえきやえ

孫の恋そつと根回ししてやろう

鳥取県 上田俊路

雑兵はポケットベルで泳がされ

旭川市 朝倉大柏

何をどう買い被ったか借りに来る

倉敷市 田辺灸六

伝言板に愚痴をちよっぴり走り書き

唐津市 浜本ちよ

ハイミスの心の揺れが畏に落ち

岡山県 江口有一朗

七十四やつと一城の主となる

唐津市 田口虹汀

晩酌で済めばスナックなど不要

芦屋市 根来敬

ご免ねの数だけ女皺が増え

岡山県 土居ひでの

連れ舞いの山ふところに抱く句碑

兵庫県 奥野テル

茶柱に弾みをもらう旅カバン

寝屋川市 坂上高栄

武蔵の里訪ねて武蔵好きになり

唐津市 山門幸夫

譲られて手荷物膝に乗せてやり

▼投句は、川柳塔用箋またはハガキに3句
毎月15日までに川柳塔社事務所へ

荀香のむ

小出智子選

白い桔梗女は弱いものならず
 さいわいに百坪ばかりある屋敷
 嫁取りは未だパン屋にはパン溢れ
 五十五歳柱の傷も深くなる
 ふる里のとなは覚えていくれる
 紫蘇の花 貧も親しきもののうち
 おまじないそろそろ効いてきたらしい
 肩の荷を預け安らぐ日を数え
 湖の深さを月もうたがわぬ
 久しく鳴らぬ鈴生き甲斐は何だろう
 母と娘に三日ともたぬ黙秘権
 籠の鳥 ローン半分済みました
 直球を受けた手許がまたしびれ
 研ぎ汁のだんだん澄んで明日は晴れ
 他人さまの傷みはかれぬ銀の匙
 ふる里の詠りがとれてゆく怖さ
 医学書に私の病氣載ってない
 悪口を言うていわれて垣がない
 この先を思えば激し雨の音

西宮市 奥田みつ子
 鳥取県 さえきやえ
 松江市 竹内すみ子
 島根県 松本 文子
 大阪市 渡部さと美
 堺市 桜沢あかり
 松原市 佐藤 奏月
 神戸市 能津 さち
 米子市 寺沢みどり
 和歌山市 西山 幸
 和歌山市 福本 英子
 鳥取市 小谷美つ千
 和歌山市 古久保和子
 東京都 山口 新子
 羽曳野市 吉川 寿美
 和歌山市 内芝登志代
 香川県 川崎ひかり
 尼崎市 春城 年代
 堺市 小西 小雪

自由の中で妻は自縛をうけている
 お茶がらを土に返して安堵する
 来る筈の人にかまわず日が暮れる
 思い出はいつでも出せるとくに置く
 べたべたべたあの足音はおばあさん
 持ち時間 私をさらけ出すつもり
 家計費のシェイプアップ出来ません
 間をおかぬ答信憑性がある
 日めくりに喜怒哀楽を盗まれる
 夫の背を目立たぬように押している
 明白な答えは闇の中におく
 太っ腹に座ってなさるみ仏よ
 あじさいは雨のエレジー知り尽くす
 ちぐはぐな答貰うて踏みこめず
 陽のあたる椅子に移ってから孤独
 母なれやメトロノームは子のテンポ
 それなりの高さに合わす靴を穿く
 仲のいいふたりばかりのカメラ・アイ
 立ちあがるときやさしさが視えてくる
 約束のない別れして風の街
 ひとり旅風も一会の道連れに
 捨ててには惜しいが空の化粧瓶
 底抜けに明るい顔で輪をつくる
 鏡見てにつこりしてるそれでよい
 新しい出会い花咲く予感する

和歌山市 榎原 公子
 米子市 光井 玲子
 大阪市 本間満津子
 大阪市 鈴木 節子
 枚方市 森本 節子
 大阪市 神夏磯典子
 大阪市 西出 楓楽
 守口市 結城 君子
 岡山県 山本 玉恵
 米子市 政岡日枝子
 和歌山市 桜井 千秀
 寝屋川市 宮崎 菜月
 鳥取県 西原 艶子
 名古屋 藤井 高子
 米子市 石垣 花子
 竹原市 信本 博子
 和歌山市 山口三千子
 西宮市 門谷たず子
 和歌山市 後藤 正子
 寝屋川市 堀江 光子
 岡山県 矢内寿恵子
 和歌山市 山川 克子
 香川県 新川マサエ
 八尾市 向井しづ子
 和歌山市 木本 朱夏

緑日の灯に誘われて来たひとりと
 ジューンブライド親の出る幕なままに
 自分自身慰めて出る試着室
 消しゴムの汚れ過ち知っている
 風船を幾つも飛ばす寂しがり
 辛抱は姑になってするつもり
 笑顔には笑顔が写る朝の窓
 骨納め一番むごい儀式かも
 方向音痴が出不精にさせている
 揺り籠に揺られて過去は癒される
 亡き母と同じしぐさになっている
 真っ当に生きた螢の甘い水
 暑さには負けぬ八月生れです
 捨て犬が迎えてくれた無人駅
 疑いもせず間違っていた漢字
 ひまわりの燃える原野を胸に描く
 線引きが甘くなるのは愛かしら
 七夕は子供の夢で暮れてゆく
 二人生み二人育てた背負い帯
 うっとうしい話は抜きに梅雨最中
 看病の母を床擦れにはさせぬ
 庭の花人の笑顔ですくすくと
 旅情豊かお国訛りをまる出しに
 三本の矢も教え兼ね独りっ子
 いい出会い待っているより出かけよう

大阪市 堀 いくの
 大食市 板東 倫子
 西宮市 西口いわゑ
 宝塚市 丸山よし津
 藤井寺市 高田美代子
 和泉市 中川 楓
 倉敷市 小野 克枝
 吹田市 栗谷 春子
 大阪市 稲本 凡子
 米子市 林 瑞枝
 有田市 松井かなめ
 和歌山市 松崎 幸子
 大阪市 松尾柳右子
 鳥取県 石谷美恵子
 和歌山市 森 茜
 和歌山市 福井 桂香
 羽曳野市 芦田 絢子
 青森県 福士 トキ
 岡山県 川端 柳子
 和歌山市 田中 みね
 鳥取県 小西五十鈴
 京都市 山海 友照
 兵庫県 奥野 テル
 唐津市 浜本 ちよ
 堺市 鈴木 可愛

おみくじに賭ける日もあり心の灯
 無造作に髪束ねても娘の若さ
 少々の風には負けぬ花の意地
 噂話好きでないから聞き流す
 欲求不満 赤いTシャツ着ています
 一癖が皆にすかれる山椒の芽
 迷信にしてしまうから錆がつく
 組板のリズム狂わぬ倅せを
 孫七人一人はたしか雨女
 イヤリング内緒話をみんな聞く
 夢で見る子は幼なくて可愛くて
 熱帯夜風鈴脹れっ面になる
 ライラックの風が撫でてく老いの肩

大阪市 町田 達子
 芦屋市 黒田 能子
 岡山県 松本 元江
 岡山県 千原 理瑛
 米子市 新 正子
 岡山県 富坂 志重
 姫路市 福本 好花
 貝塚市 池田寿美子
 寝屋川市 井上すみれ
 鳥取市 前田 一枝
 米子市 茂理 高代
 和歌山市 玉置 当代
 寝屋川市 豊福 路子

ゴシックの一句目、この場合の白い桔梗はその姿を超越し、
 一人の女性と一体となって、俳句の季語よりもより生きた使い
 方がなされている。女性性は弱いものではないとし、だから強く
 生きねばと思う精一杯の思いをたおやかに一句に託す。二句
 目、一読すると単純に見える句ながら、この際幸いなことにと
 物語が展開される。さっぱりと言いつつ切った句の見事さ。三句目、
 パン屋にはパンが溢れて、何の不自由もない現在。だからお嫁
 さんはまだ来ないのだろうか。母親にとっては心掛りなこと
 ではあるが……。四句目、女性にとつて五十歳代は殊更大切に
 生きたいと思うものである。「や」と羽織の紐の丈」と喩う柱
 の傷を引用して、五十五歳をしみじみと振り返られた。

投句先 干 544 大阪市生野区勝山南1-18-10

小 出 智 子



蟬

後藤正子

今朝、蟬の声を聞いた。梅雨明けの頃にきまつて松の木の梢辺りでまだ幼い感じがする蟬の声を聞くと、暑さへの心がまえのようなものを感じたりしていた。

ある時、表を通りかかった植木屋さんが、「この松の枝ぶり悪いねえ。植えかえなよ」と言つたものだから何年か経つてもその事が心に引つかかっていた。葉が赤くなつて枯れたような枝もあつたけど、松は元気だった。その松をある出来事があつて私は伐つた。

「結婚したい人が居る」と告げた娘から、思いもかけなかつた事実を知つた。十六歳も離れたその人との結婚を許せなかつた。幸せを願わぬ親はいない。でもその事を理由に、私の心は乱れてどうすることも出来なかつた。長い時間を費やして話し合つたけれど、娘の決意は変らなかつた。

周りの花木を傷めないよう松は根を残して

地上に切株が、そこに松が在つたことを印している。土を掘っていると白い蟬の幼虫が出現して驚いたこともあつた。気が遠くなる程の時に土中に過ごし、やつと光や風にふれて短い夏を謳歌する。そして土の中でやがて孵る命を産み、一生を終える蟬よ。

私の夏の思い出は、つらい事が多い。でも海や山、入道雲やひまわり、そして蟬の声、みんな私に元気を与えてくれる。今日も暑くなりそう……ちよつぱり気がかりな切株を今はこのままにしておこうと思う。

気にかかること

川端 柳子

最近、私自身のことの気がかりに「忘れる」という事がある。特に人の名前を忘れる。よく知っているはずなのに、パツと出て来ないのである。その時の切なさ、もどかしさはどう大変、一日がかりで、ふつと思ひ出した時の安堵また然り。そこで思ひ出すのだが、近くのスーパーに出店のカメラ屋さんに、とても気持ちのいい娘さんが居た。通りすがりに目が合うと、必ず、「コンニチワ」と元気な声をかけてさわやかな気分にしてくれる。

お得意さんとは言えぬくらいのお客なのにすぐ名前を覚え、頼んであつた焼付けなどを取りに行くと、「ハイ、川端さん」と出してくれる。ところが、その後、娘さんが居なくなつた。男の店員さんのみになつたら、その人は頼む度に、いちいち川端の字まで問う。いい加減覚えてもよさそうなのにと、あまりの違いに呆れて、私の足が遠のいた。それにしても呼びかけはいいものだ。あの娘さんは、きつとよいお嫁さんになつてゐるにちがいないと、祈りを込めて思い描くのである。そうそうもう一人、若い夫婦でしているクリーニング屋の奥さんがある。「奥さんお久しぶりですね」と先ず声をかけ、すらすらと預り書に名前を書く。「あなた覚えがいのね」と言う、「いいえ、お客さんの名前覚えようと努力しても、お産をしたら覚えが悪くなつて」と言う。奥から赤ん坊の泣き声をした。

ところで夫は、五年前から脳梗塞の後遺症で闘病中。身体は不自由だが、幸いにして記憶力や思考力は破壊されてない。だから私の本当の気がかりの第一は、この事である。せめて現在のままの状態で夫婦の暮しがつつけられるよう、神に祈る毎日である。私の老化のお粗末をさらけ出した次第。

気がかりを糧に元氣を出している 柳子

麻生路郎の作品とその周辺

大家の、い、ろ

(9)

橘 高 薫 風

川柳雑誌の大正15年7月号に小島六厘坊の十八回忌が5月26日午後7時から築港託児所に於て営まれ、路郎が故人の思い出を語ったと掲載されている。同じ号に木村半文銭が、「忘れ得ぬことども」、翌8月号に「六厘坊遺聞」を書いているので、六厘坊の特異な偉大さを路郎から聞いていた私は、ここで六厘坊について一筆触れておくことにする。

六厘坊は明治21年生まれ、路郎と同じ年である。一年以上には同じ市岡中学に通っていた後の川上日車の七厘坊がいた。七厘坊とは、中学時代から幸田露伴、島崎藤村、樋口一葉らの小説を話題にし、殊に露伴の「雁坂越」に感銘を深くしているのは、六厘坊が小説の主人公と同じ継子の境遇であったかららしい。六厘坊は心齋橋北詰で小島洋服陳列所を経営していて、絶えず何人かの川柳人が屯し、川柳談義に花を咲かせていた。雄弁と言えるほどに天晴れた話術を持前の大声で句の講釈をした。六厘坊が褒めて解釈すると誰しもが惹き込まれて思わず感嘆するが、仲々褒める

ことはなかった。六厘坊は同じ中学の七厘坊と句の上でよく言い争い、直ぐ絶交したが、「二、三日のうち―早い時は翌日―七厘坊は姿を見せ、またしてももめて再び絶交することを経り返した。

明治37年、日本新聞に「新題柳樽」を創設、新題山柳樽寺和尚剣花坊と称した井上剣花坊に投句、多作速吟、到る処吟懷を恣にし、大まかな作品の質を推賞された。日本柳壇の傾向に合致したこの天性を見込んで剣花坊は、別格本山西樽寺の名を与えたのであるが、六厘坊は、「そんなものは要りまへん」と応じず好意は宙に浮いてしまった。六厘坊十代の生意気な所業であったが、これが後々関東柳壇に追従せぬ独自の関西川柳界進展への礎となった。六厘坊は明治39年頃には、都新聞の前身大阪新報に「新報柳壇」を開いていた。ライバル紙の大阪日報の「日報柳壇」に割り込み、川柳の本体を説いて合併を強要する。その会合でも、威圧力と説得力で全ての人を惹きつけてしまふ。そして御霊の東、五二館

楼上で合併記念会を開催、以来、個々の関係は別として新報・日報両柳壇は言うまでもなく、日本新聞や読売への投句者までが、これを契機に団結、大阪の川柳界を形成していく。機関誌「やなぎだる」が「葉柳」に発展したのもこの時で、後「土団子」が発行される。

六厘坊の豪傑ぶりは情歌の宗匠田中芳哉園氏の会合で傍若無人ぶりを見せ、盃を打ちつけられて大立回りを演じ、多勢に無勢の六厘坊は、したたか鉄拳を受ける羽目となる。それも民謡や俗謡をいささか詩的な文芸と解していた六厘坊の所見開陳が、「この小僧生意気な」となったのである。六厘坊は、なおもこりずに初めて出席した短歌の会でも、「私が披露します」と、集められた作品を驚嘆みにして、委細おかまいなしに批評をし、質疑まで受ける高飛車を行動に出たらしい。余人には考えられぬことである。

才氣横溢、自ら天才六厘坊と称した熱血児も病には勝てず、しばらく魚崎の方へ養生に出ていたが、明治の末期、二十一歳で天逝する。

六厘坊は明治中期に生まれ明治に死んだ川柳家だったが、関西柳界には大きな足跡を残した。その時、朝日新聞の社会面に、小さくはあったが「小島六厘坊逝く」と報じられた。路郎が大きく影響を受けた一人であった。

四つ脚で空が存分見えませぬ
孤独になつて動物を飼つてい
動物が好きで女の獣医さん
大嫌いよく分つてて犬が吠え
捨て犬に尻尾振られて背負い込み
チエーンソー森の動物脅かす
動物園親子の絆確と見る

養鶏に卵の値段伏せておく
動物が好きで男を憎めない
動物実験重ねかさねて試薬品
寝てるようでも起きている犬の耳
子育ては動物たちを見習つて
動物園大きな順に観て回り
籠の鳥明日へはばたく夢がない
人間のエゴに迷惑するペット

佳
蟻の私語労働基準法はない
吠えすぎも全然吠えぬのも困る
子かまきり哀しい程の浅みどり
ひょうきんな狸迎える道後の湯
老犬のしぐさ他人と思えない

人
もつと良い話聞きたしロバの耳

地
金魚屋の声がしそうな城下町

天
動物とじつくりお話してみたい
動物が好きで出世に遠い父

ゆり子

文子
朴竜

主一郎

一乗

寿美

恭昌

鉄治

保州

勝美

浪速子

杏村

風水

旋風

風云児

吹く

内田結実選



消えかかる噂をおる火吹き竹
火種吹く愛を告白するように
やがて散る花だか風よ吹かないで
虹色の夢をひとときシャボン玉
順風満帆だから石橋二度叩く
自業自得の痛みは風に吹きさらす
吹き刺さる風も裸と受け止める
ローソクの火を吹き消してはならぬ
口笛を吹くと夜霧が深くなる

小風が吹いて女の座がゆらぐ
吹く度に父の大樹がゆすられる
今にみろひと泡吹かす胸算用
紙風船吹いて老いにも夢があり
残り火を吹いて余生を生き延びる
野心抱く眉に男の風が吹く
隙間風ふさぐ女の壁が無い
矛先を変えろと風も強く吹く
水墨画墨のにじみに風がある
明日吹く風に脅えている党首
ほら吹いたツケヘカードが忙しい
ほら吹きが小さい野心視かせる
主義主張持たぬ男の吹き流し

野風吹いて老いにも夢があり
残り火を吹いて余生を生き延びる
野心抱く眉に男の風が吹く
隙間風ふさぐ女の壁が無い
矛先を変えろと風も強く吹く
水墨画墨のにじみに風がある
明日吹く風に脅えている党首
ほら吹いたツケヘカードが忙しい
ほら吹きが小さい野心視かせる
主義主張持たぬ男の吹き流し

花の種はこぶやさしい風が吹く
指切りの火照る小指を吹いてみる
愛憎の狭間に風が吹き抜ける
吹き抜ける風にも花は愛を抱く
三姉妹それぞれに吹く風の彩
吹き過ぎて悔いが残ったシャボン玉
先頭へ吹いたラッパが聞こえない
法螺を吹く男の抱いているロマン
蜘蛛の糸そよ吹く風に身構える
耳の奥に少し届かぬ風が吹く
ほらを吹く話にあきたシャンデリア
冷めていく愛を知ってる火吹き竹
グラス吹く職人の眼の輝きよ
特急の風吹き抜ける無人駅
サイレンが過疎の音して吹き抜ける

佳
悪知恵を吹き込む鬼がいて困る
大衆の中で吹矢に狙われる
吹き替えの裸体見事な胸の線
吹き溜りに今日も雀が寄ってくる
口笛を吹く少年が見当らぬ

人
マニキュアを吹いて女の出来上がり
真直ぐに吹くから壁に当る風
笛吹いて月が出るのを待っている
寄り添っているのに風が吹きぬける

地
マニキュアを吹いて女の出来上がり
真直ぐに吹くから壁に当る風
笛吹いて月が出るのを待っている
寄り添っているのに風が吹きぬける

重人

高夫

元江

希久子

信義

しげお

鉄治

朴竜

京子

艶子

露児

可住

温子

風云児

初步教室

題一 宅配

辻 白溪子

今月の題「宅配」は、隣へ届いた物を預かるが多く、旅からの宅配、実家からなど、やや着想の範囲が狭かったように思います。その関係か、二句の方も見受けられ残念でした。なお、句を本社事務所に送付される方が数人おられますが、手数を煩わせますので、是非、私宛に葉書で送って頂くようお願いいたします。

宅配に親馬鹿詰めて下宿先 好花
 (宅配の中へ親馬鹿詰めて着く)
 宅配と言われ不覚にドアをあけ 治夢
 (宅配の声に騙され開けたドア)
 宅配を開く楽しみじらされる 芳水
 (父帰るまで宅配を開けさせず)
 子沢山この日ばかりは母天下 幸夫
 (宅配が一つで足りない子沢山)
 お隣で止まって去った宅配車 夕ミ
 (隣まで来て宅配が引き返す)

宅配でとどけ度い愛がある

(宅配にして届きたい愛がある)

共稼ぎ宅配さんも困るだら

(宅配を困らせている共稼ぎ)

宅急便きたら隣のものはかり

(隣留守また宅配を持ちこまれ)

離れ住む娘へ宅配の紐結ぶ

(宅配の荷造りにある父の癖)

宅配で送って手ぶらで行くゴルフ

(宅配で送り慣れているゴルフ)

お隣の留守に決まって届く宅配

(宅配が届くと隣はいつも留守)

トレイラーで夜中を走る宅配速い

(宅配の速さ夜中も突っ走る)

宅配へ洗濯物を新社員

(宅配を開けると洗濯物はかり)

宅配の夕食セットが街走る

(宅配の夕食セットに馴らされる)

宅配に見合の写真ついて来る

(見合写真を入れて宅配便が着く)

旅先の母から宅配到着す

(旅慣れて宿から宅配便を出す)

古里の香が今年も届く宅配便

(旬の香を詰めて宅配又届く)

許すとは言わぬ母より宅配便

(宅配が届いて母の文がない)

志重

宅配人隣りの品に戸をたたく

(お隣の宅配預かる判を押す)

宅配に食べ方印した母の味

(お料理の仕方宅配入れて着く)

宅配で酒と決めてる弟子の義理

(結局は恩師へ宅配酒と決め)

宅配で傘寿の父に派手なタイ

(父宛の宅配ネクタイ派手すぎる)

宅配に友の便りも添えて出す

(宅配へ友の近況まで教へ)

宅配にふる里の味母います

(ふる里の味宅配にして届く)

旅土産宅配便で先に着き

(宅配が届き旅から帰って来)

宅配便お隣りばかり置いて行き

(宅配を隣へ届けましたメモ)

印鑑を押して宅配置いてゆき

(お隣の宅配受取る印を押す)

宅配ときめて買い足す土産物

(宅配は近所の土産物ばかり)

ドアホーンに返事も弾む宅配便

(宅配を待ってたようにドア開く)

四季おりおり愛の絆は宅配便

(四季の物語めて宅配途切れない)

お仕舞と言う品を届け宅配が去に

(宅配が多いお宅とバイト知る)

曉子

三重

隆

一乗

一枝

敬

秀香

彩子

ふさ子

真澄

辰男

金吾

春風

土産物宅配便で先に着く

房枝

国訛入れて母から宅配来

民子

宅配所親バカだと顔ひける
(親馬鹿を詰めた宅配持つて来る)

美恵子

(宅配にしたお土産が先に着く)

清柳

(宅配と一緒に届く母の文)

昭治

また隣りの荷物預かる宅配便
(隣の荷物預かり宅配縁がない)

溪声

(宅配を三文判で受取られ)

俊子

(宅配が着いた電話とすぐ分かり)
お隣りが羨やましくなる宅配便

トキ

亡夫の好物届くものなら宅配で
(宅配で亡夫の好物届けられ)

好花

初孫の夢宅配に託してる

はる子

(宅配を隣と比較してねたみ)
今日もまた宅配便は隣宛

喜代子

母の日の宅配人は上機嫌

タミ

(初孫へ宅配着せるものを詰め)

みやま

(宅配が今日も隣へ届くべし)

純子

(宅配がきっちり母の日に届く)
今日は重いよ宅配さんが笑顔くれ

志重

(温もりを詰めて宅配便が着く)

しづ子

宅配でふるりの句とどけられ
ふるりの句宅配でいつも来る)

和子

参考句
小包を宅配便が越えてゆく

杏村

(宅配に土産持たせて孫帰る)

芳枝

(宅配便団地日本の縮図かも)

隆雄

土産物宅配にして旅終る
夏休み孫が宅配されて来る

富喜子

(宅配のバイトが性に合った孫)

富喜子

(宅配でお送りしますと土産売る)

絢子

母の汗詰めて宅配空を飛ぶ

ふさ子

(宅配のバイト預かり匂い嗅ぐ)

公子

(宅配でよくれた物が任地から)

敬

私の句
ソーメンを届け宅配喜ばれ

白漢子

(宅配の冥利笑顔の領収書)

君江

(宅配をほどくと洗濯物ばかり)

忠祿

教え子の名で宅配の蟹が着く

白漢子

(領収印貰って宅配汗を拭く)

辛枝

(宅配の下着ですます里帰り)

軒太楼

題「借りる」 9月15日締切(11月号発表)

白漢子

(ひと言を添えて宅配着く下宿)

みつこ

(宅配で先に荷が着く湯治客)

春枝

宛先 下569 高槻市桜ヶ丘北町3-19

白漢子

(宅配がいつも素通りばかりする)

民子

(宅配が届いて湯治の客を待つ)

春枝

宛先 下569 高槻市桜ヶ丘北町3-19

白漢子

川柳と文章

川柳こぼれ話

田中正坊

寺尾俊平集『風の中』の解説を橘高薫風氏が書いている。句の鑑賞文はこういうふうに書くものかとなすきながら読んだが、川柳に関心が深い木津川計氏が『番傘』誌に寄せた文章の中で、「実に滋味あふれる、温かくてこころ優しい一文、私の言う『短詩型に長けた人は文章がうまい』を裏づける名文であった」と激賞している。

麻生路郎も文章が得手だったらしく、構造社出版の川柳全集にも、『川柳エッセー』が多く収録されているが、中でも「南北逝く」は比類のないすぐれた追悼文だと思ふ。新聞記者を経て広告マンとなった岸本水府の文才は定評があるが、「人間手帖」ほどの章もおもしろい。芭蕉をはじめとして、俳人・歌人で名文家は多く、特に正岡子規は、「日本のコラムニストの草分けの一人」ともされている。

「すぐれた川柳作家は文章もつまい」と本

津川氏に和したいし、そうありたいものだと思うが、現実はそのとはかぎらない。私の実感としては、その相関関係はあまり高くないとさえ思われる。各柳誌には多かれ少なかれ川柳作品のほかに、さまざまな文章が掲載されているが、他の文芸誌と比べるとかなり見劣りがする。編集者が掲載をためらい、あるいはライトしなければ活字にできない文章も少なくないという実態がある。

川柳をふくむ短詩型文芸とエッセーなどの散文とは、もとより共通する面はあるが、やはり異なる性格もあり、川柳には川柳としての勉強があるように、文章を書くにはやはりそれなりの習練が必要で、はじめから活字になる文がつくれるものではない。中国では、「詩をつくる、文をつくる、書がかかる、絵がかかる」のが文人の資格とされたが、せめて詩才と文才は兼備したいものである。

それではどうすれば文章が書けるようになるかということだが、ここまでですでに予定した紙数の半ばをこえたので、結論を急がずばなるまい。簡単に言ってしまうと、できるだけ多くの名文を読み、文を多く書くということにつぎが、それではあまりにも芸がないので、「文をつくる」上でヒントになるような事例を、三のべて責めをはたしたい。

これはどのような「文章読本」でも指摘されていることだが、何を書くにしてもまず、主題（テーマ）をしっかりととずえることである。「何を言いたいのか」が書いている本人にはつきりしていなくて、読む人に分かるはずがない。それが決まれば、つきは何かから書きはじめかである。リードとも言うが、書き出しの数字がその文章の「目玉」であり、それから本論にうつり、結論でしめくくる。オードックスな三段階法の構成である。

『京都三条 糸屋の娘／姉は十六 妹は十四／諸国大名は 弓矢で殺す／糸屋の娘は 目で殺す』。こんな文句を読まれたことがあるだろうか。頼山陽作とも梁川星巖作ともいわれているが、漢詩の叙法である「起・承・転・結」をコンパクトに示した文句で、文章設計の基本と考えてよい。

さらに、レポート的な文章を書く場合、忘れてならないことは、「だが」「いつ（時）」・どこで（所）・何を「したかを押えること、なぜ（理由）」・どのように（状況）」を付け加えることもあろう。要するに「書く」というのは、気の長い職人の仕事である。例によって舌足らずとなってしまうので、おわりに板坂元著『何を書くか、どう書くか』（光文社）を推薦しておきたい。

柳・俳境界論メモ

竹内紫 鐸

本誌の「四季百句」「花百句」の作品を見て気になることがあり、関東に住む俳人六人に意見を求めた。かなりの時間をかけた後の返事を貰ったが、全句の一〇ないし二五％が「俳句といえる」句であるとする判断と、注目句（俳句としての評）が記されていた。八割以上の人が巧拙は別として俳句とみな句は逝く夏をハモニカ吹いて惜しみけり 史 好 秋風のどこかに亡父の祭笛 武庫坊 冬の月抱いて静かな水たまり 白 汀 などであった。ほかに、惜しがられた着想の句もあるが、俳句としての評価だから、作者は気にとめなくていいと思う。

それより、俳句という大田と、川柳という小田とが、だんだん月食のように重なってきたな、というのが私の印象なのである。

次に、この逆の調査をしてみようと考えた。

私が俳句の解説書から抜き出した人事や行事の句を百ほど列記し、文通のある川柳選者数人に送って、川柳といえる句にマークして貰えないか、と頼んだ。私の主観で拾った、川柳に近い現代俳句（注）を見て、未発表句に對する選者の見地でどれを川柳と認めるか、と聞かれると困るらしい。返事は少なかつた。それでもK、T両氏は「川柳といえる」句を挙げ、それが対象句の半分はあつた。特にサングラス掛けて妻にも行くところ

後藤比奈夫

天国はもう秋ですかお父さん 塚原 彩
石段を抱かれてのはる七五三 檜 紀代

は「上」の川柳に入る一般向きの句だといふ。俳句と川柳を作った人なら両分野の微差を論じてくれそう。そんな人を探している。昔、『国文学と鑑賞』か何かで読んだが、川柳の上なるものは俳句としては下であり、その逆（俳句の上は川柳の下）もいえる、という説を思い出す。もし両分野でも「秀」といえる一句があつたとなると、柳・俳の定義を考えなおす必要がありそう。

（注）『秀句三五〇選』（蝸牛社）中の題別集句、色・祭・生・雪などから採取した。

私は俳句の鑑賞・作句歴は短い、俳句の

視点と季語の用法は、川柳と区別していたと思ふ。しかし、無季俳句に入るものを、知らず知らずのうちに川柳と考えていたらしい。

見えぬ方のメガネの埃すておけず 拙句

が「番傘」の雑詠に採られたが、後年、句集を作る時、薫風さんから有名な無季俳句

見えぬ眼の方の眼鏡の玉も拭く 日野草城を告げられて、引つ込めた記憶がある。

柳誌では、先例のある句も努力を買われて一度は採られる。しかし、句集や再選抜の段階では、先句とかちあわないう先輩に見て貰う必要がある。が、そういう生き字引が存続するかどうかが問題だ。

○ 初めに四季百句を見てくれた俳人達は文芸誌の編集に携り、俳・柳を並べて見てきた人である。顔見知りの協力ともいえるが、重複域の数字化がちよっとだけできた。ただ今後、部分食のような双田の重複を率で示せても、あまり意味はないかもしれない。

ところで、川柳という円の中にいる人は、どのくらい俳句作品を読んだのであろうか。俳人から見て陳腐な俳句も、川柳家の目には物珍しい（日頃俳句を見ていないから）。そういう着想の句が柳誌上では寛選になり、やがて「部分食」が広がることはないだろう。

本社 八月句会

八月七日(水)午後五時半

メンスファアツションセンター

この二、三日、最高気温が三十度ほどの凄
 げやすい日が続き、久し振りに睡眠不足を解
 消した顔も混じる九十三名が集まった。

句会に先立ち、三連絡事項があった後、
 高杉鬼遊氏のおはなして内容は次のとおり。

川柳をはじめて二十数年になるが、まだ川
 柳の理論を先輩達から教わったことがない。

例えば「し」「き」止め、「中八」など、よく
 ないと言われているが、それらについてなぜ

かという理論付けがまだされていないようだ。
 それはさておき、自分としては真実を詠むだ

けでなく、フィクションに真実味をいかにし
 て持たせるかに心を配り、思いのこもった味

わい深い面白い句を作ってゆきたい。そうで
 なければ読んでもらう人に迷惑である。

以上のような内容であったが、例句のあげ
 方が適確であったのと、はっきりした口調と

で大変、説得力があった。
 初出席は、中島志洋氏(藤井寺市)、木村一

笛氏(池田市)。

月間賞は西田柳宏子氏(大阪市)。

(進行)奏月 (受付)凡九郎・月子

(清記)楓楽 (記録)射月芳・月子

席題「ノート」

木本朱夏選

交換ノートのストレスの捨てどころ
 きっかけは美代ちゃん落したノートから
 こん太のノートとても大きな夢がある
 ノート買った金タコ焼きにばけていた
 立たされた苦い思い出あるノート
 ノートには好きだと書いて実家帰る
 企みのノートで明日をもてあそぶ
 真相をノートに残すはずがない
 イトマンのノートに本音書いてない
 きな臭い風 秘書のノートは焼き捨てる
 ばらばらのノート思い出つき合わす
 ツンドラの苦衷ぎっしりノート埋め
 八月のノートに残る敗戦記
 青春ノートお金のことは書いてない
 算数のノート理科系あきらめる
 みんな留守へソクリ計算するノート
 懸賞へ創作ノート書いただけ
 ノートだけ愛の告白知ってます
 わたしの恥で古いノートが捨てられぬ
 ノートから女の住所覗き出した
 替玉もしっかりノートとっている
 カンニングしないノートに自負がある
 新しいノートに期待してしまふ

亡父の机 何も書いてないノート
 母のノートは自由奔放O型で
 姑のノートにあった少女趣味
 妻にしか分らぬ符合があるノート
 すれ違い夫婦 喧嘩もするノート
 お互いに知らぬノートを持つ夫婦
 夫にも見せぬノートへ書き続け
 鬱憤をノートの中で眠らせる
 競馬の子想ばかり書いてる雑記帳
 生煮えの言葉ばかりを書くノート
 あの人が消えた某月某日のノート
 実年のノート余白は風ばかり
 スランブがずっと続いているノート
 ノート積み男の鈴はもう鳴らず

佳
 母ちゃんのノートの誤字がもしろい
 ノートの隅に翔ぶ日の詩を走り書き
 サヨナラを書いてノートは閉じたまま
 神様のノートを魔女に盗まれる
 妻のノートに楡の木罪がある

人
 ノートから迷うころの風の音

地
 ノート伏せてしばらく蟬を聞いている

天
 白いノートを汚すわたしの悔悟録

軸
 魂の遍歴がある日記帳

シマ子
 年代
 恭昌
 楓云児
 満津子
 吐来
 月子
 楓楽
 公一
 太茂津
 白兎
 楓楽
 正坊
 悦郎

天笑
 天笑
 美代子
 美房
 元紀
 千秀
 萬的
 たず子
 朱夏

兼題「ひらたい」

桜井千秀選

リハビリの母へひらたい道を選び
ライバルの顔ひらたくなつてきた
魅力ないひらたい胸に夏の風
ひらたくて水一滴も掬えない
ひらたい道を凹凸にする白い粉
手のひらにかごめかごめと書いてある
青空を宙にひらたい罇雲
集合写真ひらたい顔は妻だろ
あの人に来るとひらたくいかぬ会
母の愛ひらたい皿に盛つてある
四捨五入たいらになつて旅続く
ひらたい肚のどうにか読めてきた上司
拝啓はやめてひらたく書き直す
遠回りひらたい道を行くも年齢
寅さんの平たい顔にある孤独
ひらたくて動きが鈍くなる金魚
坂を越えひらたい道でけつますく
天の邪鬼も黙るひらたい仏の掌
巢立たせてひらたくなつた母の胸
お裾分けひらたい皿で物足らぬ
おたやんのひらたい顔で客を呼ぶ
ひらたく言えは所詮この世は雄と雌
掌にすがり心ひらたくする懺悔
金儲け下手凹凸のない暮し
即答を避けてひらたい席にする
玉子焼ひらたく焼いて一人食べ
ひらたいな父の視線に的がない

女 恭昌 武庫坊 奏月 東雲 透太 雅文 正坊 三男 楓楽 小女 小路 げお 庸佑 志洋 二南 はつ絵 はつ絵 衛正子 二南 楓楽 射月芳 萬的 歌子 笛生 悦郎

少年のゆめ限りなし草千里
人生をひらたく泳ぐのもコツか
石蹴りへひらたい石が見当らぬ
靴を脱ぐ縁にひらたい石がある
扁平足トボトボ生きた父の靴
父よりもひらたい母の手がぬくい
平坦な道で葛藤くりかえす
毎日のひらたい道に飽きてくる
赦された道をひらたく切り開く

佳

のぼりつめひらたい場所がない不安
意地を捨てると面はのつべらぼうになる
立て札がひらたい土地をひとりじめ
煩惱を洗うひらたい写経堂
樹の下ひらたい処で思案する

人

観客へ台詞ひらたく溶けていく

地

ひもとけば決してひらたくない古代

天

ひらたいが裏も表もちゃんとある

軸

丸い地球をひらたく見せる世界地図

兼題「波乱」

吐田公一選

ひと波乱ありそうファイト湧いてくる
退屈な波乱に渋いお茶が出る
一ト波乱起きそう遺産有りすぎる
日めくりの三百六十五枚ある波乱

鬼遊 達子 杜的 螢 朱夏 紫香 重人 典子 寿子 落児 美代子 いわゑ 柳弘 岳人 寿子 萬的 太茂津 千秀 保州 螢 雀踊子

マツチポンプの波乱を九条知っている
大波乱 右往左往の蟻の群
次々と社長を辞めてゆく波乱
花道の裏の波乱は見えられぬ
ひと波乱あるかも知れぬ山動く
落葉掃く尼僧波乱は口にせず
バブルはじけて北浜の大波乱
一波乱きそう語尾があがつてる
いくたびも波乱のあつた皿のひび
波乱万丈しぶとく生きた老父の皺
その先の波乱へ椅子は耐えている
自分史の波乱の真とても好き
わが道を選び波乱を口にせず
ひと波乱起きる火種を胸に秘め
八月の波乱 祈りを深くする
笹舟で波乱の舵を妻がとる
波乱ある度に大きくなる男
ひと波乱おこしに伯母がやってきた
波乱つきつぎ男と女いる限り
一波乱秘めて九回裏をまだ信じ
母さんのひとこと波乱よんでます
一波乱あるかも知れぬジャンプ傘
皿一枚 投げて我が家の波乱終え
自画像のバックに波乱ありました
豊満な起伏に波乱ひそませる
ひと波乱あるぞと風の向き変る
波乱みな糧にしてきた立志伝

佳

仙吉 雅文 眉水 いわゑ 透太 楓楽 千歩 幸 恭昌 寿子 太茂津 凡子 庸佑 冬葉 東雲 一風 みつ子 武庫坊 杜的 ダン吉 しげお 昭子 重人 路児 美代子 楓楽 規不風

古傷をチラチラ出してくる波乱

一波乱ありそう妻が酌をする

椅子一つ空いて波乱となる兆し

喜びのダルマ波乱を知っている

ひとと波乱あるたびごとの羽繕い

一波乱ありそう妻の黙秘権

二つ三つ波乱もあつたフルムーン

一波乱あつて深まる夫婦仲

兼題「研ぐ」

名剣になるまで研がぬだけのこと

峰打ちのための刃を研ぎます

情報の流れで舌先研いでいる

したたかに生きる野心の爪を研ぐ

父さんが研ぐと切れなくなるナイフ

ときどきは錆びた刀を研いでおく

單身赴任 馴れた手付きで米を研ぐ

試し切りしたい包丁研ぎ上げる

職人の砥石 依怙地を受け止める

包丁も研げぬババです家長です

何かある鈍刀研いだ俄雨

米を研ぐこともあいこで老夫婦

後継ぎのない包丁を研いでいる

研ぐものはないかと父の台所

研ぎすまず夫がヒエロめいてくる

ただし

薫

美代子

昭子

章久

美房

公一

路子

緑良

仙吉

多賀子

衛正子

螢

志洋

笛生

薫

シマ子

憲太郎

年代

透太

榎

月子

末法の世を斬るペンを研いでいる

頼りないあすを信じて米を研ぐ

研ぎすまず心にあすが見えてくる

研ぎすまず耳 土壇場に強くなる

これからひとりわたしを守る爪を研ぐ

入社式 研ぎすまず耳並んでる

竹光を研がねばならぬ破目になり

底辺で五分の魂研いでいる

半日はノミ研ぐ大工見当らず

朝帰り妻が包丁研いでいる

台詞ひとつ研ぐ脇役に夢がある

余命表しつかり心研いでおく

カルチャーへ昔の錆を研ぎに行く

お下げ髪やがていくさの爪を研ぐ

竹光をときどき出して研いでいる

研ぎすまずされた口調で青年主張する

研ぎ澄ました頭で陳情団捌き

赤い爪いつも研いでる倦怠期

いつか切る絆にナイフ研いでおく

黙秘権 妻が包丁研いでいる

爪研いで妻が待つてゐる午前様

佳

飽食の猫は爪から丸くなる

包丁を研がされている二号邸

研いだ爪 隠して女対女

爪研いでいるとも知らず午前様

許す気はないけど米を研いでいる

正坊

勝晴

頂留子

歌子

凡子

東雲

重人

みつ子

柳宏子

洋敏

寿子

重人

凡人

いわゑ

智子

萬的

文秋

恭昌

たず子

柳伸

公一

薫

愛論

千秀

朱夏

三男

悟郎

親指の腹 承知せぬ研ぎ具合

緑を切る鉄はいつも研いでいる

兼題「文字」

松川杜的選

丁ねいな文字にも出てるお人柄

達筆の軸をわかった顔で褒め

癖のある文字であなたとすぐわかる

絵馬の文字 天神様も苦笑する

丸文字のカードも添えたチョコレート

丸文字でかくしてみてもスキヤンダル

大文字きょうのお花は高うおすえ

だから一目で分かる下手な文字

尼さんの文字はスラスラ美しい

夕顔の白さへ文字を見失う

達筆のくすした文字に行き詰まり

おいでやす文字で書けない温かみ

伝言板の文字は涙を匂わせる

ワープロの文字冷たいと言わないで

文字通り穴を埋めなくなる補てん

文学の森で読めない碑に出逢う

カタカナ厄濫ときどき舌を噛んでいる

書く前は確かに知っていた漢字

人文字が揺れる熱鬧甲子園

鉛筆で金釘流のぬくい文字

ワープロの文字は情けをうけつけぬ

雅文

諷云児

吐来

いわゑ

頂留子

三男

路子

緑良

仙吉

多賀子

衛正子

螢

志洋

笛生

薫

シマ子

憲太郎

年代

透太

榎

月子

ライバルの死角で牙を研いでいる

人

ライバルの死角で牙を研いでいる

人

ライバルの死角で牙を研いでいる

人

美しい文字にもすこし癖がある

美代子

落書を消すには惜しいうまい文字

紫香

影ぼうし頭に残る女文字

頂留子

文字読まぬ今日一日の不伴せ

悦郎

兼題「玉」

西尾

葉選

筆を持つやすらぎがあり墨をする

柳伸

床の間の読めない軸と待たされる

凡子

玉に瑕は私に億の金が無い

敬

玉虫色の男の裏が干してある

いゝゑ

文字遊び読めて来年幼稚園

美房

逆玉をねらう男で貌持たぬ

雀踊子

天網恢々バチンコ玉一つズボンから

ダン吉

妥協する文字が優しくなっている

美代子

毛糸玉で愛の砦を編み上げる

楓

玉杯に枯野が続く胸燃やす

朱夏

髭からの印象頑固な文字届く

柳影

玉杯に枯野が続く胸燃やす

杜的

命名の文字余りむつかしすぎないか

保州

金釘流 恥じることなどない写経

楓

玉杯に枯野が続く胸燃やす

悦郎

ひらかなで母が教える礼智信

洋敏

大好きな文字はと聞かれ天と書く

千歩

ガラス玉 一途な愛に嘘はない

柳影

人恋し勾玉下げた埴輪の目

白兎

姉妹 楷書と草書ほど違い

美房

ビリヤードの玉に仲間がたと居る

元紀

優しさが少し足りない丸い文字

眉水

佳 行間にためらいがある女文字

透太

玉中の玉は子供に知らせない

はつ絵

美しい文字に男が引つかかる

柳宏子

感心はするが草書の読めぬ文字

小路

玉串奉奠 弥栄和して句碑の建つ

吐来

母の文字 詠りのままがあなたにかい

昭子

身についた点画 妥協を許さない

人中

お手玉のうまい女にだまされる

武庫坊

年中で一番いい字書く賀状

隆

御巢鷹山に走る絶筆七回忌

地

占いの暗示が水晶玉に出る

凡子

伏せ文字の日記を繰って手を洗う

文秋

天

しげお

胆っ玉母さんが待つ国訛り

満津子

さよならのおんな文字から秋になる

朱夏

軸

幸

水玉のネクタイ火玉やもしれぬ

太茂津

無罪判決 玉砂利を踏む夏背広

恭昌

杜的

白玉の涼味に憩う暑氣ばらい

柳留子

葉選

八月の思いに耽けるラムネ玉

柳伸

敬

玉砕の島でハイレグ闊歩する

いゝゑ

楓

玉音の雪崩となりし蟬しぐれ

透太

杜的

お上手なお口が少し玉に傷

朱夏

寿子

玉石混淆 光らぬ石も数のうち

保州

柳影

玉ねぎのむいてもむいても顔がない

洋敏

元紀

玉乗りが得意で足が地につかぬ

白兎

はつ絵

不倫した玉子を抱いている不安

眉水

吐来

一田玉のくやしさがもろにくる

柳宏子

昭子

人恋し勾玉下げた埴輪の目

昭子

隆

鉄砲玉みたいな人でも惚れてます

昭子

文秋

引出しのピストルの玉抜いてある

昭子

満津子

玉石混交 玉は自分と想うてる

昭子

恭昌

七月句会 兼題「迎える」追加

昭子

老地柳増

原稿は川柳塔社事務所へお送りください
毎月25日締切・30句以内厳守。所定の原
稿用紙に清記をお願いします。 編集部

岸和田川柳会

芳地

狸村報

置物を変えて苦境を忘れよう
ご詠歌に集まる幸福そなた顔
七色を集めあじさい雨を待ち
ガキ大将集めて蟻の列続く
かあさんの一言希望の糸口に
糸口へ二の矢三の矢とんでくる
逆転の糸口にする代打策
発想をかえる糸口マンガ読む
煙草に火つけてコロンボ喋り出す
仲なおり糸口さがし目をつむる
糸口を掴んで雲に乗る男
糸口をたどればなんでもない喧嘩
梅雨最中うとうと妻の昼下り
店番のうとうと薄目あけたまま
血液の型に相性あるらしい
修正液を塗りたい過去が一つある
血液も老いて不味いか蚊も寄らず

武助 一 弥 富志子 小 紋 浪速子 二 南 すみえ 恵 空 信 子 甘 平 希久志 月 子 柳 宏子 狸 村 通 彦 文 時

唾液から動かぬ証拠掴まれる
茎切つて瓶に溜めてるへちま液
もついちど血液型の念を押し
病院をかえるたんびに血を取られ
廃液へきびしい住民パワーの眼

川柳クラブわたの花

片上

英一報

百姓一揆みな子のためにまいた種
蒔きもせぬ万両ヒヨのおき土産
刺のない新種のバラはバラでない
リーターは話の種が魅力的
種まいてさんさ時雨の祝いの酒
またたりなやみの種になるサイズ
種蒔きをカラス気長に待っている
土石流種も仕掛けもあるマグマ
大根と人参タネではわからない
マジックの種を明かして逆に受け
花を待つひまわりの種とりが食べ
種まきの覚えのない花咲きみだれ
たねまかぬ草ぼうぼうとよくしげり
ゆつくりと種をまいてる母達者
猫だけを可愛がるのが癪の種
農薬の野菜は買わず種を蒔く
ねたのない三面記事にあくびする
舶来のネタで彩る寿司まわる
ハイテクの世に祈りのみ火碎流
紫が似合う女で薄い緑
地の怒りこの空の地獄
空元気づけて心臓乱れうち

白光子 こう 勝 晴 天 笑 萬 的 シマ子 君 江 幸 枝 その 弘 直 トシエ 暁 子 明 子 みき子 弥 生 しのぶ 俊 子 芙美子 一 雄 泰 成 英 一 龍 隆 正 子

大空へ思いっきり飛びたいかこの鳥
願わくば色即是空で暮らしたし
青空の雲にロマンを呼びかける
夜空また母のない子の瞳に出合い
見栄捨てて底で暮して円くなる
どん底に落ちたお蔭で度胸出来
金なる木にも種あり玉の汗

久世川柳クラブ

二宗

吟平報

幸せな色に染め分け回す独楽
たよられる耳を確かに育ててこ
青空にトンビが描く愛の輪を
先生のイメージ違った白い髭
ふるりのイメージ消えた町に立ち
イメージに振り回されていた誤解
開通式の夢が砕けて無人駅
アルバムに燃えたイメージ埋めてあり
悪知恵が一番先に顔を出し
蟻の知恵人間様を手こずらす
伸びる孫縮む老婆の知恵の距離
知恵袋今日は昼寝をしています
六法全書時々知恵を借りに来る
不燃物でなくてよかった粗大ごみ

川柳東大阪

森下

愛論報

初 丈 一 章 美津留 友 甫 鬼 遊 伊久栄 志 重 江 山 ふさえ 半 仙 吟 平 恒 心 すみれ 甫 正 秀 香 山 人 邦 人 贊 平 章 度 恒 明 愛 論

弁当に妻のエルが詰めてある
弁当三つの子が孝行してくれる
駅弁をいつも土産にババの旅
弁当を比べて妻を評価する
出る幕もなくナイフは棚に錆び
リンゴ剥くナイフ捌きにある年輪
肥後守亡父が作った竹トンボ
こころなき一言からの隙間風
うっかりともらす一言墓穴掘る
平凡な妻の一言的を射る
親逝って一色足らぬ虹になる
太陽の色です雨がくれた虹
つかの間の虹に田植えの腰伸ばす
虹の橋渡れば亡父に会えるかも

川柳岩出

小倉

アサ報

美 子 孤 舟 文 秋 慶 三 喜 風 猪 太 郎 雀 踊 子 湖 風 雅 士 柳 宏 子 晉 吾 頂 留 子 精 子 綾 子 瑞 穂 正 直 紳 一 郎 千 鶴 子 春 子 永 年 悦 男 千 代 子 喜 市 達 子 英 子

ほとんどの失敗わたしとりしきる
枯れた手に年季が覗く書道展
もう一人の私がミスをして困る
荒波を越えて男は勝負する
手打ちしてさてそれからの座が乱れ
小園川柳会 立谷勇次郎報
美人だった亡母の面影セピア色
お神酒なら戴きますと女言っ
養老の滝に打たれて禁酒する
みよちゃんとはたるを呼んだ村の橋
酒癖が悪くて二次会外される
行楽へババはお酒を忘れな
もう少しお酒がほしい差し向かい
七夕に恋こがれて来たはたる
嬉しさがとろりとける祝いの酒
酔った振り見抜くあいつの手こわい目
木曾の旅夜汽車の窓に螢とぶ
酔いましたなどと本心まだ見せず
四十年経っても直らぬ夫のクセ
詩に酔って顔見りや実によさ男
面影は臉の中でまだ消えず
静岡川柳塔 永倉 僕川報
豊かさが無情にものを捨てさせる
減塩をメモに残して妻の旅
煽てる心の裏にある野心
如才なくおだてに乗るも社交術
白髪を染めてお洒落な母米寿

幸 子 和 子 ア サ 昌 子 与 呂 志 弘 治 伊 三 郎 キ ク 子 修 水 澄 子 向 西 歌 子 十 四 郎 勇 次 郎 ミ サ 子 め 女 紫 香 芳 子 寿 子 悦 代 金 吾 正 雄 孤 秀 猛 達 子 金 吾 た ま

脳細胞減り過ぎ兄の惚けははめ
久しぶり逢って名前が浮かばない
過去の苦も笑い話になるゆとり
末席で聞いているのも面白い
叱るより煽って伸ばす良い教師
美術館的な顔になって出る
親を捨て嫁と出て行く子を育て

三幸川柳教室

三宅

保州報

針させば音聞こえそう太鼓腹
針ほどの噂をつき大波紋
苛立ったわたしを針孔が笑ってる
倒産をされて指針が狂い出す
無雑作に畳屋さんの針供養

佳句地十選 (八月号から)

松本文子選

人間の終りに医者が見る時計
花の名を知らぬ男が花を買う
縁でしよう出合いの蟻がお辞儀する
人間とくらし不幸になった猫
相槌の細くなるまでいた不覚
母さんと呼んだ星がまたいた
青空を見ると洗濯したくなる
凸と凹うちの夫婦のことかしら
大阪の蛙せわしい声で鳴く
花満開何も描きたすものはない

草 丘 久 子 ダン 吉 ち かし 吟 平 湖 風 ミ サ 子 昌 子 と み お 一 路

魂胆の深さに喘ぐ返し針
大役へ刻一刻と針の音

合鍵が子の背なで鳴る不用心

仲裁に入る勇氣のない蛙

おらが村鍵など掛けたことがない

飛び切りの匂いに蝶は近付かぬ

用心に飲んだ薬の副作用

余所見して深みに嵌まる雨蛙

コンタクトするさい顔も見てしまふ

知らぬまにうるさい姑に似てしまふ

春眠へ時計うるさい姑に似てしまふ

よくしゃべるお多福が待つマイホーム

買えた土地蛙の声も抱き合わせ

うるさ型居て振り出しになる話

かくしゃくと煙たがられて生きてはる

うるさくて叱った若い悔いがある

解説がうるさく響く負けゲーム

孟母三遷ほんとは静かに暮らしたい

いぶし銀ほどの鈍さがほしい君

短調が好きな中古のバイオリン

箔つきの中古の椅子に新社長

ガタピシの中古に住んで佗茶喫む

骨董に触れると過去が温かい

飾られたままで古びてゆく絵皿

青雲に燃えた日もある古机

おっぱい川柳会

木村

明人報

長期入院家に大きな借りが出来
ここと言う所で逃げる青い鳥

明人
かおり

千秀

みね

一郎

美子

和子

かなめ

美子

幸子

幸子

美子

幸子

幸子

好子

正雄

靖子

桂香

茜

博章

朱夏

公子

高夫

不空

保州

百合子

鉄治

堺川柳会

河内

月子報

ババとママTシャツにあう白と黒
心急ぐままに残した走り書き
毎日の心遣いに愛給る
青春を一錢五厘にかけた夢
霧雨となりの家も消えており
心得を変えて余生をうめてゆく
禁煙も禁酒も明日からにする
功績や失敗談は通夜の席
スイミング息切れ苦しいダイエツト
入園の息つくひまにヒヨコ孵化
重なった計報引きずる思い発ち
自衛隊第九条でもめている
標準語話せと怒る子の電話
にわか雨干物の方先に入れ
姑が嫁にもたれて丸く住み

小四菜実子
ひかり
マサエ
迷観子
正雪
チカエ
吟笑
放任
よしみ
スミエ
伽名子
迷貫
ふみ
いさむ
白柳子

人を切る刃物はたと持っている
完投をして真っ先に捕手を抱く
持つ人が持てば素直になる刃物
台所の薄刃に温い亡母の思慕
辛抱の袋だんだん重くなる
天災に脆い歴史を繰返す
金銭に脆い肩書き剥けてくる
謀り事抱いて二の矢用意する
女医さんの顔に似合はぬメスの牙え
ライバルのナイフがいつも切れすぎる
辛抱のかたち靴下の穴よ
脆いからとても大事にする絆

満州
二南
柳宏子
金三郎
凡子
元紀
武助
ひで
富志子
重人
森子
泰子

川柳化粧檣

植村客遊子報

よう辛抱したと言われてしゃくり上げ
母さんのエプロン辛抱詰めてある
辛抱の重味で曲がる母の背な
辛抱のしすぎ過労死を招き
辛抱の積立満期ありません
辛抱してくれた夫へ努力賞
辛抱が薬味になつてゐる夫婦
もしかして辛抱してるのは夫子を抱いて地球を深く思いやる
脆いものたんと背負つて坂のぼる
ゴメンナサイが脆い男にしてしまふ
風向きが変る脆い絆です
鳥合の衆こ一番が脆すぎる
辛抱を窓に吊してあなた待つ
実家帰して辛抱を捨ててくる
入浴は孫に抱かれて二度童子
辛抱の花を育てている夫婦
辛抱の旗をおろせぬ母である

頂留子
紀美女
千万里
東雲
博光
楓
かりん
小雪
半銭
星子
二三
天笑
道胤
小鹿
月子
妻子
寿恵子
芳水

名鐘の音補聴器へがんと鳴り
下積みの過去大切に誇り持つ
友人の計報へ椿ボトリ散る
母の日へ母の墓前で語り合う
人生訓家宝と仰き父配る
落書の隅に本心見えかくれ
迷信を信じた母の背が丸い
石をけるカギツ子夕日にとけるまで
反対の票も来ている祝い酒

大鷹
遊峰
岳詩
サワ子
輝子
葉香
礎石
悲子
三重

必携の本読みだすと成る程な
夫喜寿過去は時効にしてあげる
薬より現金つかむと早く効く
職場では妻の知らない顔になる
春五月旅の醍醐味屋形船
ご機嫌の口調弾んで早くなる
石段の辛さ知ってる皮下脂肪
一泊へ女靴はふくれすぎ
母狩りカラスが先に毒見する
其処までは解るが意見がくい違い
虫の声聴いて食欲湧いてくる

川柳後楽吟社

從野

健一報

はる女 春蘭 美代 嘉 茂章 姫女 好花 一典 治夢 客遊子 草風 義親 美智子 柳五郎 青銅 秋月 浄美 哲郎 金吾 正秀 吟平 佐加恵 保男 拓治 健一

先頭がいるから雑魚で付いて行く
汗を流してから幸せが見えてくる
したたかに親父そっくり頑固です
望郷へ徽が匂うて山の駅
川柳塔まつえ吟社 恒松 叮紅報
行商の手帳払いの悪い家
思い出をすずかに語る古手帳
一冊の手帳が暴く悪の絵図
手帳にはたのしい予定だけを書く
暗号で書いた手帳が歩きだす
手帳にははつきり書いていて忘れ
ライバルの手帳私を消している
ポケットの手帳の汗を大切に
手帳には駄馬の一行詩で埋める
行事予定の中にデートもある手帳
息子の手帳涙こすった跡もあり
雨だれの泡はくほみへ行くしかない
水泡に帰して努力の建て直し
洗濯の泡にとけこむ今日の汗
いい夢は泡の如くに消えて行き
ビール泡サラリと吹いて仲直り
めしをたく泡仕合せな音になる
前へ歩きたいカニが泡ふいている
尾氈骨夏の用意は怠らぬ
藍染めの浴衣に女の夏がある
八月の雲にこだわり深くなる
炎天下私も蟻も歩くだけ
空蟬の無念がのこる夏木立

博友 桃風 照路 鮫虎狼 草丘 静江 太泡 登志子 妻小 鹿 雄々 清志 芳枝 友子 秀子 房子 幾子 満江 雀踊子 鶴丸 義良 清子 早苗 寿美子 長三

夏の絵の向日葵時々拗ねて見せ
こっそりと隣の木の芽取って来る
こっそりと一字を消した古日記
こっそりと汚い金を数えてる
白いシャツ白く洗って満ち足りる
Yシャツを脱ぐと優しいパパになる
汗じみたシャツ父の手が温かい
倉吉川柳会 渡辺 苦句報
吹く風に乗って気楽な旅出来ず
傷口をかくす鍵です渡さない
吹き抜けた五月の風のような人
昼間から鍵掛け寒い城に棲む
底辺を出るときびしい風当り
男の弱い所を風が通ってゆく
ファジーな笑いを顔につけて行く
箱入りの娘の部屋の鍵がない
鍵の穴何も見えぬが良い匂い
灯がつけばこけしの顔もほっとする
もう利かぬ顔がなかなか引つまぬ
宝くじ七々さんにぶら下げる
風通しよすぎていつも内輪もめ
弱腰をねらって風が吹いてくる
振られたが振ってやったと言いつらす
見栄っ張り心に固い鍵がある
好きだから心の鍵が渡せそう
猫の恋振られた後で爪を研ぐ
故郷へ緑の風を食べに行く
風上を歩いてくれた母がいる

多賀子 みえ 桂子 与根一 静恵 文子 叮紅 秋人 康子 さつき 雄々 しづ江 螢 天雀 独歩 勝見 ゆり子 柳風 石花菜 美智子 とみお 完司 玲子 とめ子 和枝 康志 ひさ子

ノックしただけではあかぬ愛の鍵
やれしまった鍵は車の中にある

川柳塔唐津支部

久保

再びは逢えぬ貴男に花化粧
石炭の港が乾く街寂し

いい町に住んだと思つ日の誤算
ハイミスの颯爽として心揺れ

ターゲットを見失つた迷い道
茂吉の碑松浦川の月明り

自然保護やと鯨も息を吹き
演説を聞くから票に迷いだす

子育てに使い残したほほしい眼
愛し子を肩に連れ立つ三の西

白無垢に綿帽子かぶり三面鏡
蒲公英が喜びそつな風になり

門限を子がたしなめる真婦の靴

川柳塔鹿野みか月

土橋

かくや姫雲からお出でついで逝く
夕立にゆとりをもらう午後になり

夕立を呑んだ茄子が笑つてる
抜擢へ裏であやつるコネの糸

五人の子私の姿見て育つ
芋の葉をかむり夕立さけている

この裏の破壊力にも負けまいぞ
私の胃とても減食続かない

裏のないこまめな嫁といふ平和
私のセンスで夫をリードする

喜美子
菩句

正敏報

喜久亭

義美

ふさ子

ちよ

治幸

紀一

朴竜

四郎

ハル

旭恒

虹汀

正敏

螢報

武子

かつ乃

信江

幸枝

静江

八重子

夕立が止んだら洗車はじめます
裏話にんげんらしくする坊さん
文明の利器がお空に雲つくる
楽天家雲行きなんか気にしない
飽食と飢餓と地球の裏おもて
雲の上みたいな人で近寄れぬ
裏通り好きな女が待っている
センスなどいらぬやる気が一番
母の皺彫りこんだのはこの俺だ
夕立に心の迷い試される
裏のうら知つて妥協の線描けぬ
たくましいわたし影についてゆく
夕立の情けか花も生き返る
夏雲に勝てるか四肢を踏んでいる
私淑した影を大きくなぞらえる
裏ばかり縫つて一日暮れてゆく
馴れ初めはある夕立の雨宿り
夕立が鹿野の雨量計に降る
虹を見るまで夕立に耐えている
夕立に似て人間の好き嫌い
盃に月が浮くのを待っている

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

遠火花むかしの話をむしかえし
むかしからこうやと古老突っぱねる
むかしの人は今日を信じて逆らわず
成功へ初心忘れぬ恩返し
老残にあつという間の一と昔
日傘くるくるむかしの恋は待つばかり

幸恵

隆風

昌子

智恵子

三千代

房子

しづゑ

早苗

喜与志

幸代

美つ千

はるお

みさ子

夕峰

しげる

和子

みさ江

盛桜

公弘

諷人

螢

星と語りた一枚のカード
流れ星あんなに俺も落ちこぼれ
こんなにも星があつたか故郷の空
流れ星心にけじめつけた夜
星きつと見ている泣く車椅子
スタッフに奇人達人天の邪鬼
裏方の苦勞名優忘れない

スタッフの一人持つてくるトリカブト
スタッフの一人が収賄したらしい
スタッフのミス底い合う酒の席
ハイハイと言えた初心が還らない
びかびかに皿を磨いている初心
陽の当る席で初心を考える
どてらい男初心忘れず生きた道
きびしさも初心へおくる温か味
勢いのほど見せて舞う三番叟
勢いの今度本気らしい顔
勢いの今度は本気らしい顔
床を背に父は勢いよく座る
勢いを撒いて祇園の鉾が行く
勢いに乗つてる人の落し穴
勢いにはずみをつけた棒グラフ

川柳さやま社

遠山

そわそわと見合いました顔も見ず
月ばかり冴えて願いはとどかない
そわそわに慣れてしまった花時計
マネキンへ私に似合う服をきき
母の目に子のそわそわは見逃さぬ

そわそわと見合いました顔も見ず
月ばかり冴えて願いはとどかない
そわそわに慣れてしまった花時計
マネキンへ私に似合う服をきき
母の目に子のそわそわは見逃さぬ

そわそわと見合いました顔も見ず
月ばかり冴えて願いはとどかない
そわそわに慣れてしまった花時計
マネキンへ私に似合う服をきき
母の目に子のそわそわは見逃さぬ

重人

雀踊子

しげる

律子

一風

浩一郎

正子

隆

度

美津留

欣之

幸

弘直

章

頂留子

シマ子

春子

幸枝

とみを

可住報

とよ子

恵美

純子

つや子

ヒサ子

一灯へ似合いの夫婦豆を煮る
マネキンが似合う、似合うと呼びとめる
歳と共に苦手が増える背は曲がる
おんなです、似合う鏡と語り合う
受け皿が苦手でいつも外野席
どれ着れば似合うか迷う母の日に
憎いとは言えず腹わた煮えかえり
苦手などとうに過ぎてる脂汗
妥協せぬ憎まれ口の理が通り
憎しみを消す石段を降りながら

川柳たけはら

森井 青居報

カエルみたいに泳げるようになりたいな 小四千
夕焼けが太陽のプレセントに見えました 小六史
コツコツとコツコツと来たご栄転
み仏に似て来た母の顔を拭く
好きでない人には好きとすぐ言える
ああ言えばこう言う夫婦ゲームかな
水鏡心の鬼がゆれてる
それからは用心をしてもを言う
悲しみをふっける服を買ってみる
もう少し醬油を足せば母の味
義兄の訃別れの顔が忘れられぬ
世羅の里静かに藤の下に立つ
色あせど忘れな草にある愁い
お寺さんにお布施の額を聞きに行く
運は天に奇跡を希う注射針
七十五白木の位牌となり給い
母の掌はいくつドラマを繰り返す

和一子 美智子 貞子 とみ子 百合子 テル 越山 文平 富美 可住
蘭幸 菁居 清水 比呂子 喜美子 愛子 栄恵 浪子 ヤスエ 夏喜 喜久恵 静佳 房枝 一枝

傘寿とて春はきますよ紅を引く
明日のため一歩後退しておこう
仏壇のお花も池の坊になり
しがらみをいつまで飛べる竹トンボ
お百姓の顔して庭のトマト摘む
逆立ちの足裏ひろい天仰ぐ
とうかささん恋知りそめた初ゆかた
夫より留守番電話淋しいね
雨音が好きだと言ったのは私
親分に鎖を長くして貰う
古日記ベストセラーの面白さ
無農薬虫が試食をしてござる
エアコンの風になじめず汗をかく

川柳塔きやらぼく

政岡日枝子報

谷底の私に青い空がある
産声をあげた小さな谷が出る
国民の休日それは谷間でず
りんご真ん中 愛をたっぷり聞いている
叩くのも愛のムチよと逃げている
骨まで愛し魚の甘露煮作り
きまぐれの愛に小犬も首かしげ
マリア様 あなたの愛には勝てません
そよ風に愛が生まれる藤の棚
夕暮れて可愛い馬鹿になつてゆこ
距離おいた愛よ夜空のふたつ星
霧の中愛の葛藤さけながら
サンクラスはすせば見える愛がある
酸欠の部屋では愛は生まれぬ

麻代 一路 笑子 静子 新造 令子 伸子 貞子 白狐 笹舟 千代美
千春 富美子 ふみ 日枝子 八重子 朗子 寿々子 保子 花子 純子 瑞枝 松子 玲子 恵子

屋根瓦いとしいものを光らせる
穏やかな愛てのひらに眠りたし

川柳高知

川竹 松風報

ジャンケンへ肩の力が入りすぎ
失投は一球だった負けだった
声高に国際電話へ応待し
女から女が抜けて呆けはじめ
無農薬自家菜園がよろこばれ
長老の舌がだんだんもつれだし
百姓の汗が市場で叩かれる
信頼をされたうれしい友が居る
抱きしめる中にはんとの母の愛
天才が作る地球を壊す核
天才の釣師彼女を釣り落とし
天才も馬鹿も一緒に呆けはじめ
方言が社内の空気をわらげる

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

一日のよこれおとした素顔です
ハブニング釜の御飯が炊けてない
影法師にさとられましたハブニング
現世はすべてハブニングハブニング
ハブニング夫婦随で寄せつけず
再婚へひよっこり帰った復員兵
菜の花の素顔を蜂になめられる
ハブニングみんなテレビで知られた
雷の素顔にしばし声も出ぬ
上気した素顔がとつても素適です

荒代 千代 春枝 圭風 菊野 幸泉 朱坊 千恵子 京子 佳風 功幸 松風 ちよえ 智重子 はるみ 蔵栄 民子 鈴江 かつ子 ヒデ子 芳枝 聖子

黄砂降るあの戦線を思い出し
ひるの月に起こされましたハブニング
半世紀素顔のままの妻が好き
幾星霜古墳の中にいた素顔

京都塔の会

松川 杜的報

簡單と言いつつうんざりする祝詞
「君の名はうんざりさせるすれ違い
一句をも抜けずうんざり帰る尼
雨三日うんざりしてる万歩計
古紙回取テープ擦り切れて擦り切れて
屑入れに競馬新聞捨ててある
子沢山一人ぐらいは屑もいる
屑籠に夫の私語が捨ててある
まめな夫は屑が粗大ゴミ
むだな時刻み思想は何もない
バセリ刻むことからコック教えられ
後向いてことごとく仕合せ刻んでる
胸ふかく刻み込まれてまだ逢えず
仏像を刻むと亡父の顔に似る
篆刻の構想を練る梅雨の窓
待つ方の心を刻む花時計
玉ねぎを刻む泣きたい時刻む
面影を刻んで楚々と喪の女
コーヒーが二つ楽しき小半刻
両の手を使える幸せ忘れてた
逝った子の齡を数えている両手
両の手を合わせた後は神まかせ

歌子 芳子

すっしりと両手に重い宮詣り
車椅子両手の力振り絞る
展望風呂真下の海が暮れてゆく
社は黒字この頃多い紙の屑
夜叉を彫る彫刻刀が夜叉になる
両手でも抱えきれない幸つかむ
両手挙げて賛成したい平和論

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

旅先で受けた親切今もまだ
思い出は汚さぬままの沙羅双樹
千人針縫った思い出爪を切る
想い出を大切にする老いの坂
戦友にやすまぬぜいたく時に詫び
大小屋に蚊取線香つけてやる
ぜいたくな女になって嫁にゆく
ぜいたくな暑い寒いと言ふ文句
五体満足ぜいたく言えはきりが
緊張を和らげる 咳一つする
トロリーチを持ち歩いてる老いの咳
咳一つ出すのがつらい通夜の席
父の咳氣遣うたまの里帰り
感激の余韻へ落す咳一つ
咳をする度に煙草を止めという
冷酒にレモン浮かべた風呂あがり
ハッサクが今年は花をたんとつけ
今日も雨明日も降るらし医者通い
部屋中にパンツ三日も続く雨
つまずいて人の痛さもわかりかけ

百合子 悦代 水客 飛鳥 大詩 倫子 澄子 弘治 敏之 清太 江美 義嗣 十四郎 修水 昌子 向西 石舟 六浦 紫香 美代 保藏 夢之助 歌子 女

川柳塔とつとり

岩原 喬水報

老いてなお黙っておれぬ損な性
口八丁黙ってなんかいられるか
夫婦げんか子らも黙って散ってゆく
選挙違反村中黙り探り合う
涙を魚に男黙って酒を呑む
黙認のふりして父の目が光る
盃を黙って乾している野心
沈黙の中で見つけた人の味
汗かいて稼いだ金は無駄にせぬ
信頼の握手汗ばむほど握り
汗顔の至り愚作が天に抜け
翔ぶ女汗を拭く度強くなる
向い風男の汗が試される
玉の汗かいて男の顔になる
知恵もなくせつせと汗をかいている
露の身に汗の雫をありがと
眠れない枕がしが午前二時
旅先で休む枕は落ち着かず
悲喜劇のすべては知っている
百億を枕に昼寝してみたい
枕三つ並べ我が家は平和です
青い鳥夢見てまくら替えました
手枕で身勝手な夢ばかりみる
ひざ枕妻にやさしく飼育され

川柳藤井寺

高田美代子報

出発になって慌てて鏡見る

宗一

出発のドラへ未練は残さない
再出発もえる女の時刻表

同じ轍踏まぬと誓う再出発
出発が遅れて難をまぬがれる
始発駅樹をはなれない蝶は夏
勢いをつけて人生の出発点

出発の汽笛を父は家で聞く

ヨイドン正直者は出遅れる

出発は右足からと決めている

売れ残った土地へ女の家を建て

駄目押しを大阪弁で言い残す

残り福のワインで少し酔っている

ドラが鳴る港に残す母一人

残照を背に受け終る好試合

残り福ミス日本と縁が出来

下積みの道をこっそり開けてやり

閉切った窓も開いたためた日

停年の父に開かぬバラシユート

下積みの汗で開いた花舞台

胸襟を開く友あり底辺に

幸せの扉を開ける鍵がない

開かれた会議へ最後に立つ男

たとう紙開く女の息になっている

十指みな開いて嘘のない夫婦

少し豊かになって開いた北の窓

父の日に父の手垢の本を繰る

西宮北口川柳会

林 はつ絵報

ドライフラワー花の命を封じ込め

トミエ

繁男

敦子

智久

淑子

吸江

きよし

美房

しげお

トミ子

柳太

一屯

悦子

キミ子

ときお

利武

与呂志

昭子

治子

志洋

三男

修六

ケイ子

美代子

寿美

森子

三郎

塾から塾へ子供心は乾ききる

喋るほどからから乾く胸のうち

自販機が並んで午後の街乾く

女七十家訓に耐えた土踏ます

三猿を通した母の座りだこ

川の字の短い足が謀反する

吉報を知らせる足が早くなる

夜遊びの猫に足枷など出来ぬ

ねずみ火花が足元を這う恋の闇

足しげく迷える小羊師のもとに

鈴足の白さ女の藍浴衣

細細と老舗まもって老母達者

ダイエツト過ぎて魅力のない女

細うでで八十路峠にさしかかる

紫陽花も女も雨に洗われる

洗い髪は鏡は見えない老いの自負

五月雨がやさしく洗う石だたみ

言い勝ったけれどやがては米洗う

祖母も亡母も髪を洗った川がある

二へんほど首を洗ったことがある

昼寝の妻に勿体ないよな風が吹く

聞いているのと妻に催促しかけられ

磨いても継ぐ子のいない床柱

娘が巣立ち互いにささえ合う夫婦

甲羅干す少年の瞳に明日がある

朝顔がきれいに咲いている目覚め

幸せの半分姑にそっと分け

ゴミ置場のソファー思わず覗き込む

ふり出しに戻り足元固めとく

宣子

宏子

よし津

光代

芳子

富久恵

風云児

房子

たず子

具栄

春蘭

江美

武庫坊

耕兵衛

いわゑ

香子

キク子

てる

年代

はつ絵

眉水

保蔵

園歩

ミサ子

正とし

美智子

富喜子

みつ子

紫香

サークル樟樟

友碓 雅子報

叫んでる自然の力普賢岳

海の家子ら食べられぬ活け造り

隠岐の島歴史の人が叫んでる

夏祭り浴衣姿でデートする

夏の風きっちり着た母と居る

大声で叫びたいよな時もある

万緑に叫ぶうっ憤はね返り

叫び声一杯詰めているポツケ

尺玉に詰める私の叫び声

丸帯がお粥に化けた終戦時

黙禱と慟哭の満てる夏が来た

酸性雨森の叫びが聞えそう

蟬螂の鎌振り上げて叫ぶ声

聴障川柳

稲田 豊作報

夕映えに明日も平和を祈る老い

難聴にあかるい明日の道しるべ

あしたまで休んで下さい洗い桶

明日という日のある限り夢を抱く

難聴もあしたの風に夢を持ち

急ぐまいぞ明日は明日の風が吹く

又あした あしたになれば又あした

意地っ張り明日も無言が続きそう

姿見を磨く あしたが見えるまで

ご返事はあしたと言わず直ぐ書こう

明日は我が身対岸の火を消しにゆく

はしご酒 明日の仕事にさわれねば

輝子

智恵子

三四子

登美子

今日子

千代子

雅子

美緒

泰子

ます子

キミ

薫子

薫風

豊作

真女

末子

鏡香

柳香

みつる

静子

文古

三香

行江

八恵子

美乃留

年取らば明日と言わず今のうち
明日は無い久遠のいのち今此処に

健太郎
珍妙人

打吹川柳会

奥谷

弘朗報

見送った尾灯が胸を締めつける
電話では叱った母が金送る
忘れ物送り届けてよるこばれ
人生の旅へ神楽で送り出し
金送れだけが親への子の便り
旅三日宅急便が先に着き
中元を送り何かと期待する
二度の職玄関までは送らない
野辺送り山の鳥も泣いている
子に送る老母にうれしい四季がある
子に送る野菜づくりに精を出す
子に送る着いた襦袢一人
子に送る荷物に詰める母の愛
カルチャーの妻を送迎しています
肩書がとれて見送る人まばら
送り物に金釘流のメモがある
年中の行事となつて梨送る
婆さんへ送るウインク届くかな
子に送るために耕し種を蒔く
出征の兵を送った駅がない
送り賃より安い諸を子に届け
Vサイン送る彼女が好きになる
仕合せを見送る側にいつもいる
送られて送つて峠道にくる
その愛を拒んで送る男なり

川柳やがわ(5月旬会) 高田

博泉報

弘朗

真心を送ることだけ考える

一芳

不在した三十分でえらいこと

良三

点と線赴任の父を結んでる

てまり

ぎりぎりの線で居直るサングラス

一鬼

年頃の孫へ電話が過熱する

波留吉

弟妹に年頃捨てて母子家庭

あいき

カーネーション母の乳房の匂いする

高栄

はんものになって磨きのかかる腕

頓坊

感激も忘却の彼方君の名は

勝一

味噌汁に今朝の機嫌も溶けてくる

三郎

直線に勝負をかけて鞭を打つ

シマ子

そら豆よあの風景をもつ一度

白水

ペルシャ湾やつと来ました掃海艇

権太

只今不在おことづけをと喋らされ

一笑

年頃も捨てて一筋今の地位

菜月

男子厨房に入り平和にふと怯え

かすみ

年頃へ靴をへらしてくる伯母

三峰

家中のタオルを替えて主婦の朝

藍子

点と線結ぶ推理が離さない

一途

切り抜いた料理なかなか作らない

時弘

濡れ落葉鼻髭だけがよく伸びる

光度

ブルーサイド泳ぐでもない脚線美

柳宏子

年頃になると不潔に見える父

度

まっ直ぐな視線に愛を疑わず

柳宏子

寝たきりの母まつ先に覗く朝

度

飛行雲一直線に天を切る

度

翠洋会

井上

照子報

思春期の傷乗り越えて強くなる
朝のめがねふつと外しているヒント
不在かと二階の裏も見て帰る
反骨の知事が自作のミニユメント

あやめ
英壬子
紫香
勇太郎

人波にもまれタツブリ稼指

蛙

網棚があるので靴また忘れ

拓生

吊り棚に花一輪を生けて見る

みよ子

縄のれんたつぷりついで今日流す

絹子

重いもの無理やでと夫棚をつり

ひろ子

岩棚の苔のしとねの石仏

すすむ

たつぷりと食べてグイェットグイェット

さと美

飾り棚きれいに本の背が揃い

凡子

宵宮のコンチキチンの人の波

英一

神棚に迷える羊手を合わす

照子

藤棚の青に似合って白い雲

正雄

神棚が鎮座まします裏長屋

恭昌

喜寿目ざしたつぷり溜める助走力

宣司

本棚の一番上に父の本

しげお

汗拭いて永六輔は今日も旅

正坊

たつぷりな時間に甘え無為無策

千歩

神棚とわたしと好物同じです

春子

裏おもてあつて人間味が出る

宏子

怖いものなし表街道まっしぐら

綾子

たつぷりと水掛け洗う父母の墓

光子

高い棚何を置いたか忘れてる

みつ子

もつたないもつたないが溜まる棚

楓

棚の猫百万両をかかえこみ

東雲

暑いです、ね日傘と日傘すれ違い
傾いた棚を夫婦で吊っている
暑さなどケロッとしてる貴花田
神さんのお札がたまる棚の上

川柳泉尾

吉川

寿美報

良江
透太
登志実
鬼遊

忘れてた自然の強さまざまざと
火砕流私も起きそうご用心
ご近所のでんぐ特価の肉を選び
溺れずには人生航路舟をこぐ

あの頃は本に溺れた青林檎
溺れかけた湖へまたもや足が向く
イルカさん解説つきで溺れてる
欲に溺れ空しく消える鶴の愛

溺れたのは父かも知れぬ丸木舟
無駄遣いゴミに溺れはせぬものか
贅沢と貧に溺れている地球
溺れまい他人の事ならよく分かる

溺れると知りつつ薬がはなせない
千鳥足それでも自転車押してゆく
まるでゲーム自転車くるまの間ゆく
主婦のツーリング特売日なのだろう

新しい自転車るるん風るるん
輪タクの頃は3Kなど言わす
僕の自転車たまには空も飛びたかろ
自転車を下りて野草に会いました

おだてれば走る自転車だと思つ
自転車がスイスイ行かぬ街の鬱
ワイングラスに沈まない白い哀しみ
美代子

美子

美子

情報に溺れ私を見失う
飽食に溺れないものねだりする
城北川柳会
吐田
公一報

(南)文子
寿美

一冊の絵本にアンデルセンが澄む
歯の痛みとてもつらくて母の愛
待たなし奥歯が痛む除夜の鐘
貧乏な暮しに耐えて陽の目見る

イラストで入門株も法律も
歯を抜くと言われて仕事や法事増え
哀しいね眠れぬ夜のもの思い
噛みくだく素晴らし歯を持つて

肉眼で時々見える亡母の星
下町のその下町のホルモン屋
魅せられてなお魅せられて辻ケ花
歯切れよい返事に心が救われる

要人の四角四面を肉の盾
うかつにも皮肉まじりで口を出し
新妻が本を勝手に料理する
しみじみと充実の日々繰る写真

冷や奴やたらに崩しうつつ晴らす
円満の秘決と姑は離れ住む
おだやかな日々好日を未来図に
孫の婚祖母も晴れ着を眺める

涙腺の緩み実家に締めに行く
先生が島を離れる日は小雨
尼崎いくし川柳会
春城
年代報

海外の空気を吸うて来た自慢

海外の空気を吸うて来た自慢

海外の空気を吸うて来た自慢

外地での時差ボケがまだ直らない
アルバムの父の写真にある外地
外地から帰って来たという笑顔
ユトリロの街を旅情の片隅に

今だから笑い話になる外地
お隣の芝生がやけに青すぎる
なごませる言葉を投げている芝生
芝草の青さへ美術館静か

一生の夢は芝生のあるお家
団らん笑いこぼれている芝生
青い芝草話が落ちていく
ゆり椅子にぬくもりがある冬の芝

公園の芝は愛の言葉を聞き飽きる
吊草がギヤルの谷間をのぞきこみ
以下同文さりと急所外される
活け造り急所をしめた美味い鯛

涙には弱い男を掌にのせる
切札の急所は一つ残しとく
裏切った数だけ急所握られる
入居者の決まらぬ軒につばめの子

念仏のころどこに亡母がいる
山を背にねむの花見梅雨晴れ間
相反す趣味に夫婦で飽きもせず
風鈴に夢をもらつた幼い日

闇の奥から軋がって来る雷さん
引き出しにこわれた夢が詰めてある
長雨にでんでん虫が這うてくる
それなりに姿淋しく見る鏡

遅れても休みはしない白い杖

遅れても休みはしない白い杖

遅れても休みはしない白い杖

堯
伊三郎
作二郎
歌子

敬
凡九郎
萬的
みち子

芳子
保藏
正一
武庫坊

文夫
ミサ子
六浦
定人

杜的
諷云児
栄
静夢

正子
澄子
英子
年代

園歩
敏之
キク子
紫香

紫香

紫香

紫香

南大阪川柳会 金井 文秋報

ぼっくり寺の石段とかげ生き続け
水すまし程の泳ぎをして生きる
どん底で今にみてると生きている
汗流す男の顔が生きている
ご飯作る約束があり生きている
処世訓壁で生きてる社長室
下積みの汗が省略されている
策略を忘れてしまふほど食べる
賞罰のない略歴を書いている
ご簡略にと司会者メモをもつてくる
省略をしすぎて意味がわからない
躰きへ意外な人の手が温い
土産店意外と思う品はない
悪役の素顔意外に優しくて
羞恥心捨てた意外なブラカード
崖に立てば意外に脆い策だった
見栄のない日課お寺の鳩といふ
スーパ―へ指のダイヤを外さない
見る人が見ればエロのような見栄
疲れるよ見栄はよそうよ冷奴
意外なところで出会うバツの悪い顔
見栄捨てて飲めば気楽なコップ酒
どうせ見栄笑ひ話にしときまひよ
口切った手前あとへは退けぬ見栄
難壇に並ぶと比較されやすい
秀才の兄をいつでも引合いに
お隣をチヨボチヨボだから比較する

作一郎 信治 柳宏子 公一 智子 頂留子 重人 冬葉 雀踊子 慶三 章久 楓楽 文秋 直子 柳伸 シメ子 萬の 章 度 憲太郎 文江 新造 凡九郎 庸佑 奏月 寿美 凡子

比べない事になっている老いの幸
比べてる女の目線すばしい
比較して分相応の贈り物

佐川川柳会

赤川

菊野報

ばら色の明日が待っている誓詞
永遠の誓いをしたにワイドショー
約束は必ず守る花の種
約束はないが逢えそう回り道
美しい人善人と限らない
石積んでつんで仏に逢えるなら
シナリオをまた書き直し五十章
連休も土産話で足る余生

高槻川柳サークル卯の花 辻白溪子報

恥じらいもあつてういういしい老女
シャガールの裸婦三人に無駄がない
温もりと支援が欲しい大惨事
戦争の無駄が砂漠に埋もれる
人生のケジメをハワイでつける旅
ハイレッグもう恥じらわぬ娘たち
うっかりと誘いに乗って恥をかく
無駄だとは知りつつ並ぶジャンボくじ
子定表埋まらぬうちに雨季となる
無駄だとは思わず続けるグイエット
悲しい事です養錢箱に鍵が要る
ストレスを溜めて無駄口多くなる
無駄足になって仕舞うた帽子掛け
女遊びを無駄とはしない芸の虫

勝美 トミ子 シマ子 朱坊 健二 佳風 千鳥 千恵子 菊野 幸泉 竹萌 節子 静江 稲子 恵美子 如水 正坊 女 春風 紫香 萬的 杜的 芳子 しげお 武庫坊

あいづちを打てば裏切ることになる
知らん顔で人妻と出るラブホテル
横なぐりの雨に止むなく裾濡らす
哀しみのかたちで雨季になったまま
弟は四歳恥を知らず近く
家の恥子どもは外でみな喋り
広告塔街の孤独に耐えている
雨の日は雨のポーズで爪を切る
電話代無駄な話が多すぎる

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

志願して七つボタンは征ったきり
七夕の銀河流れて今宵逢う
紫陽花の雨を羽織った七変化
七重八重札を尽くせば馬鹿がつく
前後ろ序列乱れず安心し
拾われたらしい小犬が鳴き止んだ
枝豆が男の議論聞いている
葬儀屋に家紋きかれて出す袱紗
言過ぎた火はいつまでも燃えている
草笛を鳴らした道が遠くなる
新しい傘さして出る銀の雨
いつからか驚鳴く声を忘れてる
先走る欲に自製の効き目ない
雲山に動くものなし仏法僧鳴く
天神祭お迎え太鼓 蟬も鳴く
力にはなれぬが愚痴だけ聞いてあげ
エンピツで金釘流の祖母達者
手入れする野菜は人を見て育つ

年代 波留吉 眉水 冬葉 猊沓 庸佑 英子 諷云児 白溪子 慶子 一笛 英子 落児 登代子 博史 つえ子 きく子 吉太郎 悟郎 薫 明吉 富子 器水 明光

■各地句会だより

竹原川柳会

小島 蘭 幸

昭和三十一年九月二十四日、竹原川柳会創立。今年の九月で三十五周年を迎えます。

夫婦相和して百まで踊らんか

山内静水会長のこの句のように、竹原川柳会は、情熱と和をモットーにしております。

月例会は、毎月十日までの土曜日の夜に開催しています。月例会に出席できない人のために、四月の春の吟行、十二月の忘年句会は、日曜日に開催しております。特に春の吟行は好評で、家族揃って参加する人も多く、三島・大久野島・大崎上島・的場公園と、花見を兼ねた和やかな句会です。春の陽射しをいっぱい浴びながらの楽しい句会、春の吟行が現在の竹原川柳会の竹の子たちをすくすくと育てたのだと思います。

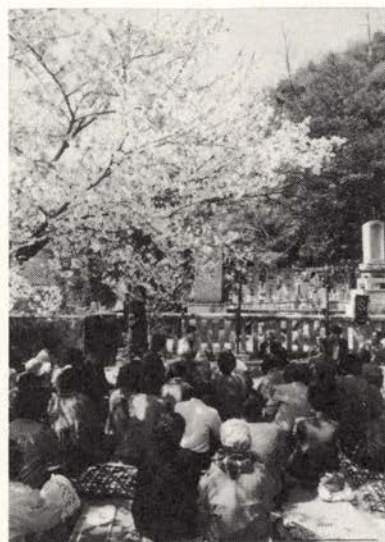
あめがふるよかきにもいっぱいふるよ
さくらの木の下で手をつなぐ

現在、中学一年生の岩本晶美・晴美さんの小

一・小二時代の作品です。川柳塔同人の岩本笑子さんの娘さんで「竹の子二世」です。

竹原川柳会を大きく育てられた静水さんは昭和三十八年二月、三代会長に就任されています。当時の竹原川柳会は、句会出席者十名ほどの小さな小さな会でした。その年の三月に私を含めた竹の子（中学三年生）四名が入会しています。作句教室を川柳塔社の故清水白柳先生が担当、後に故菊沢小松園先生が担当されています。近詠鑑賞は、現在、広島川柳会会長の石原伯峯先生が担当されていて、内容の充実した月刊誌を発行して現在に至っております。ある時は速達で、また、ある時は旅行先から、白柳先生の函に衣を着せぬ短評は、当時の竹の子達の胸を躍らせたものです。二十八年経った今でも鮮やかに甦ってきます。

川柳大会は、昭和三十三年九月に第一回近県川柳大会を開催しています。昭和五十二年の第二十回近県川柳大会まで毎年開催していましたが、以後二十五周年、三十周年、誌齢四〇〇号と記念の年に開催するようになりました。その



楽しい吟行句会

間、小さな会としては異例と思えるほど、句集を発刊しています。学生合同句集「竹の子」個人句集「再会」、遺句集「鉄道草」、合同句集「竹の里」、家族句集「おかげさま」、個人句集「卒寿の春」、合同句集「竹の里二集」、合同句集「川柳で竹原をよむ」等々……

情熱と和で竹原川柳会を育てられた山内静水会長は、今年三月五日にお亡くなりになりました。誰よりも楽しみにしておられた竹原川柳会創立三十五周年「学生句集・竹の子」第二集発刊川柳大会を九月八日に開催いたします。山内静水会長追悼川柳大会です。皆様のご参加を心からお待ちしています。

大会を目ざすりボンが出来上り中三宏子

第5回 堺市民芸術祭川柳大会

と き 9月29日(日) 13時開場
ところ 堺市立梅文化会館
3階第1講座室
(泉北高速鉄道とが美木多駅3分)

おはなし「晶子展よもやま話
俳人 八木三日女氏
宿 題 「海」 重谷 峰彩選
「星」 奥山 晴生選
「弟」 河内 天笑選
「肌」 住田英比古選
「生家」 墨 作二郎選
「波乱」 西田柳宏子選
「出会い」 梶川雄次郎選
席題なし
各題2句(締切14時)

参加賞 1000円(作品集・参加賞呈)
主催 堺市文化団体連絡協議会
堺川柳協会

第38回八尾市民文化祭 川柳大会

と き 10月13日(日) 正午
ところ 八尾文化会館4F 第1会議室
(近鉄八尾駅下車
西武デパート東隣)

会 費 1000円(作品集・鉢植花呈)
宿 題 「市」 土田 欣之選
「唄」 小出 智子選
「恋」 前川千津子選
「僧」 大路 美幸選
「花」 古川 一高選
「兵」 梶川雄次郎選
「水」 西尾 梨選

締 切 午後1時(各題2句提出)
懇親宴 3000円(希望者のみ)

主 催
八尾市・八尾市教育委員会
八尾市文化祭実行委員会

東大阪市文化祭参加 第19回 市民川柳大会

と き 10月20日(日)
正午開場・締切1時
ところ 東大阪市立社会教育センター
(近鉄布施駅北へ5分)

宿 題 (各題2句・出席者に限る)
「港」 高橋 白兎選
「橋」 石川 勝選
「天女」 西川 景子選
「一流」 波部 白洋選
「道」 半井 甘平選
「ころ」 池田 南岳選
「ゲスト」 西田柳宏子選
席 題 当日発表 竹内 良伸選
会 費 1000円

主 催
東大阪市文化連盟
東大阪市川柳同好会

第41回岸和田市文化祭 市民川柳大会

と き 10月27日(日) 正午・締切14時
ところ 岸和田市市民会館地下会議室
おはなし 河内 天笑

席 題 当日1題発表 福浦 勝晴選
兼 題 「機転」 河内 月子選
「ヒント」 久保田元紀選
「案外」 小出 智子選
「お世辞」 阿萬 萬的選
「演技」 野村太茂津選
「貫禄」 橘高 薫風選

○兼・席題とも2句
(出句は出席者に限る)

会 費 700円(大会誌・参加賞呈)

主 催
岸和田川柳会

河村日満氏を偲ぶ川柳大会

とき 10月20日(日) 午前10時開場

ところ しいたけ会館 対翠閣

(J R鳥取駅から徒歩7分)

TEL (0857) 24-8471

お話 「日満氏を偲ぶ」 西尾 栗氏
兼題 (各題2句・正午締切り)

「日の丸」 阿 萬 萬 的 選

「満 足」 森 中 恵美子 選

「偲 ぶ」 板 尾 岳 人 選

「温 泉」 恒 松 叮 紅 選

「丘」 八 木 千 代 選

「ふるさと」 土 橋 螢 選

「おいしい」 小 林 由多香 選

会 費 出席 2000円(作品集・昼食・記念品)

投句 1000円(作品集呈・10月10日必着)

懇親会 2000円(希望者・当日受付)

投句先 〒680 鳥取市瓦町五二七 岩原 喬水

主 催 川柳塔とつとり

大阪文化祭 第43回 川柳大会

とき 10月26日(土)

午前11時開場・午後1時締切

午後2時から披露および表彰

ところ 大阪府中小企業文化会館

(地下鉄谷町線「谷町9丁目」または

「四天王寺前」下車)

兼題 「時事雑詠」 柏 原 幻四郎 選

「凄 い」 久保田 元 紀 選

「笛」 谷 口 光 穂 選

「指」 友 田 茶の子 選

「他 人」 中 田 たつお 選

「澄 む」 神 谷 凡九郎 選

席 題 当日2題発表

選者 田頭 良子・河内 月子

出 句 兼・席題とも2句(出席者に限る)

会 費 1000円(作品集代を含む)

主 催 大阪府・大阪市
大阪府・市教育委員会

柳界展覧

編集部

★NHK学園『川柳春秋』

22号の「この人に聞く」に
橘高薫風本社理事長が10頁
にわたって大木俊秀氏と対
談、また、同号の「川柳・

初心のころ」に嘉数兆代賀
さん（岡山・理事）が「マ

イペースで」と題して執筆

「一人50句」に本社同人の

安平次弘道氏が「蟹気楼」

遠山可住氏が「太陽の子」

として収録されている。

★翠洋会は結成以来、会長

をつとめてきた山根いつを

氏が7月で辞任、上田登志

実（本社理事）氏が後任に

選ばれた。

★第9回夜市川柳大会は8

月4日、堺市総合福祉会館

に101人が参加して開かれ、

次の10人が秀句に輝いた。

石に化けた一途なものを

語り継ぐ 後藤 正子

豊かさには転ぶ貧しい若者

よ 中井みきお

毒薬と書いてないからお

そろしい 中島 夢成

みんなときどき一つの嘘

をかばい合う 上妻 炎志

繭紡ぐおんなになりぬ川

明かり 柿木 英一

コップの花枯れてる放浪

画家の旅 柿木 英一

夾竹桃がざわざわとして

計がとどく 森中恵美子

どこに逃げてにもぎり飯

が置いてある 政岡日枝子

月光は静かなるかな添い

遂げむ 中尾 藻介

パンが焼けるとにっこり

とするわたし 後藤 正子

★第46回尼崎市長文芸祭大会

川柳部門で本社同人の2氏

が一席と四席に入選した。

①返事するように仏の灯が

揺れる 堀端 三男

④多情仏心コスモスが揺れ

ている 松川 杜的

★大阪市環境保健局は健康

をテーマにした川柳を募集

している。資格は大阪市内

居住者で官製はがきに作品

（3句）と住所・氏名・性

別・年齢・電話番号を記入

して9月14日までに大阪市

北区中之島1-3-20・大

阪市環境保健局保健部保健

指導課へ。

★兵庫のまつり「ふれあい

の祭典91」川柳祭の発表大

会は10月27日、加西市民会

館で開かれ、入賞者に対し

文部大臣奨励賞・兵庫県知

事賞などが贈られる。

▼お便り△

■堀江芳子さん（島根県・

参予）「ご心配をかけまし

たが、完治見込みないまま

一応、6月に退院となり、

週1回、通院しています」

▼計報▲

■中西兼治郎（同人・大阪

市）氏令宰うめさんは7月

3日、肺結核のため、死去

された。80歳。

■河内天笑・月子（常任理

事・堺市）氏の尊父、野坂

源男氏は7月25日、前立腺

ガンのため死去、76歳。告

別式は同27日行われ、橘高

薫風理事長らが参列した。

■岸本木魚氏（同人・橋本

市）は8月8日、動脈瘤破

裂のため死去、82歳。告別

式は同10日に行われた。

▼お願い▲

■9月から11月にかけて大

阪府下はじめ各地で川柳大

会が開かれますが、この欄

に速報したいと思えますの

で各題秀句（天位句）と作

者名を川柳塔社事務所へお

知らせください。（編集部）

▼訂正△

■8月号P58下段18行目

「扶養家族」↓「家族」

P89下段の天の句「滅びの

岸和田 川柳会	26日(木)午後6時から 余る・慰問・うけうり・煙	岸和田市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東徒歩5分 〒596 岸和田市上町7-36 植山武助
川柳 東大阪	28日(土)午後6時から 高い・虫・カーテン・隅	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5-6-23 桑原喜風 句会費 500円 投句料 62円切手3枚

★特に記載がない場合 句会費 500円、投句料 310円（62円切手5枚）、各題3句以内
原稿送り先（締切・毎月20日 予め決定している場合は何か月分でも結構です）

〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

9 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 お よ び 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	8月31日(土)～1日(日) 伝える・時々・親・バス	吟行と西日本川柳大会参加 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
尼 崎 いくしま	6日(金)午後1時から 王 様・破 る・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田測定人 句会費 300円 投句料 62円切手 3枚
川 柳 塔 わかやま	8日(日)午後1時から 分ける・話題・笑う・輪	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町14 野村太茂津
西宮北口 川 柳 会	9日(月)午後1時から 髪・高い・吹く・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ 句会費 300円 投句料 62円切手 4枚
川 柳 塔 ま つ え	10日(火)午後1時半から ポイント・味・人並み	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
八尾市民 川 柳 会	10日(火)午後6時から 月・ドアー・食欲・夜半	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
川 柳 ねやがわ	15日(日) 正午から 釘・旅・旗・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 62円切手 3枚
もくせい 川 柳 会	16日(月)午後1時から 九・太鼓・退く・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
京 都 塔 の 会	18日(水)午後1時から 袖・目立つ・地元	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1 松川杜的 句会費 350円 投句料 62円切手 3枚
富 柳 会	19日(木)午後1時から 甲斐性・学 者・片手	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
南 大 阪 川 柳 会	19日(木)午後6時から 英断・煙・前後・照る	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 62円切手 3枚
高槻川柳 サークル 卯 の 花	20日(金) 正午から 結果・男・淋しい・自由吟	高槻市民会館306号室 阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児 句会費 500円 投句料 62円切手 3枚 各題2句
南 海 川 柳 会	20日(金)午後6時から 開発・舌打ち・軒並み・入場	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
はびきの 市 民 川 柳 会	22日(日)午後1時から 勝手・助ける・ウエット・(真ん中)	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

編集後記

★「どのペンにかえてもやっぱり僕の文字」——川柳ではじめて「賞」と名のつくものをいただいた私の句。

ペンは外来語の中でも好きなことばの一つで、筆記具だけでなく、文筆活動から広く文化一般を象徴することばともなっている。長年

「書く」ことを仕事としてきたので、ペンへの思いが強く、これをモチーフとした句を多くつくっている。

★最近では、すっかりボールペンが主流となつてしまつたが、やはり古代エジプト以来の羽毛ペンの流れをくむ万年筆が筆記具の王者であることにはかわりが無い。この万年筆がわが国に輸入されたのは、一八八〇（明治十三）年で、当時は一般には手のとどかない貴重品、一九一八（大正七）

年によやく国産化された。★現在、外国のメーカーとしては、ドイツのモンブラン、ペリカン、フランスのウオーターマン、アメリカのパーカー、シェーファーなどが「名品」として知られ、国産ではパイロット、

セーラーが老舗を誇つており、セーラーは戦時中もかたくなに片仮名の商標を守つたことで知られている。★ペンも道具である以上、問題はブランドよりも使い心地で、これには相性もあり、私はいろいろと試みた上、十年前にバリの三越で買ったウオーターマン、普及品のシェーファー、国産のセーラー21を愛用し、ブルー、レッド、ブラックのインキで使い分けている。さて、ペンと剣といつても

対比されるが、永久にペンの優位を信じたい。（正）

◇最近、手紙を書くことがめつさり少なくなつて来た。確かに手紙より電話の方が手取り早いし、確実ではある。しかし電話では用件だけで済みやすく、どうも事務的になりがちである。遠くにいる古い友達に

手紙を書き、どんな返事が来るだろうと待つのは楽しいものだ。実にくだらぬことを書いても、書かれて来ても、それなりに愉快なものだ。宛名だけ書いてはつたらかしにしてある四十円の葉書が、本の間から出てきた。

◇何十億光年のかたに、はたまた何十億かの星があるまで、そこへ星が生れ、また消える。この壮大なロマンスにふれたい。また一国の大政治家から一介の庶民に至るまで、無数の人がくり広げている生活、そこにある人生の哀歓をつづつてみた

くて、秋の夜長にキャスターマイルドに一服つけては句帖をいじくっている。◇学生時代に、洋服のポケットや着物のたもとを新聞紙の上にひっくり返し、煙草の粉とごみをより分け、そいつを辞書の一ページで巻くのだが、えらいもので

半分ぐらいあつた。その頃、よもぎを干したり、なまの松葉を吸っているのがいましたなア。（し）

☆スポーツの秋、食欲の秋。今年の国民体育大会は石川県で行われる。大分、昔に比べて、昭和二十三年の第三回福岡国体の時の話、終戦直後のことで、どこへ行くのもお米持参、国体の宿舎も例外ではない。大阪府陸上競技選手団の一員として、少女の私も出場した。☆はつきりした数字は覚えていないが、選手団全員が規定のお米を旅館に提出し

たにも拘らず、御飯が異常に少なかった。その時、男子短距離選手として同宿の和泉高校の家庭科の先生が（記憶に間違いなければ）

「渡した米で、こんなに御飯が少なはずがない」と旅館に理路整然と抗議して食事を改善してもらつた。☆その時の家庭科の先生が今、テレビの料理番組で有名な土井勝先生である。テレビでの分かりやすい話し方を聞いていると、その当時のことを思い出す。

☆記録を十分の一秒縮めるために燃やした情熱、努力。十代半ばと現在を比べるのは無理ではあるが、その頃の何分の一でもよいから、情熱を手繰り寄せたいと思う。幸い、川柳と言うコースを見つけたのだから。短距離とは違い、じつくりと腰を据えて、情熱を失うことなく努力したい。（み）

作品募集

11月号発表（9月15日締切）

川柳塔 (10句)	西尾 葉選
水煙抄 (10句)	黒川 紫香選
銀河系 (3句)	河内 天笑選
茴香の花 (3句)	小出 智子選
吟勝 (つ)	上田 柳影選
課題 (3句)	「見学」 西原 艶子選
「ツアー」	米田 恭昌選
初歩教室「借りる」 (3句)	辻 白漢子担当

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

12月号課題吟 「普通」「払う」
「映画」

お 願 い

「川柳塔」「水煙抄」欄への投句は、本社所定の『川柳塔用箋』をご使用ください。同用箋は1冊200円で、送料は1冊250円、2～3冊360円、数量がまとまれば「ゆうパック」がお得です。

定価 六百元（送料51円）
 半年分 三千八百円（送料共）
 平成三年 八月二十五日印刷
 平成三年 九月一日発行
 編集兼 西 尾 巖
 発行人 藤原 童心 社
 印刷所 ウエラ第2ビル202号室
 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六
 〒545
 発行所 川 柳 塔 社
 電話（三友）六一六九一四番
 振替口座大阪8一三三六八番

本社 9 月旬会

日時	9月6日(金)午後5時半
会場	メンズファッションセンター3階
おはなし	中央区内本町1-1 電06・941・1918 地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点西南角
兼題	「削る」 阿 萬 萬 的
	「香水」 田 中 透 太 選
	「効く」 河 内 月 子 選
	「鎖」 小 池 し げ お 選
	「簡単」 金 井 文 秋 選
	西 尾 棗 選
席題	1 題 当日発表 各題2句以内
会費	500円
投句	柳 箒 (4cm×19cm) 1葉に1句を書き、 投句料310円(62円切手5枚同封のこと)

本社10月句会 6日(日)

兼題 「自然」「救う」「栄える」
「それぞれ」「人気」

NHK川柳作品募集

課 題 「占 う」 森中恵美子 選

ハガキに3句 9月10日締切

投句先 〒540 大阪市中央区馬場町3-43

NHK大阪放送局

「ラジオセンター」川柳係

発表 9月29日(日)ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課 題 「コーヒー」 橘高 薫風 選

ハガキに3句 9月15日締切

投句先

〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20

大手前ウサミビル3階

西日本文字放送 川柳係

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで
住居の事なら何でも相談できる店

豊津住宅株式会社

本社 豊津住宅KKビル

〒564 吹田市泉町5丁目28-27 TEL (06) 330-0102

豊津店

〒564 吹田市泉町5丁目11-14

TEL (06) 330-0006(代)

FAX (06) 388-6102

関大正門前店

〒564 吹田市千里山東1丁目9-21

TEL (06) 388-6166(代)

FAX (06) 388-6886



泣いて笑って……

夜を通り過ぎたら

また陽がのぼっていた

男のロマン



オーエスケーの
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540 大阪市中央区南新町1-4-7
(06) 941-8018